平成 16 年度～17 年度

「青少年国際人材育成」研究報告書

財団法人かながわ学術研究交流財団

ま　え　が　き

財団法人かながわ学術研究交流財団（K-FACE）は、三浦半島に位置する湘南国際村を拠点に、人文・社会科学分野を中心とする学術研究、文化交流、人材育成事業の推進を目的として設立された公益法人です。

平成16年度より、新たに神奈川県内の高校生世代を対象として、国際人材育成を目的とした湘南国際村青少年国際セミナー（Kanagawa Program of International Training：通称K-PIT）を開催するにあたり、有識者7名による研究会を組織し、育成すべき「国際人」像やセミナーのあり方、そして最適なプログラム等について検討を重ねてまいりました。

本研究会での成果を、県内外の自治体や様々な団体でご活用いただき、青少年の国際人材育成にお役立ていただくことを目的として、このたび研究報告書をまとめました。本報告書は、国際人材の育成に関わる議論やセミナープログラムの作成プロセス（第1部）、研究会に基づき実施したセミナーの概要（第2部）、そして研究成果発表会（第3部）というように、事業のはじめから終わりまでの全体を俯瞰し、全てのプロセスを追うことが可能となっております。また特別寄稿として、研究委員のお一人である江藤裕之氏に、国際人材の育成におけるリベラル・アーツ教育の実践および今後の展望についてご執筆いただきました（第4部）。

本研究会は、もともとセミクローズドでの開催であったため、議事録の一部を公開することについて判断に迷いました。しかし、神奈川県内外で国際人材育成事業を展開している団体や、宿泊型の人材育成事業を新規に展開しようと考えている他の自治体にとって本当の意味で参考となるよう、発言者を匿名の上で発言内容の要旨を掲載することとしました。このことにより、本研究会においてどんな可能性が提示され、またどんな議論を経てプログラムの作成へとつながったのか、また研究会で提案されながら実現には至らなかったプログラムや、セミナーを実施後の反省に基づいて変更した点など、具体的なイメージをお持ちいただけることと存じます。

それぞれの団体や自治体等によって、「国際人」という言葉の解釈や育成すべき人材像は異なるでしょう。しかし、参加者にとってより良いプログラムを提供したいという思いは共通しているはずです。本報告書がその礎の一部となれば幸いです。

最後に、この場をお借りしまして、研究委員の先生方、セミナーにご協力いただいております各方面の方々には、改めてお礼申し上げる次第です。

財団法人かながわ学術研究交流財団
専務理事　　富岡　隆夫

目　次

○はじめに　…5ページ

○第1部　「青少年国際人材育成」研究事業
研究会開催の背景　…9ページ
「青少年国際人材育成」研究会　研究委員　…10ページ
研究会開催一覧　…11ページ
平成16年度　第1回研究会　…12ページ
平成16年度　第2回研究会　…16ページ
平成16年度　第3回研究会　…21ページ
平成16年度　第4回研究会　…31ページ
平成17年度　第1回研究会　…39ページ
平成17年度　第2回研究会　…43ページ
平成17年度　第3回研究会　…51ページ
平成17年度　第4回研究会　…56ページ

○第2部　湘南国際村青少年国際セミナー
セミナー実施一覧　…63ページ
平成16年度 湘南国際村青少年国際セミナー　…64ページ
平成17年度 湘南国際村青少年国際セミナー「入門編」　…66ページ
平成17年度 湘南国際村青少年国際セミナー「発展編」　…68ページ
平成18年度 第1回湘南国際村青少年国際セミナー　…70ページ
平成18年度 第2回湘南国際村青少年国際セミナー　…72ページ
平成18年度 第3回湘南国際村青少年国際セミナー　…74ページ

○第3部　「青少年国際人材育成」研究成果発表
開催概要・プログラム　…79ページ
Piece Of Peaceの活動報告　…80ページ
基調講演　…82ページ
パネルディスカッション　…90ページ
質疑応答　…104ページ

○第4部　特別寄稿
「高校生世代を対象としたグレート・ブックス・セミナーの可能性」　…115ページ

はじめに

最初、K-FACE からこの話をいただいた時は、正直言って迷いました。私の専門は経済学、とりわけアフリカをはじめとする開発途上国や南北問題であり、決して「教育学」の専門家ではないからです。しかし、海外での長い研究・教育生活を経験してきた大学の一教員として、高校生世代を対象とした国際人材の育成とは何か、またそのためにはどんなプログラムが適しているのかという 21 世紀型の関心は常々あったため、結果的には研究会の「座長」という大役をお引き受けすることになりました。お引き受けするに当たり、高校生世代の教育を考える研究会になぜ分野外の大学教員が参加する必要があるのか、またそこでどんな貢献ができるのかについて改めて考えました。その一つの答えとしては、大学教員は人材育成プログラムの中で一つのアジェンダを示すことに存在意義があるということです。それぞれの専門分野の視点から「世界」の見方を提示することが、大学教員に求められた役割だと考えます。

ただ、一つだけ心配だったことは、この研究事業、そして研究成果を踏まえて実施する青少年国際セミナーに対して、主催団体である K-FACE、そして予算の補助を行っている神奈川県がどれほど本気で取り組んでいるのかということです。国の各省庁でも、様々な研究会が組織される一方で、実質的には結論がすでに出た状態にある施策に対して、有識者がお墨付きを与えるだけの研究会も見られるからです。結論から言えば、私の心配は当面全くの杞憂に終わりました。合計 8 回の研究会を通じて、議論の主導権は常に研究委員にお任せいただき、それぞれの専門分野にとらわれず、様々なことを自由に発言できる環境がありました。

研究会のメンバーは、高校の教員 2 名、大学の教員 4 名に K-FACE の役員を加えた 7 名で構成され、「そもそも国際人とはどういったものであるか」という、まさにゼロから手探りの状態で出発しました。我々が目指した国際人材育成とは、いわゆる大学受験のためのノウハウを与えるものではなく、ものごとの本質を探る思考能力と、多様性をそのまま受け入れることのできる心的態度を養成することを基本とするものです。ともすれば、「国際＝英語ができること」などと捉えられがちですが、英語ができる、できないよりも、まずは他者に語るべき何かを持つために、ものごとを見る多様な視点を養ったり、考えるためのツールを与えることが重要だと考えました。また、「育成すべき国際人像」については、われわれの研究会ではあえて特定の人物像を想定しませんでした。それよりもむしろ、「世界の入口」として、様々なものに広く触れて、それぞれが感じたことを大切にしてほしいという共通の思いがありました。この意味からは、「人材」の育成以上に国際社会でも通用する「人格」の形成への「入口」であったと言っても過言ではないでしょう。

本研究会の役割は、教育のあり方についてただ話し合うだけでなく、実際にセミナーを運営し、人材育成を行うことにまで及んでいました。研究会で人材育成のあり方を検討し、その理想を達成するため具体的な運営方法等について検討し、プログラムを作成し、セミナーを実施する。また、セミナーの実施後には改善点を探り、次回のセミナーを更に良いものにするために議論を重ねる。こうした一連の作業を最初から最後まで行うことができたのは、私にとっても学ぶことの多い、貴重な体験となりました。

幸いにして、研究委員には高校の教員や、国際理解教育の分野に造詣の深いメンバーがいたことで、高校生世代に適した学びのスタイルを模索することができました。研究会では参加型の学習スタイルの重要性が指摘され、専門家や著名人の話しを参加者が一方的に聞くだけにならないよう、プログラムを工夫しました。ワークショップに多くの時間が配分され、経験を積んだファシリテーターによって進行されました。また、K-FACE の独自の研究成果である「グレート・ブックス・セミナー」の手法を応用した、リベラル・アーツ教育の要素を取り入れ、容易に答えの出ない課題について参加者同士が真剣に話し合う場が設けられたことは、彼ら、彼女たちにとっても貴重な体験ではないかと思います。

また会場として使用した湘南国際村センターは「緑陰滞在型」の施設として、国際会議等での使用を目的とした立派な施設です。そこでの 2 泊 3 日間は、高校生世代にとって非日常的な雰囲気にあふれています。この「宿泊」と「非日常性」がセミナーの効果をさらに高めています。

私が考える「国際人」の第一の条件は、あいさつができることです。英語ができても挨拶ができなければ「国際人」とは言えないでしょう。また、高校生世代には知識だけではなく、基本的なものの見方や考え方を大切にしてほしいと考えています。自分とは異なる、異質なものに出会ったときに、それを最初から排除するような思考態度では、グローバルな世界に対応することができません。異質なものを排除しないためには、若いうちからのトレーニングが重要です。とりわけ神奈川県には、16 万人もの外国籍の方々が生活しており、県民 55 人に一人は外国人という内なる国際化が進んでいる県で、身近な所からも多文化の共生が学べます。

例えば、セミナーでは参加者に対して次のようなメッセージを伝えました。

1．身近なモノやコトに素朴な疑問を持ち、その背景を探り、世界の様々な出来事と結びつけてみること。
2．モノやコトの相互の結びつきを分析する力を学ぶこと。
3．五感を駆使して歩き、考え、そして歩くこと。体を動かすということが必要です。
4．日本語と英語以外に第三の外国語を少しでも学ぼうとすること。地域の言語を覚えるのは、相手に対する敬意。三つ目の言語をやることで、世界が一層広がり、更に相手の地域の中に入っていける。

本研究会は平成 16 年度、17 年度の 2 年間だけでしたが、研究成果を活用したセミナーはまだ続いていくようです。2 年間では満足な検証結果が得られたとは言えませんが、国際人材育成プログラムとしての一つの「型」を社会に提示することはできたのではないかと思います。今後、この K-PIT がどういった形に発展するのか、或いはどこかで消えてしまうのかは不明ですが、21 世紀の主役となる青少年を育成するという視点から、「思考力」と「多文化共生マインド」を兼ね備えた人物の養成は必要不可欠であると思います。その目的を達成するため、事務局である K-FACE には、全国に先がけてグローバル化時代に対応した自治体の中の財団として今後も多様かつユニークな可能性を探りつつ、人材育成を実践してほしいと思います。

明治学院大学国際学部 教授
勝 俣 誠

第１部

「青少年国際人材育成」研究会

【研究会設立の背景】

神奈川県が平成15年度に策定した新総合計画「神奈川力構想・プロジェクト51」では、「未来を担う人づくり」という政策課題が提言された。国際的に共通する課題を認識し、関係機関等における様々な活動拠点で活躍できる人材が求められている現状に鑑み、国際性豊かで国際協力の精神と実践力を備え、次代を担う人材を育成するとの方向性が示された。

このことを受け、K-FACEでは従来から実施している大学生を主たる対象とした「国連大学グローバルセミナー」および「湘南国際村インカレ国際セミナー」に加え、新たに15歳から18歳までの青少年層を対象とする「湘南国際村青少年国際セミナー」を開催するはこびとなった。

K-FACEとして初の試みとなる若年層を対象とした人材育成事業のあり方を模索し、参加者の学習効果を高めるべく、有識者７名による研究会を組織し、学校教育等で実施されている既存の国際理解教育との連携を図りながら、それらを補完するセミナーとして、2泊3日の日程の中で、達成すべき目標と最適なプログラム内容について研究した。また、セミナー実施に当たって高校教育のカリキュラム、青少年の受容能力などを調査するとともに、初年度の実施経過と個別プログラムの評価・検討に基づき、高校生及び18歳以下の一般社会人向け短期宿泊型国際教育セミナーについて、独自のモデルを構築した。

「青少年国際人材育成」研究会　研究委員

座　長	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	県立向の岡工業高校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	旦　祐介	東海大学教養学部 教授
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	かながわ学術研究交流財団 専務理事

（五十音順）

【研究会開催一覧】

○ 平成 16 年度 第 1 回研究会
日　時：2004 年 11 月 18 日（木）18：30～
会　場：明治学院大学白金キャンパス「91 会議室」

○ 平成 16 年度 第 2 回研究会
日　時：2004 年 12 月 1 日（水）18：30～
会　場：明治学院大学白金キャンパス「91 会議室」

○ 平成 16 年度 第 3 回研究会
日　時：2005 年 1 月 21 日（金）18：30～
会　場：明治学院大学白金キャンパス「91 会議室」

○ 平成 16 年度 第 4 回研究会
日　時：2005 年 3 月 29 日（火）14：00～
会　場：湘南国際村センター「特別研修室」

○ 平成 17 年度 第 1 回研究会
日　時：2005 年 7 月 6 日（水）18：00～
会　場：フォーラムよこはま「会議室 2」

○ 平成 17 年度 第 2 回研究会
日　時：2005 年 8 月 25 日（木）18：00～
会　場：かながわ県民センター「第 1 会議室」

○ 平成 17 年度 第 3 回研究会
日　時：2005 年 12 月 1 日（木）18：30～
会　場：かながわ県民センター「第 1 会議室」

○ 平成 17 年度 第 4 回
日　時：2006 年 3 月 28 日（火）15：00～
会　場：湘南国際村センター「特別研修室」

平成 16 年度 第 1 回研究会

【 開 催 概 要 】

日　時：平成 16 年 11 月 18 日（木）　午後 6 時 30 分から
場　所：明治学院大学 白金キャンパス 本館 9 階 「91 会議室」
内　容：青少年を対象とする国際人材育成のあり方について、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	旦　祐介	東海大学教養学部 教授
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事
事務局	田中　不二夫	神奈川県企画部企画総務室 湘南国際村担当
	工藤　浩	財団法人かながわ学術研究交流財団 総括主幹
	広崎　勉	同　主事
	安藤　智孝	同　職員内定者

【 議 事 録 】（要旨）

■セミナーの方向性

委員 A

「国際問題」は範囲が広い。それぞれの事象が有機的に関係していることを理解させたい。

委員 B

「国際理解」という大きな枠を設定した上で、「人権」等のキーワードや小テーマを設けるとよい。ポイントは、参加者が「何を得て帰るのか」にあるだろう。

委員 A

国際的に活躍できる人材、人間像について考えたい。国際的な人材とは、いろいろなことを受け入れることができる人間、つまり「正しい、間違い」の二元論で異なる意見を潰さない人間ともいえる。国際問題というと主に政治化した問題が取り上げられるが、それに特化した教育をする必要はない。

事務局

一概に高校生世代といっても、セミナー参加者のレベルは一定ではない。多くの参加者に適応するには、どういうプログラムが有効なのかを考える必要がある。

たとえば、国際感覚の入り口、スタートに立てるようなものを提供するとか、学校

ではできない、湘南国際村で開催するセミナーだからこそできるものを考えてはどうか。

委員B

「国際問題を学んでいこう」という意欲を育てることが大切ではないか。何を勉強しに来たかが明確なセミナー参加者であれば、自分でテーマを見つけるはず。意欲を絶やさせないプログラム、仕組みづくりが必要。

事務局

「国際」ということだが、セミナーのプログラムとして英語教育なども考えるべきか。

委員C

セミナーそのものを英語で開催するのは難しいが、語学に興味を持つきっかけとなるようにすると良い。また、セミナーの主体を参加者に任せることで、様々なテーマを生徒から出させるようにしたい。

委員B

一つのテーマをドンと与えるのではなく、個別のテーマに関する議論や作業などを通じて、最終的に大きなテーマに即した結論が導かれるという方法が良いのではないか。

また、セミナーへの入り口の敷居はなるべく低くするべきだと考える。「エリート教育」になってはだめだと思う。

委員D

身近な問題からスタートするのがよい。関心はあるけれども知識がないので、不本意ながら何も発言できないというセミナーにはしたくない。知識や能力にあまり左右されない、話し合いの基礎となるような何かを提供すると良い。

委員B

学習手法としてはフォトランゲージが有効。写真から何を感じるかには、専門性や知識は関係ない。知識を深めるためのイベントではなく、「共有し、話し合う」場、コミュニケーション重視の場を提供したい。

委員A

「世界を語ろう」などの大きなテーマがふさわしいだろう。

委員C

「普段聞けないような話が聞けそうだ」と思わせる、学校の仲間とは違う仲間探しの機会のような･･･思ったことを語り合える場になれば、参加者は満足感を得て帰るだろう。

委員A

このセミナーを、参加者がそれぞれの持つ「国際人としての夢を語る場」としてもおもしろい。

委員A

「自分だけが存在しているのではない」という気づきが大切であり、それは一種の開発教育だと思う。

委員C

「自分達と遠いと思っていたところが、実は近い」という意外性を提供したい。その場に参加した人が、知識量に関わらず一斉にスタートできるテーマ設定が良い。

■プログラム

委員Ｂ
教材として写真、ビデオ等の映像媒体が有効だ。参加者に身近なところから入る方が良い。

委員Ｆ
ずっと一つの大きなホールで話し合うだけでなく、大小様々な空間があった方が良い。また、参加人数として50名を想定するのであれば、グループ分けは必要だろう。高校生世代なら休み時間を使って上手くコミュニケーションを取るものだ。

委員Ｂ
大きい集団よりはグループの方が良い。グループであれば、10人程度が一番やりやすい。
また、アイスブレイキングは必ず必要なので、その際に同じ学校からの参加者を分けるようなグループづくりと、ワークショップという構成ではどうか。

委員Ｄ
自分が常にプログラム全体の流れのどこにいるのか、何をやっているのかが把握できるようにしなければならない。そうすることで、参加者それぞれの目標が立てやすくなる。

委員Ｅ
「世界がもし100人の村だったら」(以下、「100人村」）のワークショップでは、貧富の格差を体験するため、ジュースの量をグループごとに差をつけるプログラムがある。セミナー期間中の晩ご飯の量に格差を設けるプログラムなども検討できる。

委員Ｂ
ワークショップの学習効果は、それを進行するファシリテーターの技量によるところが大きいので注意が必要だ。

■留学生の参加について

委員Ｅ
参加者に留学生がいたら良いのではないか。

委員Ｃ
ロータリークラブに相談して、留学生の参加を促すことも可能だ。

委員Ｂ
実施するセミナーの目的が国際交流が目的ならそれでも良いが、留学生がいることで討論が薄まってしまう可能性があることは留意すべき。

委員Ｄ
日本で育った外国人の生徒は自分のことを語る場がないので、彼らにもぜひ参加を呼びかけたい。

■参加者の募集方法

委員Ｂ
サイエンスキャンプの場合、参加者の80%以上が学校の先生などの紹介によって参加している。広報のやり方としては、ポスター等の媒体による働きかけだけでなく、県内の学校などに直接出向いてプレゼンテーションをする必要性がある。

事務局
神奈川県は「特色ある県立高校づくり」

を掲げ、国際理解教育もテーマの一つとしているので、そういう重点高校への働きかけが可能だ。

委員Ｃ

女子生徒の場合、グループや仲間意識が大きいので、誘い合わせて応募することが考えられる。募集に関しては「国際部」の先生や、教科別の研究会にてPRしてはどうか。

（以上）

平成 16 年度 第 2 回研究会

【 開 催 概 要 】

日　時：平成 16 年 12 月 1 日（水） 午後 6 時 30 分から
場　所：明治学院大学 白金キャンパス 本館 9 階 「91 会議室」
内　容：青少年の国際人材育成のあり方、セミナープログラムについて、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事
事務局	田中　不二夫	神奈川県企画部企画総務室主幹 湘南国際村担当
	工藤　浩	財団法人神奈川学術研究交流財団 総括主幹
	広崎　勉	同　主事
	安藤　智孝	同　職員内定者

【 議 事 録 】（要旨）

■プログラム

事務局

3 月に開催を予定しているセミナーでの講義は、研究委員の先生にやってもらいたい。ご自身での講義を受け持たず、どなたか外部の講師を呼ぶことも可能。

委員 B

このセミナーを「ここで何を勉強するか」ではなく、その後の「きっかけ」になるようなものにしたい。自分で何かを気づくような･･･。

プログラムには「地球家族フォトランゲージ」等を使う。講義ばかりのカチッとしたものよりも、開発教育のワークショップなどを通じて「気づき」につなげたい。参加者による学習レベルの違いはあるが、意識が高くなるような、このセミナーが出発点になるようなものにするべき。

委員 D

高校生世代の集中力の持続性などを考慮して、若干レベルを落としたプログラム案を作成した。「プチ国際人」というキーワード。

「100 人村」や「バナナとわたし」などのワークショップをおりこんでいきたい。

委員 C

外国人から見た日本の良いところや、日本について知るパネルディスカッションを

通し、日本人としての自信回復へつなげたい。

委員A
いろいろ退屈させないようにプログラムを考えたい。1 日目は顔合わせ、2 日目は建物の外に出るなど。国際村のある三浦半島は環境資源に恵まれているので上手く活用できないか。

委員B
神奈川県国際交流協会が作成した「カレーキット」などを使ったワークショップなどはどうか。また、JICA 横浜センターに行って、海外からの研修生と一緒に食事や交流することも検討できる。

委員D
夜は先方の研修生が忙しいのではないか。

委員A
日本人だけで話し合うのではなくて、途上国の現場でがんばっている人に会うということはおもしろいと思う。

委員D
英語で会話をすることになるのでは。

委員B
高校生でも片言の英語でなんとか会話している。

委員D
事前にワークショップで研修員に対する質問を用意してから出発することも考えられる。

委員B
15 分くらいのバングラデシュのビデオを見せ、援助として「ただものをあげれば良いのか」などを考えさせる教材もある。主催者側として、参加者にどういう刺激を与えていくかさえはっきりしていればよいだろう。問題は参加者の学習レベルではなく、こちらからの「投げかけ方」と、それが「盛り上がるか」という視点から考えるとよい。
また、ワークショップの深みと言う意味では「100 人村」より「貿易ゲーム」が良い。

委員C
最近は「新・貿易ゲーム」が発行されており、これもおもしろそうだ。

委員B
ワークショップは議論に参加するための入り口と考え、貧しい国、豊かな国を体感することで、「こんなひもじい思いをするのか」という疑似体験を与えることが重要。
「貿易ゲーム」は進め方によって全く違うもの、新しいものにできるし、対象者によってレベルも様々に設定できる。ワークショップは 90 分、講義は 60 分が限度だろう。
ワークショップの中には、日本を開発するゲームもある。これは日本に援助するおもしろいゲームで、「気づき」から「どうしたら格差を生じさせないようにするか」という意識の芽生えを促す。
最終日には、アクティビティーで学んできたことをまとめる意味で、グループ発表などがあると良い。

■タイトル

委員A
「語る＋α」のタイトルがよいのでは。いわゆる「講義」だけではないことを短い文章で伝えられれば良い。「語ろう」ではなく「世界を感じて話し合おう」はどうか。いろんな人と友達同士という感じで。

委員B
メインタイトルと合わせて副題があると良い。

委員A
「私」、「自分さがし」という言葉は良いかもしれない。

委員D
「入り口に立とう」というフレーズは良い。

委員A
「世界の入り口に立とう」＋動詞。

委員A
『世界の入り口に立とう
～感じる、遊ぶ、語ろうわたしたちの役割』で良いだろう。「教てやる」という感じではなく、共感を呼び起こすようなものでなければ高校生世代はついてこない。

■基調講演

委員A
そもそも基調講演は必要だろうか。仮に講演があるとしても、その人の話がセミナー全体を総括するようなイメージを与えてしまわぬよう、最終日にはしない方が良いと思う。

委員C
福岡で開催された「日本の次世代リーダー塾」では、マハティール元マレーシア首相の講演が高校生世代の感動を呼んだという例がある。普段聞けないような人の話を聞けたというのが良い。

委員B
NGO 関係者が活動している所のスライドを見せながら、世界で活躍している＋α の話があると良い。NGO のリーダーなど、例えばルワンダで義足の支援活動を行っている吉田真美さんなどはどうか。神奈川県出身者として。

委員A
そういう人の方が強烈なインパクトを与えるかもしれない。しかも若いので、参加者が共感しやすい。

委員G
世界にはこんなに悲惨な状況があるということばかり強調され、どうしても悲壮にならないだろうか。

委員A
基調講演まで大げさにしなくても良いのではないか。

委員D
「基調講演」だと確かに堅いイメージ。

事務局
広報する際の便宜的な部分で、名前のある人間がほしいという側面もある。

委員G

「報道ステーション」でコメンテーターとして顔が売れている朝日新聞の加藤千洋は打診が可能。

委員B
『世界がもし100人の村だったら』の翻訳者である池田香代子さんも良い。

委員C
「国際人育成＝どういう日本人を育成するか」という視点から緒方貞子さんはどうか。

委員G
このプログラムは「何のためにやったのか」という意義を納得させるような講演を、最後に持ってくるべきではないか。

委員A
これから進むべき理想を我々が一つに絞ってよいのだろうか。それぞれの受け止め方があるので、最後にまとめる必要はないと思う。

委員D
オープンエンド的な終わり方をすることによって、プログラムの中で「語る」という意味が出てくるのではないか。

委員B
最後に参加者が発表をすることは必要。

委員A
弓削昭子さんは、理想像としてのサクセスストーリーだが、みんなが彼女のようになれることではない。ならば、加藤千洋さんの方が良い。

委員D
プログラムの中に「開発教育」の要素が多く入っているので、開発とは直接関係ない人として加藤千洋さんの方が良い。

委員A
基調講演をやるならば、プログラムの最初の方に入れたほうが良い。あらかじめグループ分けをして、根回しして質問を用意させると良いだろう。

■セミナーの方向性

《第1回研究会事務局配布資料より》
○セミナーの方向性について
(1) 国際的な課題と日本が果たす役割
(2) 国際協力において日本が占める役割
(3) 国際社会に生きるための人間形成

委員A
セミナー全体の方向性としては、事務局案の(3)「国際社会に生きるための人間形成」というのが良い。「わが国」という表現は避けたい。国際社会の入り口ということは他者への理解であるべきで、ナショナリズムではなく、まずは違いを受け入れることを強調したい。

委員B
「今わたしたちができること」の方が良い。

委員A
「どんな世界をつくりたいのか」から「自分は何ができるのか」という流れで考えたい。例えば、「国連で働く＝国益を捨てる」ことであり、国民としてよりも人間として必要なことが先に出てくるべき。

（以上）

委員Ｇ
「国際社会に生きるための人間形成」を中心にして、「人間形成のあり方」へ向けて枝を伸ばしていく感じはどうか。

■グループディスカッション

委員Ｂ
ディスカッションをする前の題材、きっかけ作りが必要。そういう意味ではゲーム、ワークショップでファシリテーターによって意見を引き出してもらわなければ難しい。ファシリテーションの技能は特殊で、レベルの高い高校の教員でも難しいものだ。

事務局
ファシリテーターをだれがやるのかが重要となってくる。

委員Ｄ
まずはワークショップ、ゲームを通じて「感じる」ことから入る方が良い。高校生世代だと知識の限界もある。

委員Ｃ
ゲームから「気づき」を引き出し、そこから次につなげることは良い。

委員Ｂ
例えば「フォトランゲージ」を活用する。あまりこちらでガチガチに時間を決めるのではなく、グループで自主的に集まることが重要。

平成 16 年度 第 3 回研究会

【 開 催 概 要 】

日　時：平成 17 年 1 月 21 日(金)　午後 6 時 30 分から
場　所：明治学院大学 白金キャンパス 本館 9 階 「91 会議室」
内　容：湘南国際村青少年国際セミナーの実施について、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	旦　祐介	東海大学教養学部 教授
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事
事務局	田中　不二夫	神奈川県企画部企画総務室主幹　湘南国際村担当
	工藤　浩	財団法人かながわ学術研究交流財団　総括主幹
	広崎　勉	同　主事
	安藤　智孝	同　専門員

【 議 事 録 】(要旨)

■1 日目のプログラム

委員B
1 日目は全体のプログラムの大きな流れを提示し、今、何をやっているのかを明確にするべき。実際に運営してみると、2 泊 3 日という時間はとても短い。プログラムの中でアイスブレイキングをした方が効果的であり、形だけのアイスブレイキングでは何もならない。

委員A
最初のグループ分けをどうするか。

委員B
同じ学校からの参加者同士が固まらないように配慮すべきで、事前に主催者側でグループ分けをした方が良い。50 人はすごく多いので、その場で参加者にグループ分けや役割分担をさせるのは時間がもったいない。

委員A
入り口は大事。高校生世代だと友達同士で固まってしまうのではないかと思う。

委員C
こういうプログラムに参加する生徒は、普段の学校生活とは違う人と触れ合いたいと思っているのではないか。最終日までに

50 人の大部分と接する機会を与えるプログラムがあるといい。

委員Ｅ
セクションＩに、アイスブレイキングを含めてはどうか。特別講演からセクションＩという流れになる。

委員Ｄ
セクションＩでは「フォトランゲージ」ワークショップを行うのが良い。参加者が最初に具体的な事例に触れていると、次の講義もやりやすい。

委員Ａ
自由討論のグループは自然発生的に組ませるのが良いか。

委員Ｂ
あらかじめ主催者側で 10 カ国を用意しておいて、「地球家族フォトランゲージ」ワークショップのアンケートを基にこちらでグループを分ける。5 人前後のグループで、インターネットや参考資料で調べて発表する。そのグループに学生アドバイザーや先生方がついて作業してゆけばよいのではないか。討論というよりは、興味ある国に対するアプローチを行う感じで。

委員Ａ
グループに分かれることで、使用する会場はどうなるか。

委員Ｂ
ひとつの部屋にいくつかのグループを入れてやらせれば良い。互いに刺激し合う。

委員Ｅ
そういう意味でも学生アドバイザーは必要だろう。事務局の案では 6 人となっているが。

事務局
先生方の人数と同数になるようにした。パソコンについては、必要ならばグループごとに用意する。

委員Ｂ
最近の高校生世代はパソコンのプレゼンテーションソフトを使って発表する。パソコンは必ず必要だろう。

委員Ａ
教員はその場にいないほうが良いのではないか。

委員Ｂ
雑談しながら入っていくような、気軽な感じで参加すれば良い。

■2 日目のプログラム

委員Ａ
前回の研究会では、会場をどこかに移動するという案が出ていたが。

委員Ｂ
JICA 横浜を訪問するのは良いが、セミナー開催時には研修員がほとんどいないようだ。自由討論は①、②に継続性がある。青年海外協力隊 OB・OG に来てもらう。

委員Ａ
プログラム案Ａでは、教員が 180 分を担当することになっているが、この点はどう

か。

事務局

実際のレクチャーは30分程度にとどめ、あとはワークショップやゲームを想定している。

委員E

プログラム案Bは「開発論」的な流れが良い。「貿易ゲーム」は参加者がはまるだろう。ただ、プログラム案Aのように多様性を持つことを考えると、ちょっと開発分野に偏りすぎかもしれない。

委員B

「貿易ゲーム」の中で環境問題を取り入れることもできる。ワークショップを進行するファシリテーターのやり方によるだろう。

委員A

やはりワークショップはプロの方にやってもらうのが良いだろう。

委員B

JICA 横浜国際センターや地球環境戦略研究機関（IGES）など、他の施設に行かなくても解決できる部分はある。あまりプログラムが盛りだくさんだと、一つひとつがかえって薄まってしまうのではないか。

事務局

前回の研究会で、①外に出る時間をつくる、②息を抜く、という案が出されたので、プログラムに IGES の施設見学を入れた。

委員B

昼食時間が一時間半あるので、グループでオリエンテーリングをやってはどうか。湘南国際村内のどこの施設をまわってくるとか、宝捜しとか。安全面が確保される範囲で、遊びの要素を昼休みと合わせてやる。キーワードを集めさせて賞品を与えるなど。

委員D

湘南国際村内には高度な研究機関や大学院大学があるので、各施設にインタビューをしてまわるというのはどうか。

委員G

それぞれの施設はある程度クローズドな部分が大きいので、訪問時間の割りに事務局の下準備が大変。

委員B

湘南国際村センターの建物内でのキーワード探しでも良い。

委員A

午後のプログラムまではどこかを歩くというようなフレキシブルな感じにしておいて、中身に関しては…お昼休みにレクチャーはしないということだけは決めておけば良い。

委員F

2 日目午後のプログラムとして「グレート・ブックス・セミナー」をアレンジした、リベラル・アーツ教育のプログラムを考えている。全体のプログラムの流れをここで大きく二つに分けるようになってしまうため、プログラムをどう入れるかが問題。事前に本を読んできてもらって感想を聞く…というのは難しいだろう。

「貧困」などのキーワードを織り交ぜながら、グレート・ブックスの紹介を 40 分程

度。事前にアンケートをとっておいて、その内容を全体でシェアしながら、「あなたの知らない自分」を見つけるきっかけとなる時間にしたい。漠然と「リベラル・アーツとは…」とやるよりは、「貧困」や「経済」などにテーマを絞って西洋古典などを紹介。ビデオでグレート・ブックスを30分紹介、100分でも可。グループに分けず、50人まとめてやる。

委員B

プログラム案Aには「自分☆計画」とあるが、それよりも参加者にはまず何が本当に大切なのかを知ってもらいたい。たとえば、バングラディッシュのビデオを見せて、正しい人間のあり方を考えるなど。一日のまとめに近い、もう一段深く考えさせるものが良いのではないか。

「開発と援助」では10人くらいのグループで、各先生がついて多少助言を与える程度で良いのでは。90分でそういったものをさせたほうが継続性、一貫性が残るのではないだろうか。10年後の自分には、ぱっと手紙が書けないと思う。

委員A

この時間には、僕ら教員は引っ込んでも良いのではないか。

委員B

「自分☆計画」の時間から、国別の調べ学習の作業に入っても良いのではないか。自由討論も含めて。

事務局

学生アドバイザーの役割はどういったものか。

委員B

ワークショップやゲームでの潤滑材。

委員A

委員のコンセプトとアドバイザーの方向性が一致しなければまずいだろう。

委員B

むしろ、ファシリテーターと学生アドバイザーで意図が伝わるように、一度打ち合わせが必要ではないか。

学生アドバイザーの人数は6人で良い。ファシリテーターはフォトランゲージに1人、貿易ゲームに1人、青年協力隊10人、学生アドバイザーが6人、ファシリテーター6人・・・1ゲームに1人。

ファシリテーターは「貿易ゲーム」を作成された木下理仁さんにお願いしてはどうか。

委員A

ファシリテーターの候補者としては上條直美さんも良い。青年協力隊のOB・OGの参加については、ボランティアベースでお願いしたい。

■3日目のプログラム

委員A

最後にセミナーの締めとして発表があると良い。

委員B

10グループで各10分ずつ。アンケートは何日までに事務局に郵送するかを指示して、自分への手紙を家で書かせる。高校生世代はちゃんと書いてくるだろう。それらの提出を応募条件の中に明記しても良い。

原稿用紙２枚の感想文も含めて。

委員Ａ
大学生のスタディーツアーの場合は、新鮮な印象を飛行機の中で書いてもらい、全員その場でひとまず提出してもらう。書き換えたければ、後から差し替え分を提出するというやり方。

委員Ｂ
アンケートだけならそれでも良いだろう。感想文まで書かせるのであれば、プログラムがギチギチに詰まっているので、感想をまとめることまで気が回らなくなり、なんとなくバーっとやってしまう。逆に、家に持ち帰って郵送となれば、ちゃんとやる。

委員Ｃ
アンケートだけなら当日書かせて、何かテーマを決めて原稿用紙何枚書かせるというのならば、後日郵送で。全員とはいわなくても、書いてもらえれば良い。

■各プログラムの名称について

《セクションⅠ》

委員Ｂ
題は重要。子供たちが見てイメージしやすいものが良い。

委員Ｄ
「異文化理解って何？」はどうか。

事務局
特別講演のタイトルですでに「異文化」を使っている。

委員Ｂ
「地球家族・異文化って何？」はどうか。文化の多様性を勉強するセクションなので。

委員Ｄ
「地球家族」はインパクトがあって良い。

委員Ｂ
「地球家族・私の存在、あなたの存在」が良いだろう。

《セクションⅡ》

委員Ａ
「あなたの知らない『世界』」はどうか。

委員Ｇ
「あなた」を他のものに変えたほうが良い。

委員Ｂ
担当する教員の専門に近い言葉はどうか。

委員Ａ
「安心できる世界とはなにか？」、「安全」だと交通安全のイメージが先に連想されてしまう。「安心して暮らせる世界とは？」。「人間の安全保障」、「地域紛争」、「少年兵」、「児童労働」などをテーマに。

委員Ｇ
「幸せ」という言葉はどうか。

委員Ｂ
それぞれの幸福観について考えさせるのは良い。

委員Ａ
「世界の中で幸せと安心を考える」。他者がいないと幸せや安全は達成できないこと

に気がついて欲しい。「金があれば何とかなる」ということではない。

「豊かさってなに？―安心できる世界」が良いだろう。

《セクションⅢ》

委員Ｆ

「目に見えないものを考えよう――グレート・ブックスとの対話――」でお願いしたい。

事務局

セクションⅢを 14:00 開始にして、16 時から休憩、16:15 分から自由討論というプログラムでどうか。

委員Ｂ

「自由討論」ではなく、「テーマ学習」「課題学習」という名称はどうか。

委員Ｇ

「調べて話し合おう」が良い。

■参加者の選考について

委員Ａ

参加者を選考するのであれば、断る理由ははっきりするべきだ。

委員Ｂ

日常どういう活動をしているのかもポイントにして、12 点満点で点数化してはどうか。

委員Ａ

点数化をするのであれば、わかりやすいように項目を作るべき。

委員Ｄ

普段から国際協力などで活躍している人ばかりではなく、今回、初めて興味を持った人に来てほしい。男女のバランスはどうか。

事務局

応募締め切りの時点で、男女比を改めて委員に相談したい。県内の高校生世代であれば外国籍でももちろん参加が可能。

委員Ｂ

日程的にどの程度で締め切るかは重要。締切日をただ延長しても人は来ない。開催日から計算して、1 ヶ月くらい余裕を見て設定してはどうか。

■アドバイザーについて

委員Ｂ

学生アドバイザーは、数よりも質が問題。ワークショップのプログラムに慣れていれば良いが…。参加者にとっては、進路を考えるにあたって、良い刺激を与えるような存在であることも望ましい。

とにかく、コミュニケーションの取れる人間が良い。

委員Ａ

学生アドバイザーがあまり上昇指向の強い人ばかりだとどうかと思う。すべての人が国際舞台でバリバリ活躍しなければならないというわけではないので。

事務局

セミナー当日は参観者も受け入れる予定。

（以上）

【 プログラム案Ａ 】

全体の流れ

まず参加者の国際的関心を促すためにワークショップを中心とした国際理解教育を行い、その後、人格的成長を促すきっかけとなる「リベラル・アーツ」のプログラムを行う。セクションⅠでは、価値観の違いを受け入れることの重要性、異文化理解を促す。セクションⅡでは、現在の発展途上国の現状についての知識を踏まえ、世界的なつながりについての認識を持たせる。セクションⅢでは「リベラル・アーツ」について学び、個人の人格形成に寄与する「グレート・ブックス」を体験を通じて学ぶ。最後にそれら学んできたことを、「10 年後の自分」にあてた手紙という形式でまとめることで、このセミナーが各参加者にとって将来を考える際の指針として役立つようにする。

1日目

13:00：受付開始

13:20：開会式・オリエンテーション

13:40：アイスブレイキング「入口のいりぐち」（仮題）（30 分）

担当：遠藤先生

目的：アイスブレイキングおよびグループ分け

詳細：初めて会った参加者同士が打ち解ける場を設けることで、後のプログラムへの積極的参加を促す。「グループ分けゲーム」によってグループを作り、アドバイザーを進行役として「キーワード自己紹介」を行い、グループ内での親睦を図る。

14:00：特別講演（60 分）

テーマ：「世界で起きていること」（仮題）

講　師：松本仁一氏（朝日新聞編集委員）

15:00：休憩

15:30：セクションⅠ「わたしの存在、あなたの存在」（仮題）（150 分）

担当：遠藤先生、佐久間先生、細谷先生

目的：異文化理解をする上で欠かすことのできない「異質なものの受け入れ」について認識させるきっかけとして、自他の価値観を照らし合わせる作業を行う。

詳細：最初に「フォトランゲージ」を行い参加者同士で相互に価値観を照らし合わせ、お互いの価値観の違いについて認識する。アクティビティーのふり返りの後、細谷先生から異文化理解についての講義を受ける。また、海外体験を持たない多くの高校生にとって、外国人は生活圏の外に存在する「外人」であると考えられる。異文化環境に置かれた者の視点に対する気づきを促すため、「非識字体験」アクティビティーを行う。

18:00：チェックイン・自由時間

18:30：ウェルカムパーティー

20:00：自由討論Ⅰ（90 分）

グループリーダー〔司会〕（1 名）、サブリーダー〔ご意見番〕（男女 1 名ずつ、リーダーの補佐、班員の体調管理、集合時間の管理）、ライター〔書記〕（2 名）、ボーダー〔黒板〕（1 名）、ゲートキーパー〔連絡係〕（1 名、鍵および筆記用具の管理）、ジョーカー〔盛り上げ役〕（1 名、とにかく積極的に発言する）等、参加者全員に何がしかの役割を担わせることで、それぞれが主体的に参加しやすい環境を作る。二日目からのプログラムに備え、グループ内での親睦を深める時間として使用する。

22:00：就寝

２日目

7:30：朝食

9:00：セクションⅡ「あなたの知らない『世界』」（仮題）（180分）

担当：勝俣先生、旦先生

目的：世界を動かしているシステムを学び、開発途上国に関する知識の向上、世界の現状についての深い理解を促す。その上で、グローバルな問題に対処する「人間の安全保障」という概念について学ぶ。

詳細：世界の動き、開発途上国の現状に関する勝俣先生から講義の後、「100人村」の要素を組み入れた「新・貿易ゲーム」を行い、世界の現状についての認識を体験を通じて深める。アクティビティー後、各グループで「○○国」の立場としてどう感じたのかを話し合い、その後全体の場で各グループの意見を吸い上げ、問題点について話あう。休憩後、旦先生から「人間の安全保障」という概念について講義を受け、「貧困の輪」アクティビティーを行った後、貧困解決の方法についてグループ内および全体で議論する。

12:00：昼食

13:30：湘南国際村内施設（IGES）見学

IGES（財団法人地球環境戦略研究機関）の施設を見学した後、同機関の研究員から「国際問題としての地球環境」（仮題）をテーマに講義を受ける。

14:30：休憩

15:00：セクションⅢ「名著は人生のコンパス」（仮題）（120分）

担当：江藤先生

目的：人間としての人格の向上をめざす「リベラル・アーツ」という概念について学び、学びの方法としての「グレート・ブックス」を体験する。参加者の人格形成を進め、今後の生き方を考える上での財産となることが期待される。

詳細：江藤先生の講義によってリベラル・アーツの重要性について認識を深めた後、その実践手法として「グレート・ブックス」の模擬セミナーを行い、グレートアイディアスという概念について学ぶ。

17:00：休憩

17:15：セクションⅣ「自分☆計画」（仮題）（60分）

担当：全員

目的：参加者がこのセミナーを通じて感じたことをふり返り、「紙に書く」という作業を通じて自分の将来について思いをめぐらせる時間を与える。

詳細：セミナーで受けた感動や問題意識は時間と共に薄れがちであるため、その時点で自分が感じていることを保存する目的で書き留める。「10年後」の自分への手紙を書き、それを封筒に入れて各自が持ち帰る。また、各グループごとに、各自がこのセミナーで得たことを話し合い、最終日の発表テーマについて意見交換をおこなう。

18:30：夕食

20:00：自由討論Ⅱ（90分）

グループ発表の準備。発表テーマは各グループが自由に設定する。

22:00：就寝

3日目

7:30：朝食・チェックアウト

9:00：グループ発表（90分）

各グループ15分の持ち時間で発表する。発表形式自由（模造紙、パワーポイント、寸劇等による発表が予想される）

10:30：休憩

10:45：講評（40分）

勝俣先生20分、その他の先生5分ずつ。

11:30：アンケート記入

11:50：修了証書授与式

12:00：フェアウェル・パーティー

13:30：解散

※2日目午後の代案

12:00：昼食

13:30：セクションⅢ「名著は人生のコンパス」（仮題）（120分）

担当：江藤先生

目的：人間としての人格の向上をめざす「リベラルアーツ」という概念について学び、学びの方法としての「グレート・ブックス」を体験する。参加者の人格形成を進め、今後の生き方を考える上での財産となることが期待される。

詳細：江藤先生の講義によってリベラルアーツの重要性について認識を深めた後、その実践手法として「グレート・ブックス」の模擬セミナーを行い、グレートアイディアスという概念について学ぶ。

15:30：休憩

16:00：セクションⅣ「日本とわたし、これからのわたし」（仮題）（120分）

担当：佐久間先生ほか

目的：このセミナー全体を通じて学んだことを振り返り、自分のアイデンティティーを問いつつ、自らの将来について思いをめぐらせる時間を与える。

詳細：アドバイザーの中から留学生や海外経験のある日本人など3名を選出し、佐久間先生の司会で「日本人を考える」というテーマでパネルディスカッションを行う。その後、プログラム全体を通じて感じたことを「10年後のわたし」に宛てた手紙という形で書き記す。これは、セミナーで受けた感動や問題意識は時間と共に薄れがちであるため、その時点で自分が感じていることを保存し、後に生かすのがねらいである。同時に、最終日の発表に向けて、グループ内で問題点を整理したり、発表テーマについての意見交換をおこなう。

18:00：自由時間

18:30：夕食

20:00：自由討論Ⅱ（90分）

グループ発表の準備。発表テーマは各グループが自由に設定する。

22:00：就寝

【 プログラム案Ｂ 】

内容：「地球の見方―地球について学ぶ」

ディベート、模擬会議、ロールプレイ・ゲームなどを通して現代社会が抱える地球規模の問題の構造を理解し、積極的に解決策を見いだそうとする態度を養成する。少し高めのレベルで行い、全体として一貫性を持たせる。

1日目
①Ice-breaking：「地球家族フォトランゲージ」
1、 参加者を５名程度のグループに分ける。
2、 自己紹介と友達づくり。
3、 地球家族フォトランゲージ版から先進国、中進国、開発途上国の写真を１枚ずつ３枚１セットにして各グループに配る。
4、 まず、その３枚をよく観察してもらう。
5、 それら３枚の写真を「豊かだと思う順番」「旅行で行ってみたい順番」「一生住んでみたい順番」にそれぞれ並べて意見を出し合う。（模造紙）
6、 各グループに選んだ理由など結果を発表してもらい、質問に答える。（国当ても行う）
7、 最後に日本の写真を見せて、それらと比較して感想を聞く
②Lecture：
③Brain-storming：「開発と援助」
1、 参加者を10名程度のグループに分ける。（2グループを合体）
2、 バングラデシュのダッカの街の様子、人々の暮らしの様子のビデオを見る
3、 各グループごとに「開発とは何か―順位づけ」を行う。（模造紙）
4、 各グループに選んだ理由など結果を発表してもらい、質問に答える。
5、 ODA、NGO等の果たす役割を含めて解説する。
6、 10カ国程度の国を設定し、その中から各自が１カ国選び、５名程度１グループになり国づくりを行う。（グループ分けを行う）
④Lecture：
⑤Welcome Party
⑥Discussion：国づくりグループごとに、対象国について調べる。今日、学んだことをグループで話し合い、まとめる。

2日目
①Workshop：「新貿易ゲーム」
貿易を中心に、世界経済の動きを模擬体験することよって、そこに存在する様々な問題について学び、その解決について考える。
②Lecture：
③Workshop：「食べ物を通して世界を見つめよう」
食べ物を巡って、エネルギー問題、福祉・社会問題、飢えと人口の問題などに踏み込んだアクティビティを行う。
④Lecture：
⑤Discussion：国づくりグループごとに、対象国について調べる。
最終日のプレゼンテーション用の資料をまとめる。
（青年海外協力隊員OB・OG、10名程度を課題国ごとに担当、指導してもらう）

3日目
①プレゼンテーション
②講評
③閉講式
④Farewell Party

平成 16 年度 第 4 回研究会

【 開 催 概 要 】

日　時：平成 17 年 3 月 29 日（火）　午後 2 時から
会　場：湘南国際村センター　「特別研修室」
内　容：湘南国際村青少年国際セミナープログラムの改善、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	旦　祐介	東海大学教養学部 教授
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事

学生アドバイザー

杉山　雅彦	中央大学 3 年
馬場　充	日本大学 4 年
野口　美奈	明治大学 3 年

事務局	田中　不二夫	神奈川県企画部企画総務室主幹	湘南国際村担当
	工藤　浩	財団法人かながわ学術研究交流財団	総務主幹
	広崎　勉	同	主事
	安藤　智孝	同	専門員

【 議 事 録 】（要旨）

■セミナー実施後の感想

委員 A

今回、セミナーを実際にやってみて、こういうものだという形が見えてきた。少なくともこれでやめるというのではなく、続ける雰囲気が出てきたと感じる。

委員 E

ファシリテーターが優秀であった。また、大学生アドバイザーの存在によって、主催者側と参加者との年齢差を超えることができた。

学生アドバイザーA

参加者には意見をどんどん出していくという良い姿勢も見られたし、他の人がしゃべっているから今は休むという姿も見られるなど、様々だった。良い面もあれば、悪い面もあった。

事務局
学生アドバイザー1 人につき複数のグループを担当してもらったが…。

学生アドバイザーB
特に負担にはならなかった。ずっと特定のグループに張り付いていると、横から口を出してしまうし、参加者もアドバイザーに依存してしまう。ある程度ほったらかしの時間があって良かった。

学生アドバイザーC
１人が２、３個のグループを見たことが、かえって良かった。

委員 D
前日の反省を元に、次の日のスケジュールを臨機応変に変えるなど、結構フレキシブルに対応できた点が良かった。

委員 B
セクションごとにふりかえりの時間があってよかった。ともすると、やりっぱなしのセミナーが多い中で、K-PIT はふりかえりの時間が取れた方だと思う。参加者の消化不良を助けられた。

《学生アドバイザーD のメモより》
１.プログラムの構成に柔軟性が足りない。
２.「調べて話し合おう」のレベルを上げる。
３．グループに入れない参加者がいて、「友達の作り方を教えてください」という意見も出ていた。
４.「もうちょっと長いほうが良い」、「もうちょっとゆっくり考えたい」という意見が多かった。
５．アドバイザーの人数を増やしたほうが良い。
６．やる気が無いグループに対するインセンティブのあげ方（アイスをあげたり）を考え、柔軟に対応したほうが良い。

委員 C
メモの１番、「柔軟性が足りない」というのはどういうことか。

学生アドバイザーB
本人から詳しくは聞いていないが、プログラムが結構詰まっていて、時間的なゆとりが少なかった気がする。

委員 A
もっと先生と学生とのやりとりがあっても良かった。質問をあとから個別に受けるより、全体で共有するべきだと思う。

■特別講演について

委員 E
特別講演の時も、もっと質問の時間をとるべきだった。松本先生の周辺に集まっていた人たちだけでなく、関心をもっている人はもっとたくさんいた。質疑のときに松本先生はマイクを使わなかったので、質問も分からないし、答えもその学生にしか伝わらなかった。このレベルの学生だったら、もっと時間をとってもよかった。

事務局
次のプログラムがその直後にあったため、

松本先生への質問時間を 15 時で打ち切ってしまった。

委員 A

特別講演は初日であったため、みんなの前で手を上げるのは勇気がいる。

今回は講師の人選が良かった。国際公務員だけが「国際人」ではないはず。

また、特別講演をプログラム全体の最初に入れたのは良かった。最後に入れると、それまでの多様な議論が「それに収めろ」というふうに思われてしまう。

■ファシリテーターについて

事務局

青少年向けと大学生向けのセミナーの違いはどういったところにあるのか。

委員 A

決定的に違うのはファシリテーターの存在だろう。音楽などもあり…大学生向けセミナーではそこまでやらないだろう。

委員 E

アイスブレイキングから生徒同士の関係、あるいは教員との関係を潤滑にするという役割がある。

委員 F

大学生を対象としたセミナーと比べて、一対一のケアが違う。大学生の場合はセミナー後の密なケアは少ない。今回のように毎回ふりかえりの時間をとったり、またそれをすぐ活かすということは無かった。やっぱり高校生世代にとってはふりかえりの時間が必要なのかなと思った。

委員 B

高校生世代にとっては、モヤモヤっとしたものがたくさんあると思う。それを多少なりとも「なるほどな」と思えるようにヒントを与えることは必要だと考える。

■参加人数について

委員 B

もともとプランニングした時点で、もうちょっとゆとりがあるものと思っていた。今回、当初の想定よりも参加人数が増えてしまったため窮屈になってしまったが、ワークショップ形式でやるのであれば 50 人でも多い。40 人であれば一人ひとりのケアや、子どもたち同士での議論も活発になるのではないか。また、そうすることでファシリテーターに全部任せるのではなく、もっと子どもたちが主体的に動く部分も出てくるのかなという気がした。

学生アドバイザーC

人数が多いため、ファシリテーターの方がつらそうだった。グループを組む際にも、大きなグループだと発言しない人が出てしまうが、小さなグループにすれば発言せざるを得ないのではないか。もっと参加人数を少なくするか、ファシリテーターやアドバイザーを増やすか…セミナーを２回に分けて開催してはどうか。

委員 A

高校生世代の場合、参加者全員の顔と名前を覚えられるくらいの人数でやるべきだと思う。大人数だとやる気が無いのに来てしまった人などに影響をされてしまったり、いろんなことが発生する。今回、そういうこともなく乗り切れたのは、たまたま運が

良かったのだと思う。

委員B

会場の大きさと人数の割合を見ると、多少窮屈であった。空間的なゆとりもあったほうが良い。

学生アドバイザーA

グループをつくっても、グループ内の人数が多すぎるということもある。65人を4人グループで分けても10グループ以上できる。発表の際にも13グループで、休み時間5分。やっぱり「長い」と感じざるを得ない。

事務局

今回、一度に60人程度が限度だろうというのがわかったので、セミナーを2回に分けるか、1回でやるが、会場を2つに分けるかになるだろう。

委員B

年間計画としてスケジュールを立て、例えば夏に1回、春に1回やるのであれば、「夏はだめだが、春は出られる」とか…とにかく年間計画を立ててほしい。

委員D

応募に関して、優秀な子どもたちを集めた方が主催者側は楽だと思う。しかし教育的観点から見ると、できるなら多くの人にチャンスを与えたいと思う。それによって刺激を受ける人がいる。

参加者の中には「へこんだ」という人もいる。どうしてかと聞くと、「みんなすごすぎる」と。やはり入り口はできるだけ広くしたい気はする。

委員A

大学入試ではいつも、合格ギリギリラインの人を引き取るか引き取らないかで問題になる。入っちゃったときに変わるかもしれない、たまたまその年の入試問題ができなかっただけかもしれないし。

教育というのは入口と出口が変わっちゃうものだから、なんとなく応募した人でも参加してもらえば良いと思う。初めから足切りをやらない。ただ、人数が多すぎると「一人ひとりの名前を覚えることができないから、高校生向けのものとしてはまずいな」という問題の立て方であって、たくさんいるから質が落ちる、少ないから質が上がるという方程式は成り立たない。

委員B

おっしゃるとおりで、質はあまり関係ない。ただ、応募してくる子どもたちがプログラム内容を見たときに、「これは私にとって難しいかもしれない」と、ちょっと二の足踏むかなということを心配している。

私が知っている高校の中には、「今年は無理だったが来年は参加します」という学校もある。募集から応募までの期間が短すぎたのも一つの問題だが、もう一つは「うちの生徒には無理」と教員の段階でフィルターかけてしまうことがある。参加学校一覧表を見れば「たくさんの学校から参加しているな」という教員もいれば、「やっぱり参加している生徒はレベルの高い学校の生徒だね」と見る教員もいる。私も判断しかねるが、そういう要素をはらんでいるなと思う。

学生アドバイザーB

人数のことに関して、私は人の顔と名前を覚えるのには自信があるが、今回は無理

だった。がんばって 15 人だった。できることなら、少人数で複数回やるほうがよい。

事務局

１回しかできないなら、定員を今年と同じ 50 人に抑えるということも可能性としてはある。

委員 B

65 人がきついというのではなく、50 人もきつい。顔と名前を覚えるのは 2 泊 3 日で 30 人が限界。教員の立場から言うと、顔と名前を覚えられない人数では効果が薄い。30 人でもきついという先生もいる。来年度の定員が 90 人であれば、30 人を 3 回に分けて実施する方が効果が上がる。それなりにケアできるから、自信の無い子も、それなりにステップアップできるし、伸びる子はさらに高みに到達できる。

■参加者の選考について

委員 A

研究会という専門家集団がありながら、選考を事務局が行うとなると、「私の子どもはなぜ落ちたのだろう」となる可能性もある。普通、こういうのは研究会が責任を持つようにするべきだ。行政的に、「基準を誰がきめたのですか」という点を明確にするべきで、「事務局が採点しました」というと、奇異に思う人もいるのではないか。選考作業は研究委員が行うべきであった。

事務局

選考の方法には、「先着順」「抽選」「基準を設けて採点」という 3 つの方法が考えられる。

委員 C

大人数でやるのはセミナー運営上難しいので人数を絞る。その回に参加できなかった人は、他の機会で優先的に参加も考えたが、書類を見て選ぶとなると「次回優先」は使えないので、幅広く、いろんな人を…となると、だんだん絞られてしまっちゃうのかなという気がする。

委員 B

多くのセミナーでは、選考には事務局は参加せず、委員の先生がやるのが一般的。選考基準としては志望動機や現在までの活動などで、その他に「前回参加しましたか」という欄も設ける。また、前回応募して「採用された・されない」も書いておいて、そういうところで配慮してはどうか。

また、採点の際には学校名などプライベートな部分を消して、文章の部分だけでやる。学校名とか男女とか関係なく、単純に志望動機とか経歴でやる。このセミナーが定着してくれば、「何年度に参加しました」「落ちました」という人を事務局で把握しておいて、何回も落ちた人はかわいそうだら救済するとか。

事務局

今回は基本的に、「50 人は集まらないだろうな」という認識で、横須賀三浦地区の学校を中心にお願いに上がった。しかし、実際にはこれだけ多かった。

ただ、補助金として税金を投入している事業のため、なるべく広く、一人でも多くというのがベースの流れ。しかも「入口に立とう」ということで、今まで国際関係も何もやったことの無い子を、逆に言えばそういう子を呼んであげたほうが良いのではないか。

委員A

文章のアピール度の強弱で言えば、頭の良い子はすぐにそういう文章を書けてしまうので、そういう子ばっかり集まっちゃう。

学生アドバイザーC

今回ダメでも、もう一度応募してきたら「熱意点」をプラスしてあげるとか。

選考は一般的にいつも文章で行われる。文章はうまい下手があるので、もっと他の方法はないのか。

委員B

確かに文章のうまい下手はあるが、それでも行間ににじみ出てくるものは、文章の下手な人でもある。文章力が無くても行間から伝わるものはすごくある。

委員A

全く合ってない人が来てしまう可能性も考える必要がある。抽選で受かったらどんな人でも参加できるとなった場合、嫌がらせが目的の人をどうやってチェックするかという問題もある。

事務局

今年の場合は、「集団生活に著しい支障があるかどうか」を基準にした。

募集要項には「参加申込書に基づいて・・・」と明記されている。先生方には実際にその子と会った印象と、この点数を比較して、はたしてこの選考基準が適正であったかを見ていただければと思う。

■平成17年度研究事業について

事務局

今回をもって今年度の研究会は終了となる。実際にセミナーをやってみて、多少の可能性を感じていただけたと思う。来年度、もっと良いものを作りたいと考えている。即答は難しいと思うが、ぜひ引き続き来年度もお願いできるようご検討いただきたい。

委員B

委員会の位置づけと事務局の位置づけを明確にしたほうが良い。例えばセミナーが2回とか3回の分割になった場合、委員の先生がセミナー実施も担当されるケースがあるが、そうでなくても運営ができるような形を考えるべきだ。研究会は「こういう方向でやっていく」という骨子を決める委員会であり、先生方が実際のセミナー運営に関わるかどうかは…。例えば、ファシリテーターや、委員の先生に代わる方によるセミナーの実施等も検討するべき。

委員A

今回のように全員が出席するというのは、何回もやっていくとすればすごく難しいから、何かうまい方法を考えるべき。

仮に3回やるとしたら、全員が毎回そこに参加するのではなく、参加できる委員が、教育面での責任者として参加する。全員の先生が一番自分の都合の良いときに貢献できるとか。

■平成17年度セミナーについて

委員F

来年度のプログラムに関しては、「異文化」「ボランティア」「南北問題」などテーマを絞って、毎回特色を持たしていくというのも一つの考えとしてあるが、お子様ランチ的に、何でもかんでも入れるやり方も

あるだろう。いろんなものを入れる中で、研究委員の一番得意な分野でコミットするのが良いという気がする。

委員A

プログラムのコンテンツとして、例えば「宗教の問題」を入れたいと思う。僕ら日本人はキリスト教社会にはなじみがあるが、それ以外の、例えばイスラム教とかはなじみが薄い。今まで、宗教というのは危なっかしい、取り扱いが難しいトピックで、「触らぬ神にたたり無し」というか…。でも世界の紛争って宗教的な背景があるから、そういう議論って大切だと思う。

非西洋社会にも目を向け、同じ目線で見られるようになってほしい。大きな問題は非西洋社会で起こっている。ぼくら日本人にとってはずっと西洋が中心であり、英会話が主眼にあるが、西洋以外の目線もしっかりと持つっていうのが、これからの日本における要である。「国際人」といえば、一昔前は西洋人の外国文化を取り入れることだった。すごく西洋中心的な国際交流が主流だったと思う。

学生アドバイザーC

もっと議論の時間とか質問の時間を大事にした方がよかったのではないか。先生方の講演をもっと短くするか、最初から質問の時間や議論の時間を作るべき。休憩の時間を入れてもらえるようにお願いしたい。特に、最初の方は質問を出しにくいので、周囲と相談させるなどの工夫がほしい。

セミナーの期間は３泊４日でもよい。

委員B

飲み物を会場の後ろに置いて自由に飲めるようにしたほうがよい。ちょっと飲みたいなというのはあると思うし、夜の時間にもちょっとしたお菓子や飲み物が同じ部屋にあれば、つまみながら話ができたりするので、そういったものを主催者側で用意すると参加者の疲れも緩和されると思う。

委員F

みんなで質問する時間を取る以外に、個人的な質問の時間もとった方が良い。もっと先生方との個別な接触があると良い。本来であればこちら側が積極的に作っていくべきものなのだろうが、２泊３日というプログラムの中でセットしていただけると助かる。

委員B

例えば、子どもたちに質問しやすいことを参加のしおりに書いたり、教員の自己紹介の場があればもっと質問しやすくなる。人生観や先生方の経験など、講義以外の部分も本当は聞きたかったのではないか。

委員E

しかし、「暇な時間が無くてよかった」という参加者もいた。テキパキとして、飽きずにすんだと聞いている。そのあたりの兼ね合いは難しい。

学生アドバイザーC

セミナー2 日目のお昼休みは、教員は意図的にロビーにいるようにしたが、そういう時間こそ先生方と気軽に話ができる雰囲気がある。

学生アドバイザーB

教員があらたまって「自己紹介をします」っていうのはちょっと抵抗感がある。

委員B

でも最初に教員が自己紹介をして、「こういう経歴を持っていて、こうなんです」っていうのが分かっていれば、空き時間に来て「こう悩んでいるんですけど」っていうコミュニケーションにつながるのではないか。こちらから情報を与える必要があるのかなと思う。

委員F

今回のプログラムは、最初に枠をきちんと作ったものの、夜の時間は「調べ学習」だったりと比較的「あそび」の時間があった。それによってコミュニケーションが深まった面があり、充実感があった気がする。その一方で、もっと自由な雰囲気で、先生方とも自由に話したかったという意見もあって、その兼ね合いが難しい。我々としてはいろいろなプログラムを提供したいと思うが、何パーセントかはもっと自由にする必要がある。でも、せっかく来ているのにあんまり自由だというのもどうか…。

委員B

今回は拘束されているようで、割と自由に参加者のペースで行えた。当初、事務局のセミナー案はもっとピシッとしていて、夜も講義があるような感じだった。「それじゃ駄目だよ」って言いながら、いろいろ考えながらここまで来た。

発表をやる前から「発表があってよかったです」という子はいた。

事務局

終わったあとにあれほど質問するという、高校生世代があれだけ主体的であるとは、当初の我々の認識の中にはなかったと思う。質問の時間を15分用意しても、誰も手をあげないのではないかという想定だったので、この点はうれしい見込み違いであった。

学生アドバイザーB

今回の参加者がたまたまそうだった、という可能性がある。次回以降も積極的な参加者像が通用するかは疑問。

委員B

参加費1万円を払ってでも参加する子、こういう募集要項を見てくる子っていうのはこのレベルではないか。

委員A

自分が高校生世代の世界をあまり知らなかった。今後もセミナーは、毎回試行錯誤だと思う。だから、単なる受験対策ではなく、どういうかたちで教員が貢献できるか、今後も議論と検証を重ねる必要がある。今回のセミナーは主催者側もずいぶん自然体でできた感じがあるが、このスピリットを今後も残したい。

アンケートは終了直後の印象で書くので、すごくエモーショナルなままで終わったかもしれないし、今の時点で悪い評価がついていても、時間を経て人生のある局面で、「あの先生の言ったことはやっぱりすごかったのだ」ということもある。そういうことを頭に入れてアンケートを利用しなきゃいけない。

（以上）

平成 17 年度 第 1 回研究会

【 開 催 概 要 】

日　時：平成 17 年 7 月 6 日(水)　午後 6 時から
場　所：フォーラムよこはま 「会議室 2」
内　容：平成 17 年度の研究内容について、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	旦　祐介	東海大学教養学部 教授
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事
事務局	高木　英典	神奈川県企画部企画総務室 湘南国際村担当
	工藤　浩	財団法人かながわ学術研究交流財団 総括主幹
	安藤　智孝	同　専門員

【 議 事 録 】(要旨)

■セミナーモデルの作成について

事務局

平成 17 年度の研究会では、国際教育プログラムのモデルを作成したい。

委員 A

「モデル」という言葉は、すごく気をつけて使わねばならない。「モデル」と言ってしまうと、別の場所でも同じように適用できると、ある種教条的になってしまう恐れがある。その結果、「そのモデルにはまらないとダメだ」となってしまうとまずい。

委員 D

せっかく県が関わっているのだから、神奈川県だからできることなど、地元に密着したことなども考えたい。

■望まれる「国際人材」像について

委員 A

「国際人材」とは何かということだが、果たしてこれをこの研究会で最初に定義する必要があるだろうか。人材像は議論の中で自然に出てくるものであり、それを自由に話し合える場所が研究会であると思う。

委員 D

県の総合計画である「プロジェクト 51」

では「国際感覚を身につけ・・・」とあるが、まず「国際感覚」とは何を意味しているのかを考える必要がある。

委員A

世界を広く読む力や、考えるための「道具」を様々な分野から得たり、世界を読み解くことの面白さを感じることの方が大切。

委員B

「国際人」というものを言い切るのは難しいが、それはつまり、このセミナーを通じて「こういうことをつかんで欲しい」、「何か意識を持って欲しい」という位置付けだと思う。

委員D

一般的に言われる「国際人」とは、①知識を身につけ、②ふさわしい態度を養い、③行動するための技能を養い、④実際に行動する、という4つの段階を経るとされる。しかし、常にこの順番どおりでなく、違うところから始まっても良いし、考え方はいろいろある。

委員C

平成16年度の研究会の流れとしては、あまり「どういう人間をつくろう」というより、子どもたちにいろんなものを与えて、スタートラインに立たせてあげようという議論の方向性であった気がする。

委員G

参加者を一定の方向にもっていこうとするのではなく、いろんなことを広く受け入れられるようになって欲しい。

委員F

セミナーには良い参加者が集まる。次回も同等レベルの学生を想定し、前回のセミナーの反省に立ったプログラムを用意すれば良い。前回からあまり大きく変える必要はないだろう。

■リピーターの参加について

委員A

前回参加者の中で、今年もまた参加したいという者がほとんどだった。リピーターはどうするのか。

委員B

本年度、セミナーを2回開催するのであれば、またチャレンジしたいという子どもに対してプログラムを用意する必要があるだろう。同じパターンではなく、ちょっと変えてみて、それでまた評価する必要がある。

委員A

初級と上級を分ける線引きは難しいのではないか。

委員B

参加希望者が自分に合ったレベルを判断する材料として、事前により具体的なプログラム内容を紹介するのが我々の責任であると思う。

委員A

応募者が超過した場合はどうするのか。

委員B

選考基準を作って選考する。第1希望、第2希望を取るほか、過去の応募回数や参加回数も考慮する。

委員A

やはり将来、レベルの違うものを想定しながらプログラムを作る必要があるだろう。選考は研究会で行う必要があるが、どのように選考するのか。

委員D

こういう形で募集するとレベルの高い生徒が集まってしまうのは仕方がないが、少数のエリート教育ではなく、全体のレベルを上げることをしたい。国際人材の場合、それほど知識がなくとも、関心が高いだけでも採用してあげたい。

委員B

だからこそレベルを変えた２つのものを用意して、子どもたちをできるだけ参加させてあげたい。選考は意欲のみで、知識量を問わない。動機が明確であれば点数は上がる。

委員F

セミナーを、「レベルの差」というより、「テーマの差」で分類するのはどうか。

委員B

リピーターの参加を認めるべきだと考える。リピーターが参加するのであれば、ある程度難易度の高いものを用意する必要があるだろう。

委員A

私はリピーターの参加を認めるべきでないと考える。一度参加した人は「世界の入り口」に立ったということで、新しい人に席を譲るべき。神奈川県の予算も使っている事業であることからも、なるべく多くの人が参加できるようにしたい。

委員B

応募の段階でリピーターを排除するのは危険だと思う。最終的に選考を行うのだから、そこで考慮すれば良い。

委員A

「世界の入口に立つ」という方向性を踏襲する場合、初参加の人と差が生じないか。

委員B

全く同じ内容をするわけではない。今年度のセミナーも研究段階にあることを考慮すれば、リピーターの参加を実際に見た上で検証を重ねて判断する必要がある。

委員E

選考の際には初参加の人を優先させることで、それほど心配する必要はないと思う。

委員A

本年度から、参加者の選考は委員が行うものとする。教育者がある認定をして、教育者がまとめるという意味で、この研究会が主導権を持っているべきである。また、病気等で早退し、プログラムの全課程を修了しなかった者には、教育者の立場として修了証書は与えられないという共通認識を持っておきたい。

委員E

参加者の中に、もの足りなかったという生徒と、レベルが高すぎたという生徒が同数いた場合にこれを「成功」と解釈するのであれば、本年度のセミナーは、昨年度のプログラムをあまり変えずに、そこに反省を加えたものを１つ、そしてもうちょっと

上のレベルのものを１つ用意するというくらいの設定が良いと思う。

■「宿泊型」の特性について

委員Ｂ
一度家に帰ってしまうと、現実に戻ってしまう。「宿泊型」の意味は、その期間はどっぷりつかるというところにある。一度やったことを夜の時間で共有し、その雰囲気のままみんなと過ごすというのは、学習効果という点で非常に効果がある。他校の生徒と接し、セミナー終了後にメーリングリストを通じて「国際ボランティアをやっていこう」という動きが広まり、結果としてボランティア団体が生まれるまでに至ったのは「宿泊型」だったことも関係している。

委員Ｃ
セミナーは初対面の人が短時間で心通わせることができる、国際化の疑似体験のようなものがあった。

委員Ｂ
仲間に溶け込めない参加者もいたが。

委員Ａ
必ずそういう生徒はいる。ただ、我々がそういう子どもをどう受け止めるのかが重要。それを異質なものとして「君はダメだ」と排除するのではなく、それも一つのあり方であるという認識を持ちたい。

（以上）

平成17年度 第2回研究会

【開催概要】

日　時：平成17年8月25日(木)　午後6時から
場　所：かながわ県民センター　「305号室」
内　容：平成17年度湘南国際村青少年国際セミナーの実施について、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事
事務局	高木　英典	神奈川県企画部企画総務室 湘南国際村担当
	工藤　浩	財団法人かながわ学術研究交流財団 総括主幹
	安藤　智孝	同　専門員

【議事録】(要旨)

■座長との打ち合わせ結果報告

事務局

8月に行った研究会座長との打ち合わせの要旨を説明したい。

① 新しいアイディアを得るため、研究会にリソースパーソンをお呼びしたい。
② 研究会の役割は、カリキュラム内容について自由に話し合うことにある。
③ 研究会とセミナー実行委員会との役割分担を明確にするべき。実行委員会は研究会の決定に従い、セミナーを実施する役割。

セミナー実行委員会を設けるという案は、昨年度第4回研究会において、研究委員がセミナー期間中全日程に参加するのは難しいため、セミナーごとに実行委員会を改めて組織してはどうか、という意見に基づいている。

■プログラム案A

委員B

前回の会合において、入門グループと発展グループの2種類を用意した方が良いだろうという意見が出たので、それに基づいて2案作成した。

入門グループでは、「調べ学習」の代わりに「地球家族」のビデオを見たり、友達と議論をする時間を設けた。その他、前回のバングラデシュのワークショップでは良い発言が出ていたので、そこにもっと時間を

とりたい。2 日目午後に各先生方の講義を同時並行的に行い、参加者をいくつかのグループに分けて、それぞれが興味のある講義を生徒が主体的に聴きに行くという形にしてはどうか。同じ講義を 2 コマ用意して、生徒が前半、後半と講義を 2 つ受けるのも良い。その日の夜は、その講義のグループを中心に話し合う時間を設け、最終日はグループで発表をさせる。このように、先生方が少人数のグループに対し並行的に講義をすることで、前回の反省点として指摘された「生徒がゆっくり先生と話をする機会がない」という点をカバーできると考える。

発展グループの場合は、「貿易ゲーム」など経済を中心としたワークショップを行い、夜の時間はカードゲーム「バーンガ」などを使って、価値観の多様性をゲームの中で体感させる。「調べ学習」ではなく、実際に体感しながら価値観の多様性について勉強する。

両方に共通した変更点は、夜の時間の使い方と、2 日目の午後に先生方の講義を同時並行的に行うところである。

委員 A

今回はセミナーを 2 回行うわけだが、委員の先生方が 2 回とも出席できるか疑問。

委員 B

委員全員が 2 回のセミナー両方に参加する必要はないだろう。「入門」または「発展」のどちらかで講義をすれば良い。

委員 A

いずれにしても、先生方の講義は 2 日目の午後、参加者全員ではなく少人数のグループに対して講義を行うことになる。

「調べ学習」に関しては、私も今ひとつ効果を上げていないという印象を受けた。「言われたからやっている」というような。

委員 E

最後に「プレゼンテーション」とあるが、その準備はいつ行うのか。

委員 B

夜のディスカッションの時間等で行う。グループで発表しても良いし、個人で感想を述べる場としても良い。または、グループ討論を行っても良い。

先生方の講義は 3 つ用意しておいて、その中から 2 つを選択するようにする。もう一人の先生のお話も聞きたいというのであれば、前回のように休み時間や朝食の時間で個人的に聞けばよい。

先生方の講義は一コマ 2 時間で、前半、後半の 2 回。講義だけでなくディスカッション、ゲーム、音楽などを行っても良い。先生方は 2 時間の時間枠を自由に使うようにする。応募の時点で第 1 希望、第 2 希望を書かせて、それに基づいてふり分ける。

委員 A

ただ、それぞれの講義内容があまりにも違ったものだと、希望に偏りが生ずるのではないか。そのあたりを調整しなければならない。「ゼミナール」の際、講義を受け持つ 3 名の先生方は、大きなテーマ、共通のアプローチみたいなものを共有して持っておくべきだ。

委員 B

ただ、前回のように、生徒全員の前で講義する機会はないので、最初の段階で先生方を紹介する必要がある。そうすれば、休み時間など参加者も先生方に話しかけやす

いだろう。

「ゼミナール」は２コマで良い。

■プログラム案Ｂ

事務局

プログラム案Ｂの意図は、日本の中にいる外国人の存在を考えようということである。「海外だけでなく、自分の住んでいるところにも外国人はいる」と。

委員Ｂ

各先生方のアイディアは、それぞれが受け持つ「ゼミナール」の時間でやればよいと思う。各先生がもっと突っ込んでやりたいという部分は、そこでできる。

委員Ａ

「ゼミナール」の中で、先生が連れてきたいゲストを活用しても良いだろう。

委員Ａ

プログラム案Ｂの中に「自由時間を増やす」ということもあるが、前回はあまり先生と生徒が会うチャンスって無かったのだろうか。

委員Ｂ

一緒にご飯を食べるくらいだった。そういう意味でも、選択性ゼミナール方式にすれば、もっと先生とディスカッションや話ができるだろう。それでも足りない場合は、昨年度のように空き時間に先生をつかまえてできるのではないか。

委員Ｅ

「ゼミナール」以外の各セクションと、ファシリテーターの関係はどういうものか。

委員Ｂ

各セクションのワークショップはファシリテーターに進行をお任せする。

委員Ａ

前回のセミナーであまり問題がなかった以上、あまり研究会でプログラム内容を変更するより、もう一回くらい様子を見ても良いと思う。

委員Ｆ

「自由時間」というのは必ずしも「ダラダラする」というような意味ではなくて、比較的自由な討論の時間ということだと思う。例えば初日の夜にいきなり「自由時間ですよ」と言っても、なかなか生徒は教員のところに来て話しかけづらいだろうから、自然と打ち解けて、最終日に「これだけは聞いておきたい」ということを聞きに来ることになるだろう。「ゼミナール」形式にすれば、生徒も話しやすいだろう。

委員Ａ

では、各回とも教員３名前後で「ゼミナール」を設定し、プログラム案Ｂの「多文化共生」プログラムはその中の一コマとして実施していただく。

■リベラル・アーツ教育プログラム案

委員Ｆ

リベラル・アーツ教育を他のプログラムとどのように絡めたらよいのかという問題意識を持っている。先ほどの提案のように、同時並行的に講義を行う「ゼミナール」形式には賛成する。

また、２回のセミナーを「レベルの差」

ではなく、プログラムの「質の差」で分けるというやり方も考えられる。我々はパイロット的なプログラムを行っているので、全く新しいものをやっても良いのかもしれない。

前回は、どちらかといえば「知る」ということに重点が置かれていた気がするが、できるだけお互いが触れ合う時間、自分の意見を言う時間をもっと持てれば良いと思う。

外国人と接する時間があっても良いかもしれない。ただし、異文化体験とこのセミナーの趣旨が合致するかは別の話になるだろう。

委員B

前回の様子だと、アイスブレイキングは必要ないと思う。また、同じ学校から多数参加しているケースが見られ、我々でグループ分けをする必要性を感じた。グループ分けを自由にやらせると、どうしても自分と同じ学校の生徒同士でくっついてしまう。

外国人を入れるかどうかについては、国際交流という観点からは良いが、そういったことは別の団体がやっている。K-PIT ではいろんなものをさせるというより、もっと的を絞ってやるべき。参加する高校生の中に留学経験者もいるだろうから、国際交流プログラムなどとは住み分けをするべきだ。国際交流をすることで、そういったものが薄まってしまう危険性がある。

委員E

例えば「豊かさ」を考えるプログラムの際、開発途上国の方と接するなど、そういうやり方についてはどう思うか。

委員B

その国の人がいることで、逆にその国のことを端的に言えなくなるという側面もある。高校生世代はそのあたりをどこまで突っ込んで議論して良いかがわかりにくいだろう。「たいへんだね」、「かわいそうだね」で終わってしまい、本質的な話し合いができなくなる懸念がある。

■テーマについて

委員E

「入門編」も「発展編」もテーマを一緒にするのか。

委員B

大きなテーマとしては共通で、切り口として「入門編」、「発展編」を別にするよう副題をつけてはどうか。大きなテーマとは、例えば「世界の入口に立とう」という、前回のものを踏襲するなど。

委員E

「入門編」のテーマを去年と同じ「世界の入口に立とう」にして、「発展編」のテーマを違うものにしてはどうか。そうすれば、リピーターは自動的に「発展編」への参加を選ぶだろう。

委員B

申し込みの時点で、第1希望、第2希望を書かせて、人数調整をしても良い。中には、どうしても日程的にどちらかだけ参加可能という子もいるだろう。

委員A

例えば自分はリピーターだけど発展グループに入りたくないという人はどうするのか。

委員 B
　それはそれで良いが、人数が多い場合は選考により、初参加者を優先する。

■特別講演について

委員 A
　特別講演をやるとすれば、珍しい知識を得ると言うよりも、何か考えさせるようなものが良い。

委員 E
　まず特別講演をするかどうかを検討しなければならない。

委員 G
　外務省参与の高島氏はどうか。話し慣れているとは思うが。

委員 A
　いわゆる国際官僚畑の人を呼ぶのが良いのかは疑問。

委員 B
　女性の候補者として、『世界がもし 100 人の村だったら』を翻訳した池田香代子さんはどうか。今回のセミナー内容にも合致するだろう。

委員 E
　青年海外協力隊の OB・OG でも良い。

委員 A
　特別講演者を呼ぶかどうかについては、次回決めるとして、なるべく女性の民間の人で幅広く話せる人が良いと思う。全ての人が国際官僚になるわけではないので、あんまりマニアックな細かい話は必要ない。

（以上）

【プログラム案A】

ディベート・模擬会議・ロールプレイ・ゲームなどを通して現代社会が抱える地球規模の課題について、問題の構造を理解し、積極的に解決策を見いだそうとする態度を形成する。少し高めのレベルで行い、プログラムに一貫性を持たせる。

〔入門編〕：・「地球の見方―地球について学ぶ」

１日目	
13:00	受付
13:30	開会式
13:40	特別講演
14:40	休憩
15:00	セクションⅠ「地球家族フォトランゲージ」
18:00	チェックイン
18:30	ウェルカム・パーティー
20:00	「地球家族フォトランゲージ」の10年後の家族をＶＴＲを観る
22:00	就寝
２日目	
７:30	朝食
９:00	セクションⅡ「豊かさってなに？～安心できる世界～」 「バングラデシュを開発する」
12:00	昼食
14:00	セクションⅡの続き
16:00	休憩
16:15	各先生方の講義と懇談
18:30	夕食
20:00	各グループでディスカッション
22:00	就寝
３日目	
７:30	朝食
９:00	プレゼンテーション
11:00	休憩
11:15	講評
12:00	閉講式・Farewell Party
13:30	解散

〔発展編〕:「地球の見方―価値観の多様性について学ぶ」

１日目
13:00　受付
13:30　開会式
13:40　特別講演
14:40　休憩
15:00　セクションⅠ「新貿易ゲーム」
18:00　チェックイン
18:30　ウェルカム・パーティー
20:00　カードゲーム「バーンガ」により価値観の多様性を体感する。
22:00　就寝

２日目
7:30　朝食
9:00　セクションⅡ「豊かさってなに？～安心できる世界～」
「開発と援助」
1、 参加者を10名程度のグループに分ける。(2グループを合体)
2、 途上国の街の様子、人々の暮らしの様子のビデオを見る
3、 グループごとに「開発とは何か―順位づけ」を行う。(模造紙)
4、 順位付けの結果と理由を発表してもらい、質問に答える。
5、 ODA、NGO等の果たす役割を含めて解説する。
6、 10カ国程度の国を設定し、その中から各自が1カ国選び、5名1グループになり国づくりを行う。(グループ分けを行う)
7、 「バングラデシュを開発する」ワークショップ
12:00　昼食
14:00　セクションⅡの続き
16:00　休憩
16:15　各先生方の講義と懇談
18:30　夕食
20:00　各グループでディスカッション
22:00　就寝

３日目
7:30　朝食
9:00　プレゼンテーション
11:00　休憩
11:15　講評
12:00　閉講式・Farewell Party
13:30　解散

【プログラム案B】（企画委員によるアイディアメモ）

「地に足をつけて、国際社会を見つめよう。」
国際人、国際社会というと海外に目が向きがちですが、実は私たち自身が国際社会の中に生きています。

- 「国際社会」を意識していると逆に国内を見つめることを忘れがちですが、私たちの生活場そのものが、国際社会の縮図です。この社会の正しい認識なしに、公平で健全な国際関係は生まれてきません。外国ばかりに目を向けていては片手落ちです。私たちの社会を見つめることにより、日本とはどのような国なのか、そこに暮らす私たちは国際社会の一員としてどうあるべきなのかについて考えるきっかけとしましょう。
- どうして日本国内に外国籍の方々が増えてきたのでしょう？
- かれらは日本でどんな生活をしているのでしょう？
- どうして中国製品があふれているのでしょう？

……

今回のテーマ：「国際社会としての日本」
国際社会としての日本の現状を知る。

①日本在住の外国人の存在
　歴史的背景、政治的背景、彼らの祖国と日本との関わり
②日本国内の経済活動と海外との関わり（先進国と発展途上国）
③多文化社会と異文化体験、異文化理解

- プログラムの構成は昨年度と大体同じでいいと思います。
- 「調べて話し合おう」は大枠を設定した中で、自分たちでテーマを決める。
- 県内在住の外国籍（あるいは帰化した）住民や生徒との交流（意見交換、食事あるいはおやつ体験？）
- 自由時間をもっと増やす。生徒同士、あるいは教員やファシリテーターとの交流を持てるようにする。

平成17年度 第3回研究会

【開催概要】

日　時：平成17年12月1日(木)　午後6時30分から
場　所：かながわ県民センター12階 「第1会議室」
内　容：セミナープログラムの作成、ほか
参加者：

委　員	勝俣　誠	明治学院大学国際学部 教授
	江藤　裕之	長野県看護大学外国語講座 助教授
	遠藤　晋	神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
	佐久間　健一	横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
	旦　祐介	東海大学教養学部 教授
	細谷　早里	関東学院大学経済学部 助教授
	富岡　隆夫	財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事
事務局	工藤　浩	財団法人かながわ学術研究交流財団 総括主幹
	安藤　智孝	同　専門員

【議事録】(要旨)

■サブテーマについて

事務局

メインテーマは前回と同様、「世界の入口に立とう」として、サブテーマを新規に考えることが、前回の研究会で確認された。

委員A

基本的には去年の方向性で行って、リピーターの人には考えさせるようにすれば良い。

委員D

多文化教育の立場からいえば、ハリケーンでニューオーリンズの黒人が大変な思いした状況とか、広島で捕まったペルー人とか、そのあたりが大変気になる。

委員A

フランスでは、「異質」な人々を住み分けしてしまった。低所得者というのは社会の底辺の人たちであり、アメリカで言えば黒人層で、フランスで言えばアラブ系か黒人にあたる。住み分けができたことで、彼らの声が聞けなくなり、共生ができなくなった。周りの人は彼らをどんどん敵視して、共産党に投票した人が今度は右翼に投票するようになる。これは日本にも必ず起こることだと思う。そういう意味で多文化共生のプログラムを入れることには賛成。

委員A

日本では「食」の問題といえばアフリカの飢えに結びつける傾向にある。アフリカ人は困っているだろうと言っても、日本だって非常に矛盾した食生活を送っている。それを結び付けないと、頭の中で国際的な感覚が養われない。援助するのも良いが、先進国における差別とか、使いすぎとか、そういうのが見えていないから。それを養うのにはどうしたら良いのかということを考えねばならない。

委員B

「共生」というか、昔の日本社会はどちらかと言えば中間層が多かったが、最近は強者と弱者に分かれている。例えば環境の問題にしても、鳥インフルエンザにしても、遠いところで起こっていることがいずれ自分の生活に影響をもたらすということを感じて欲しい。最近の日本社会は、自分の目先にしか関心が行かないような仕組みになりつつあるが、実際はそうではないのだということを最近強く感じる。

委員A

サブテーマの文言の中に、身近な、多文化共生がわかるようなことを入れられたら良い。

委員B

昨年度のサブテーマにある「私たちの役割」の部分に、何か「共生」のようなものを入れられたら良い。昨年度とそんなに大きく変える必要はないという気はする。

例えば入門編であれば、「私たちの役割」の後に、「多文化共生を求めて」を入れると良いのかなという感じがする。

委員A

参加者は「多文化共生」という言葉がわかるだろうか。

委員D

プログラム内容を見ると、必ずしも多文化共生だけではない。

委員B

例えば「地球家族フォトランゲージ」や「バングラデシュを開発する」というワークショップで多文化共生をベースにしつつ、その後ゼミナールで様々に展開するのだという我々の共通認識があれば、そういったテーマでも良いのかなという気はする。

前回の参加者を見る限り、そういったものは理解できるのではないか。

委員A

入門編を「自分を知り、日本を知り、世界を知る」、発展編を「世界を知って、（多文化）共生の道を探る」。「共生の道を探る」というのは、暴力を使わず、仲良くするにはどうしたら良いのかということ。あまりごちゃごちゃ説明を付けないほうが良い。

差別がどうして起こるのか、社会派の人たちが議論をしている。アメリカ、イギリス、フランスで似たようなことが起こっており、互いにリンクしている。不況になって仕事がなくなると、仕事がある人たちと仕事がない人たちの間で格差が生まれる。それが肌の色で判ると、「やっぱりあいつらは生意気だ」ということになる。そして予算を節約する方向になる。格差が広がれば広がるほど、貧しい人たちの予算が削られ、今回フランスで暴動が起きた。社会党時代は、まだ地域の中で交流する場があったが、これがなくなったことで、安全弁がなくなった。

なぜそういうことが発生したのかを考えなければ、「異質なもの」という差別で終わってしまうのではないか。そういうメッセージをこめたようなサブテーマがあれば。

委員B
発展編の方は、「人種」や「環境」など、より具体的なものをちょっとでも入れたほうが、子どもたちがとりつきやすいだろう。入門編と発展編の差をつかみやすい。

委員D
具体的ではないが、例えば「グローバルな問題について語ろう」はどうか。

委員A
「グローバルイシュー」や「地球的課題」。という言葉を高校生世代が理解できるだろか。「多文化共生」は硬いので「共に生きる世界」はどうか。

委員B
前回のアンケートでは「非常に難しかった」という生徒もいて、募集の段階である程度コースを選択できた方が良い。

■特別講演

事務局
特別講演講師である池田香代子さんが29日のみ可能だということだが、彼女を入門編、発展編のどちらに位置付けるべきか。
せっかく池田さんにご参加いただくので、29日のワークショップは「100人村」にしたい。これは「発展編」にふさわしいものか。

委員B
ファシリテーターのやり方によって、レベルを上げることができる。前回、「貿易ゲーム」を提案したが、「100人村」の後に「バーンガ」をやっても、流れとしては問題ない。あとは、ファシリテーターの力量があれば問題ないだろう。逆に、池田さんの講演が発展編にあうかどうかから判断したら良いだろう。

委員A
彼女は異文化理解というより、いろんな人がいるのにどうやって折り合いをつけたらよいですかというような人だから、発展編のほうがむしろ良い。
去年やったことは入門編でやって、実験的なことは発展編でやれば良いだろう。

事務局
入門編の基調講演の講師はどうするか。

委員B
できれば、特別講演では「多文化」に関わる見識ある方、関わってこられた方にやっていただいた方が、後の流れが良いだろう。入門編のテーマにマッチするような方をお願いしたら良い。

委員A
ビデオ・ジャーナリストの野中章弘さんも候補に上がっていた。彼は、「真実を知るために頭の筋肉を鍛えろ」、「情報を鵜呑みにするな」という強いメッセージをお持ちの方。既存の概念を疑ってみるという意味で、とてもパンチのある人。

委員B
ルワンダで義足作りの支援をしている吉田真美さんはどうか。

委員Ａ
以前、彼女の講演を聴いて感心した。話し方は上手いし。ただ残念ながら、3 月にはルワンダにいらっしゃるとのこと。

委員Ａ
特別講演のねらいがどこにあるのか。何かを考えさせるのか、「この人みたいになりたい」と思わせるのか。
去年の場合は、考えさせるタイプだったと思う。青年海外協力隊は人気があるので、特別講演としてその OB・OG を呼ぶと、「私も行きたい。どうしたら準備できるか」になる。それが特別講演としてふさわしいか。

委員Ｂ
フォトランゲージのワークショップにつなげる意味で、写真家の田沼武義さんなどは良いと思う。世界を見てきたことを話してもらう。

委員Ｂ
サクセスストーリーではなくて、いろんな国の体験談を語ってもらった方がよい。

■選考について

委員Ａ
一番重要なのは、参加者の選考の件で、事務局が責任を持つのか、研究会が持つのかを明確にすること。何かあったときにどちらが責任を持つのか。

事務局
参加者の選考は研究委員が行い、申し込み用紙の文章を基に点数化する。採点基準は知識ではなく参加意欲。

委員Ｂ
参加意欲というのは、「こういうことを勉強したい」、「こういうものを学びたい」というところを点数化するしかない。

委員Ｂ
最後の同点のところで、「男女比や学校が偏らないように」という基準を決めておけば良い。

委員Ａ
十分に日本語ができない人が参加を希望した場合はどうするのか。文章を書くことが苦手だと差が出るのではないか。

委員Ｂ
仮にそういう人が参加して、実際に 2 泊 3 日の中でどの程度学ぶことができるのか。現実には、ある一定以上日本語ができないとプログラムへの参加そのものが難しい。

事務局
「参加希望理由」または「セミナーに期待すること」など、研究委員がより聞きたいことを文章化してもらう。

委員Ｅ
「○○をしてみたい」ということを引き出すような問いになっていないといけない。

委員Ｂ
どういうことを期待して参加するのかをわれわれも知っていたほうが良い。

事務局
リピーターの参加についての判断は、各先生方にお任せする。

委員E

大学生向けのセミナーでは電子メールで申し込みできるが、そういったことはしないのか。

委員D

大学の推薦入学の際に受験生に聞いたところ、ワープロソフトは使えないという高校生もいたので、気をつけなければならない。

■グループ発表など

委員A

前回は研究委員とファシリテーター、学生アドバイザーとの打ち合わせがなかった。全体の趣旨をつかまないままファシリテーションをしてしまうと、今まで研究会で話し合ってきたようなことがセミナーに反映されないのではないか。

事務局

学生アドバイザーは、男女２人ずつ４名を考えている。財団のセミナーに参加した中から、コミュニケーション能力を重視して事務局でスカウトしている。

委員B

各グループで、２日目の夜は２時間話し合う。最後発表にするのか、討論にするのか。

委員A

何について討論するのか。

委員B

キーワードを与えてグループ内で討論をするか、ミニ国連のような形で、あるテーマについて全体で討論する。

委員A

最終日にはセミナー全体を締めくくるようなものがないとまずい。自分が当事者となって、「こういう問題にはこういう解決策が必要だ」など、なんらかの方向付けが必要かもしれない。

委員B

２日目夜の２時間で、自分たちで課題を見つけられると良い。ただ、ある程度我々のほうでいくつかキーワードを用意をしておいて、それについて話し合ったものを最終日に発表することになると思う。

委員A

話し合いには大きなテーマの設定をすると良い。例えば「21世紀というのはどういう世紀にしたいのか」、「50年後には世界はどうあって欲しいのか」をベースに、そのために何が障害になって、どういうことをしていったら良いのかを「貧困」「紛争」など、いろんな視点から。

委員B

入門編は各グループがテーマについて発表をして、発展編は円卓会議のように、各グループが討論するのはどうか。入門編は発表する人と聴く人という位置付け、発展編はそれぞれが発表しあうという位置付け。

（以上）

平成 17 年度 第 4 回研究会

【 開 催 概 要 】

日　時：平成 18 年 3 月 28 日（火）午後 3 時から
場　所：湘南国際村センター　特別研修室会議室
内　容：
参加者：
委　員　勝俣　誠　　明治学院大学国際学部 教授
　　江藤　裕之　　長野県看護大学外国語講座 助教授
　　遠藤　晋　　神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭
　　佐久間健一　　横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長
　　細谷　早里　　関東学院大学経済学部 助教授
　　富岡　隆夫　　財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事

学生アドバイザー
　　野口　美奈

事務局　広崎　勉　　財団法人かながわ学術研究交流財団 主事
　　安藤　智孝　　同　　専門員

特別傍聴者
　　鈴木　啓子　　福島県　県民環境総務領域青少年グループ　主査

※福島県では、平成 18 年度に青少年を対象とした国際人材育成事業を計画しているため、担当者が研究会およびセミナーを見学。

【 議 事 録 】（要旨）

■セミナー実施後の印象

委員 B

「感じて語ろう」という目標が達成できた。今回 17 名の参加者ということで密度の濃いプログラムになった。去年とはだいぶ違う。

特別講師の野中さんのお話が、その後のゼミナールにつながった部分がすごくあった。ファシリテーターの木下さんは去年経験されているため、去年以上によかった。

今回はワークショップと講義（ゼミナール）を分けたことで、時間的なゆとりができた。全体として時間配分も特に問題がな

かった。当初、ゼミナールは選択性を考えていたが、参加者が17名だったため、各1時間ずつ全体で行い、全ての参加者が3つとも受講することができた。

ワークショップの時間が増えた分、講義にも集中したので、全体としてバランスがよかった。

委員D

去年と比較すると、少人数だったので、こちらもきめ細かく見れたし、参加した人も満足度が高かったのではないか。

特別講演も野中さんは非常にわかりやすい語り口で語ってくれた。高校生世代にとって身近な「メディア」がテーマだったこともあり、よかったのではないか。

ワークショップも去年は人数が多くて消化不良に終わってしまった部分があったが、今回はちゃんと完結できたという印象を受けた。ファシリテーターが非常に優秀であった。

アンケートには「NGO」「UN」「JICA」という言葉がわからなかったというコメントもあり、「入門編」としてのニーズはあるのだと感じた。時間配分については、高校生世代にとっては講義は1時間、休み時間は30分くらいが良いようだ。当初はゼミナールを選択性にするというプログラムであったが、「入門編」として少しずついろんなトピックに触れるというのは良いようだ。

参加人数は、25人くらいまでは増やしても良いと感じた。参加者の昨日と今日の変化を見ていても、やはりセミナーの期間は2泊3日がベストだと思う。

もう少し神奈川県の広い範囲から来るようにならないかと思うが、やはり高校生世代だと行動範囲に限りがあるか。

委員F

去年の場合は、ワークショップとレクチャーを一組にしたプログラムで、あわただしかった。講師がメインなのか、ワークショップがメインなのかが不明だった。今回はワークショップから講演まで一つのリンクができていて、生徒にとってもわかりやすかった。講師の立場から、ゼミナールの内容に締め付けがなかったので、自分の強みを活かすことができた。

去年は「調べ学習」など、どちらかというと「知る」がメインだったように思うが、今回はものを見る視点、ワークショップ、講義で学んだことを生かして考えること、そして考えを表現できるディスカッションという、一連の流れができていたように思う。

講義と講義の間に休憩を30分とったのはよかったが、欲を言えば、もう少し講義の時間がほしい。ゼミナール制度の導入で、前回よりも「参加型」になったようだ。

委員B

「グループディスカッションやりましょう」といったらすぐに言葉が出てくる。発表では自分たちの思いを一生懸命伝えようとしているし、フロアからも質問が出た。

委員G

野中さんの講演内容が衝撃的で、参加者の頭の中が普段とは異なる方向に回転したのではないか。またディスカッションでは、使ったことのない言葉を、論理として使っている。抽象的な言葉で一生懸命話をする体験というのは、普段の生活にはなかっただろう。

学生アドバイザーA

まずみんなを知る、アイスブレイキングをすることが必要だったのではないか。打ち解けられる雰囲気が1日目にほしかった。人間関係を作るためには、かくれんぼや鬼ごっこなど、バカバカしいが楽しいものをやっても良いのではないか。

会場の使い方として、グループごとの距離が遠い。

野中氏の講演から発表まで、「考える」ということがテーマだっただったが、「考える」時間はあったが、それをグループなどでフィードバックする時間が足りなかったように感じる。全体の雰囲気の中では言えないが、小さいグループなら言えるということもある。

ある参加者は「もうちょっとディスカッションしたかった。もっとみんな乗ってくれるかと思った」と発言していた。もっと生徒同士が打ち解けられるような雰囲気を作るべきだろう。

全体で自己紹介する場は必要だと思う。

委員B

17人だからうちとけられるだろうと、今回は油断した。最初からグループがあった方が良い。

委員D

話し合う時間をたくさん持つためにはどこかで時間を削らなければならない。

学生アドバイザーA

基調講演の後に一人では質問が出なくても、グループで話し合えばいろいろ出ると思う。周囲で話あうというのが必要。

委員B

今日一日はこのグループで行こうとか。同じ学校同士の人が固まらないようにグループを作っておく。

基調講演講師を含めてアイスブレイキングをすればよいと思う。

事務局

① セミナープログラムの前に人間関係づくりのプログラムを入れるべきである
② そのためには講演の前にワークショップを持ってくるべきである

ということか。

委員D

最初にワークショップだと逆に引く場合があるかもしれない。人数にもよるが、やはり最初にアイスブレイキングが必要だろう。

委員A

自己紹介をしないままワーッとやると、参加者が緊張してしまう。

委員A

適正人数というものはあるだろうが、参加者がたくさんいればよいということではなく、教育の質の問題。このセミナーでは質のいいものをしっかり作っていく場としたい。逆説的ではあるが、少人数でも来る人はいる。セミナーの差別化を図りたい。

委員B

30人前後が適切な人数だと思う。こういったプログラムでは2泊3日がベストではないか。実施時期は、2回やるのであれば今回のように春休みに連続して行うよりは、夏休みにも設けた方が良い。

事務局

国際に興味のある高校生は、春休みに海外研修に出ているケースが多いようだ。

去年の参加者のアンケートで「次回も必ず参加したい」に○印をつけた人が40名以上いたが、実際には海外に行っている過去参加者も多い。

委員F

今回は17名ということで「少ない」と思っていたが、実際にはそうでもなかった。ただ、少なくとも20人くらいいても良い。実施時期は夏と春でチョイスがあると良い。3月は講師が忙しい場合がある。

事務局

第1回目のくじのグループはこちらで作っておいて受付で渡し、プログラムが始まる前から自己紹介をお互いにできるようにしておけば良い。

委員B

最初にグループで自己紹介をやって、ワークショップはバラバラ。夕食時の着席でまた最初のグループに戻るようにしてはどうか。

学生アドバイザーA

最初に決まったグループがあると安心する。特に1人で参加している生徒は。いきなり「はい、グループ作って」と言われてもなかなか難しいのではないか。

委員B

当初、ゼミナールは3つの中から2つを選択することになっていたが、入門編では全てのゼミナールを実施した。「発展編」の場合は、新しいやり方を検証する意味でも、予定通りテーマを選択してやってみてはどうか。

■2年間の研究会をふりかえって

委員B

去年の反省が今回に生かされている。去年、今年と格段の差がある。

「入門編」の反省が、明日からの「発展編」に生かされているのではないか。来年度も集大成として全体の研究会を生かせれば、2年間の研究は有効ではないか。

委員C

セミナーの中身は改善されている。去年は65名だったこともあり、今回はたくさん参加するのではないかと思っていたが、なぜ増えなかったのか。中身が良くなっているのに、なぜ人数が増えなかったのか、PRなどの方法について引き続き検討を続ける必要があるだろう。

委員F

前回と比較して、今回のほうが充実していた。われわれの役割は、セミナーの形をつくって、セミナーをパイロット的にやって、こうしたプログラムを社会に提示していくこと。

一方で、一つの型は提示できても、ただそこに流し込めば上手くいくというものではない。プログラムそのものが良いのか、たまたま参加した生徒が良いのか、たまたま講師が良いのか…予測できない要素もある。参加者も含めてみんなで作り上げるものだなと実感している。

委員D

この2年間大変勉強になった。1回目の課題をそのまま2回目に生かせるよう、私

たちも意見を言い合って、それで間違いなく前回よりは良くなっている。予測できないことはあるが、多少の上手くいったなという時、あれっという時もあるかもしれない。

委員Ａ

２年間、みなさんといろいろ考えてきた。国際セミナーでどんな人材をつくるかという時に、よく言われるのは「実践力」。それも一つ重要だとは思うが、大学教員がカリキュラム内容に関わるだけじゃなくて、コミュニケーションをする方法をどうして高校のレベルで身に付けてほしい。外国でもどこでも行っても、異質な人と話せる、しかも相手の話を理解できる、それが国際社会で日本人が一番弱いところ。相手と対等の立場で話し合う習慣がまだまだ足りない。

今回、自分自身が勉強になったのは、やはりみなさんがいろんな考えを含めて、どうやって対等な対話をしていくのか。

キャリアをつくって、自分の考えをいかに相手に押し付けるかばかり考えている、そういうのではない国際人、しかもちゃんと肝心な時には自分でイニシアティブをとることができる、そういうのが国際人だなということが分かった。そういうことに貢献するようなものがこのセミナーではないかと思う。

２年間、ありがとうございました。

（以上）

第２部

湘南国際村青少年国際セミナー

Kanagawa Program of International Training

【セミナー実施一覧】

○平成 16 年度 湘南国際村青少年国際セミナー
日　程：2005 年 3 月 27 日（日）～29 日（火）〔2 泊 3 日〕
会　場：湘南国際村センター「国際会議場」ほか
参加者：65 名

○平成 17 年度 湘南国際村青少年国際セミナー「入門編」
日　程：2006 年 3 月 26 日（日）～28 日（火）〔2 泊 3 日〕
会　場：湘南国際村センター
参加者：17 名

○平成 17 年度 湘南国際村青少年国際セミナー「発展編」
日　程：2006 年 3 月 29 日（水）～3 月 31 日（金）〔2 泊 3 日〕
会　場：湘南国際村センター
参加者：34 名

○平成 18 年 第 1 回湘南国際村青少年国際セミナー
日　程：2006 年 8 月 20 日（日）～8 月 22 日（火）〔2 泊 3 日〕
会　場：湘南国際村センター
参加者：12 名

○平成 18 年度 第 2 回湘南国際村青少年国際セミナー
日　程：2006 年 11 月 3 日（金・祝日）～5 日（日）〔2 泊 3 日〕
会　場：JICA 横浜国際センター
参加者：24 名

○平成 18 年度 第 3 回湘南国際村青少年国際セミナー（予定）
日　程：2007 年 3 月 26 日（月）～28 日（水）〔2 泊 3 日〕
会　場：東海大学湘南キャンパス
参加者：34 名（予定）

平成 16 年度 湘南国際村青少年国際セミナー

【 開 催 概 要 】

テーマ：「世界の入口に立とう～感じる・遊ぶ・語ろう―わたしたちの役割」

日　程：2005 年 3 月 27 日（日）～29 日（火）〔2 泊 3 日〕

会　場：湘南国際村センター「国際会議場」他

参加者：65 名

参加費：10,000 円

講師・スタッフ：

〔特別講師〕　松本 仁一　（朝日新聞 編集委員）

〔プログラム委員〕

委員長　勝俣 誠　（明治学院大学国際学部 教授）

江藤 裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

遠藤 晋　（神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭）

佐久間 健一（横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長）

旦 祐介　（東海大学教養学部 教授）

細谷 早里　（関東学院大学経済学部 助教授）

〔ファシリテーター〕

出口 雅子　（ピナツボ復興むさしのネット）

木下 理仁　（神奈川県国際交流協会）

〔学生アドバイザー〕

飯塚 大輔　（拓殖大学大学院）

杉山 雅彦　（中央大学）

タスタンベコワ クアニシ（筑波大学大学院）

野口 美奈　（明治大学）

馬場 充　（日本大学）

【 プログラム 】

3月27日（日）

13:00　受付
13:30　開会式
13:40　特別講演
　演題　「異文化とどう付き合うか？～食べることから考える～」
　講師　松本　仁一（朝日新聞編集委員）
14:40　休憩
15:00　セクションⅠ「地球家族・私の存在、あなたの存在」
　遠藤　　晋　（県立向の岡工業高校 教諭）
　佐久間　健一（横浜国際女学院翠陵高校 副校長）
　細谷　早里　（関東学院大学経済学部 助教授）
18:00　チェックイン
18:30　ウェルカム・パーティー
20:00　調べて話し合おう①
22:00　就寝

3月28日（月）

7:30　朝食
9:00　セクションⅡ「豊かさってなに？～安心できる世界～」
　勝俣　誠　（明治学院大学国際学部 教授）
　旦　祐介　（東海大学教養学部 教授）
12:00　昼食
14:00　セクションⅢ「『目に見えないもの』を考えよう
　～グレート・アイディアへのいざない～」
　江藤　裕之（長野県看護大学外国語講座〔英語〕 助教授）
16:00　休憩
16:15　調べて話し合おう②
18:30　夕食
20:00　調べて話し合おう③
22:00　就寝

3月29日（火）

7:30　朝食、チェックアウト
9:00　グループ発表
11:00　休憩
11:10　講評
12:00　修了証書授与式、フェアウェル・パーティー
13:30　解散

平成17年度
湘南国際村青少年国際セミナー「入門編」

【開催概要】

テーマ：「感じる・遊ぶ・語ろう―共に生きる世界を求めて」

日　程：2006年3月26日（日）～28日（火）〔2泊3日〕

会　場：湘南国際村センター「国際会議場」他

参加者：17名

参加費：13,000円

講師・スタッフ：

〔特別講師〕　野中 章弘　（アジアプレス・インターナショナル代表）

〔プログラム委員〕

江藤 裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

遠藤 晋　（神奈川県立向の岡工業高等学校 教諭）

細谷 早里　（関東学院大学経済学部 助教授）

〔ファシリテーター〕

木下 理仁　（かながわ開発教育センター）

西　あい　（開発教育協会）

〔学生アドバイザー〕

青柳　絵梨子（中央大学）

野口　美奈　（明治大学）

馬場　　充　（日本大学）

吉原　若菜　（中央大学）

【 プログラム 】

3月26日（日）

13:00　受付開始
13:40　開会式
13:50　特別講演「考える筋肉をつけよう」
　　野中 章弘(ビデオジャーナリスト、アジアプレス・インターナショナル代表)
14:50　休憩
15:00　セクションⅠ「地球家族フォトランゲージ」
18:00　チェックイン
18:30　ウェルカム・パーティー
20:00　「地球家族」ビデオセッション
22:00　就寝

3月27日（月）

7:30　朝食
9:00　セクションⅡ「バングラデシュを開発する」
12:00　昼食、お昼休み
14:00　セクションⅢ「ゼミナール①」
15:00　休憩
15:30　セクションⅢ「ゼミナール②」
16:30　休憩
17:00　セクションⅢ「ゼミナール③」
18:30　夕食
20:00　グループ・ディスカッション
22:00　就寝

3月28日（火）

7:30　朝食
9:00　発表準備
10:00　グループ発表
11:00　休憩
11:15　講評・閉会式
12:00　フェアウェル・パーティー
13:30　解散

「ゼミナール」講師・テーマ

A：遠藤 晋（向の岡工業高校教諭）
「高校生から出来る国際協力」

B：細谷 早里（関東学院大学助教授）
「身近な国際化を考える
　　－多文化社会としての日本」

C：江藤 裕之（長野県看護大学助教授）
「『目に見えないもの』を考えてみる
　－『～って何？』を問いかけ、
　　対話を通じて理解を深める」

平成17年度
湘南国際村青少年国際セミナー「発展編」

【開催概要】

テーマ：「地球的課題に触れて・感じて・語ろうー私たちの役割」

日　程：2006年3月29日（水）～31日（金）〔2泊3日〕

会　場：湘南国際村センター「国際会議場」他

参加者：34名

参加費：13,000円

講師・スタッフ：

〔特別講師〕　池田　香代子（「世界がもし100人の村だったら」訳者）

〔プログラム委員〕

勝俣 誠　（明治学院大学国際学部 教授）

江藤 裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

佐久間 健一（横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長）

〔ファシリテーター〕

木下 理仁　（かながわ開発教育センター）

西　あい　（開発教育協会）

〔学生アドバイザー〕

貝澤　麻衣　（青山学院大学）

木村　恵美子（青山学院大学）

杉山　雅彦　（中央大学）

堀尾　藍　（明治学院大学大学院）

【 プログラム 】

3月29日（水）

13:00　受付
13:40　開会式
13:50　セクションⅠ「世界がもし100人の村だったら」
16:50　休憩
17:00　特別講演「世界がもし100人の村だったら」
　　池田 香代子（『世界がもし100人の村だったら』訳者）
18:00　チェックイン
18:30　ウェルカム・パーティー
20:00　カードゲーム「バーンガ」
22:00　就寝

3月30日（木）

7:30　朝食
9:00　セクションⅡ
　　「Talk for Peace！～ もっと話そう！ 平和を築くためにできること ～」
12:00　昼食、お昼休み
14:00　セクションⅢ「ゼミナール①」
15:30　休憩
16:00　セクションⅢ「ゼミナール②」
17:30　グループ・ディスカッションの説明
18:30　夕食
20:00　グループ・ディスカッション
22:00　就寝

3月31日（金）

7:30　朝食
9:00　発表準備
10:00　グループ発表
11:00　休憩
11:15　講評・閉会式
12:00　フェアウェル・パーティー
13:30　解散

「ゼミナール」講師・テーマ

A：勝俣　誠　（明治学院大学教授）
「南北問題として世界を見回す
－21世紀の希望のシナリオを考えてみる」
B：佐久間　健一
　　（横浜国際女学院翠陵高校副校長）
「国際感覚って何？」
C：江藤　裕之（長野県看護大学助教授）
「『目に見えないもの』を考えてみる
　　－『～って何？』を問いかけ、
　　対話を通じて理解を深める」

平成 18 年度
第 1 回 湘南国際村青少年国際セミナー

【 開 催 概 要 】

テーマ：「世界の入口に立とう」

日　程：2006 年 8 月 20 日（日）～8 月 22 日（火）〔2 泊 3 日〕

会　場：湘南国際村センター「国際会議場」他

参加者：12 名

参加費：10,000 円

講師・スタッフ：

〔特別講師〕　勝俣 誠　（明治学院大学国際学部 教授）

〔ゼミナール講師〕

江藤 裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

野口 和彦　（東海大学教養学部 助教授）

平山　恵　（明治学院大学国際学部 助教授）

〔ファシリテーター〕

木下 理仁　（かながわ開発教育センター）

西　あい　（開発教育協会）

〔学生アドバイザー〕

杉山 雅彦（中央大学）

貝澤 麻衣（青山学院大学）

【 プログラム 】

8月20日（日）

13:40 開会式

13:50 ワークショップ

「地球家族フォトランゲージ」

17:00 特別講演：勝俣 誠　先生

「南北問題として世界を読む」

18:30 ウェルカム・パーティー

20:00 「地球家族」ビデオセッション

8月21日（月）

7:30 朝食

9:00 ワークショップ

9:30 ゼミナールA：江藤 裕之　先生

「『目に見えないもの』の表現―ことばによるコミュニケーションとは」

10:40 ワークショップ（前半）

「Talk for Peace! ―もっと話そう、平和のためにできること」

12:00 昼食

14:00 ワークショップ（後半）

15:45 ゼミナールB：野口 和彦　先生

「どうして戦争は起こるのか？―グローバリゼーションと国家」

17:00 ゼミナールC：平山 恵　先生

「私が変われば世界が変わる―ディスカッションからアクションへ」

18:30 夕食

20:00 グループ・ディスカッション

8月22日（火）

7:30 朝食

9:00 グループ発表準備

10:00 グループ発表

11:30 講評・修了証書授与式

12:00 昼食会

13:30 解散

平成18年度
第2回 湘南国際村青少年国際セミナー

【開催概要】

日　程：2006年11月3日（金・祝日）～5日（日）〔2泊3日〕

会　場：JICA横浜国際センター「かもめ」ほか

参加者：24名

参加費：6,500円

講師・スタッフ：

〔ゼミナール講師〕

大泉 敬子　（津田塾大学国際関係学部 教授）

江藤 裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

高橋 祐三　（東海大学教養学部 助教授）

〔ファシリテーター〕

田中 祥一　（かながわ開発教育センター）

西　あい　（開発教育協会）

〔JICA横浜プログラムスタッフ〕

多々見 香織　（JICA横浜国際センター）

辻 伸二　（海外日系人協会）

小嶋 茂　（海外日系人協会）

福山 文子　（海外日系人協会）

〔学生アドバイザー〕

杉山 雅彦　（中央大学）

大堀 和子　（日本大学）

【 プログラム 】

11月３日（金･祝日）

10:00 開会式
10:15 交流ゲーム①
10:30 ワークショップ
12:30 昼食・休憩
14:30 JICA横浜プログラム
「多文化共生-海外移住と日系人」
17:30 ウェルカム・パーティー
19:00 ゼミナールＡ：大泉 敬子先生（津田塾大学）
「人間にとって『安全』ってなんだろう？」
20:30 自由交流・就寝準備
22:00 就寝

11月４日（土）

９:00 交流ゲーム②
10:00 ゼミナールＢ：江藤 裕之先生（長野県看護大学）
「『目に見えないもの』の表現 ―ことばによるコミュニケーションとは」
11:30 昼食・休憩
13:00 ワークショップ
16:00 休憩
16:30 ゼミナールＣ：高橋 祐三先生（東海大学）
「『国際』ってなんだろう？―みんなの将来、アジアの未来」
18:00 夕食・休憩
19:30 話し合ってみよう
20:30 自由交流・就寝準備
22:00 就寝

11月５日（日）

９:00 グループ発表
11:30 講評・修了証書授与式
12:00 終了・解散
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
13:00 セミナー報告書チーム（任意参加）
15:00 作業終了・解散

平成18年度
第3回湘南国際村青少年国際セミナー

【開催概要】

日　程：2007年3月26日（月）～28日（水）〔2泊3日〕

会　場：東海大学湘南キャンパス

参加者：34名（予定）

参加費：7,300円

講師・スタッフ：

〔特別講師〕

柘山 堯司　（青山学院大学 教授）

木原 実郎　（共同通信社国際局 次長）

〔ゼミナール講師〕

小貫 大輔　（東海大学教養学部 助教授）

江藤 裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

ジェフリー・カーター（東海大学教養学部 教授）

〔ファシリテーター〕

木下 理仁　（かながわ開発教育センター）

西　あい　（開発教育協会）

〔学生アドバイザー〕

今村 速水　（神戸大学大学院）

菊池 賢吾　（東海大学）

杉山 雅彦　（中央大学）

根岸 さやか（東海大学）

【 プログラム 】(予定)

3月26日（月）

10:00	開会式
10:15	ワークショップ「世界の文化を知る」
12:30	昼食
13:30	「私が暮らしたブラジル～貧困コミュニティでの活動から」 小貫大輔先生（東海大学助教授）
14:30	ワークショップ「戦争と平和について」
15:00	「国際社会は紛争にどうやって立ち向かうのか？～国連の役割を考える」 柘山堯司先生（青山学院大学教授）
16:30	ワークショップ「今日のことをふりかえって」
18:00	ウェルカム・パーティー(東海大学留学生との交流会)
20:00	自由交流
22:00	就寝

3月27日（火）

9:00	ワークショップ「表現とコミュニケーション」
10:00	「『目に見えないもの』を考える」 江藤裕之先生（長野県看護大学助教授）
11:30	大学キャンパスツアーと昼食
13:30	「南アフリカ体験記～海外でのボランティア活動から」 ジェフリー・カーター先生（東海大学助教授）と大学生ボランティア
14:30	ワークショップ「メディアを読み解く」
15:00	「国際問題をどう見るか～ニュースで考えるものの見方、考え方」 木原実郎先生（共同通信社国際局次長）
16:30	トーキング・カフェ
17:30	夕食
18:30	「○○について語ろう」
20:00	自由交流
22:00	就寝

3月28日（水）

9:00	「○○について」語ったグループ発表
11:00	先生方からのコメント
11:30	修了証書授与式
12:00	終了・解散

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

13:00	セミナー報告書の作成（希望者のみ）
15:00	作業終了・解散

第３部

「青少年国際人材育成」
研 究 成 果 発 表 会

【開催概要】

名　称：「青少年国際人材育成」研究成果発表会

日　時：平成18年8月22日　14:00～

会　場：湘南国際村センター　ルミエール

講　師：

〔活動報告〕

Piece of Peace の皆さん

〔基調講演〕

山根　誠之　（横浜 YMCA 総主事）

〔パネリスト〕

勝俣　　誠　（明治学院大学国際学部 教授）

佐久間健一　（横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長）

江藤　裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

【プログラム】

14:00　開会式

14:05　団体活動紹介

国際ボランティア団体「Piece of Peace（P.O.P）」による活動紹介

※P.O.P は湘南国際村青少年国際セミナーの参加者が自主的に立ち上げた国際ボランティア団体。2006年2月、横浜 YMCA「夢すくすく賞」特別賞を受賞。

14:20　基調講演

「若者を育てる－青少年と国際－」

山根　誠之 氏（横浜 YMCA 総主事）

15:10　パネルディスカッション

「湘南国際村青少年国際セミナーと『国際人』の養成」

モデレーター：富岡　隆夫（かながわ学術研究交流財団 専務理事）

パネリスト　：勝俣　　誠（明治学院大学国際学部 教授）

佐久間健一（横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長）

江藤　裕之（長野県看護大学外国語講座 助教授）

16:15　質疑応答

16:45　終了

【Piece Of Peace の活動報告】

「研究成果発表会」

Piece of Peace

POP概要

・構成員　県内の高校生(17名)、大学生2名

・設立経緯　2005年3月に行われた「K－PIT」セミナー(かながわ学術研究交流財団主催)に参加した者の中から有志で設立した

・団体理念　①ユースの視点を大切に

②将来を担う子どもたちの夢を守る

③地球市民として行動を起こすことで国際平和に寄与

企画・プロジェクト

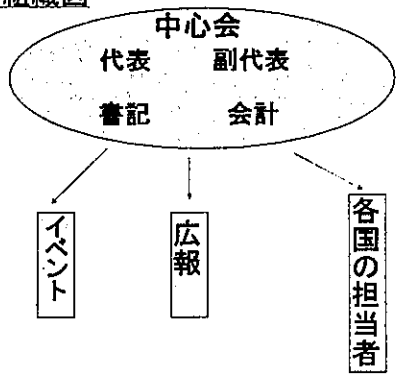
・プロジェクト名

世界子ども絵画展　～小さなアーティストからあなたへ～

・目的　多くの子どもたちの「大切なもの」を感じてもらうきっかけをつくり、同じ世代として広い世代への問題意識の啓発に努める

・内容　世界各国に住む子どもたちに「私の一番大切なもの」というテーマで絵を描いてもらい、それを展示する

POP組織図



世界子ども絵画展

・目的　①世界に存在する国際問題を解決につなげる

②多くの子どもたちの「大切なもの」を感じてもらう

③同じ世代として広い世代への問題意識の啓発をする

世界子ども絵画展

内容

・実施形態　①あーすフェスタ2006出展（6月3・4日）

②JICA横浜での展示（7月）

③県民ホールでの展示（8月）

④あーすプラザでの展示（10月）

計4回開催

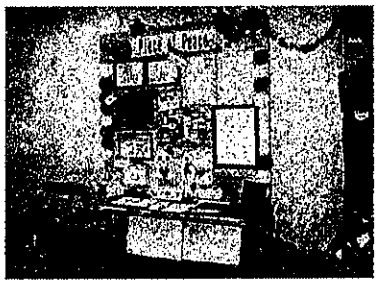
カンボジアの子どもたち

カンボジアの子どもたち

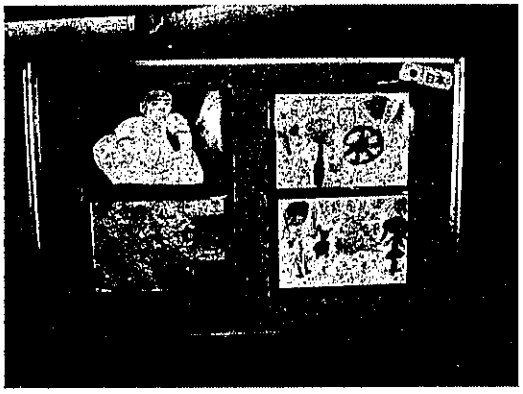
↑ 普段の子どもたち

← 絵を描いているところ

県民ホール



あーすフェスタ



世界子ども絵画展

・アフターケア

①子どもたちの絵や、絵画展の様子をアルバムにする

②アルバムを、

・絵を描いてくれた子どもたち

・絵画収集に協力してくださった日本のNGO団体

の二者に報告書と共に送る。

そして、POPホームページにアルバムと報告書を掲載し、日本国内に子どもたちの想いを広める！

ご清聴ありがとうございました

Piece of Peace

【基調講演】

「若者を育てる－青少年と国際」

山根　誠之 氏（横浜 YMCA 総主事）

■P.O.P.が「夢すくすく賞」を受賞

先ほど Piece Of Peace の発表を聞かせていただきました。P.O.P.、Piece Of Peace というのはとてもいい名前です。横浜 YMCA は2年前の2004年に創立120周年を迎え、その時に「夢すくすく賞」というのをつくりました。それは夢を持って地域や世界の課題の解決に取り組むグループや団体を支援しようというものです。そして先ほどの Piece Of Peace が見事、昨年の特別賞を受賞して、私どものほうからわずか10万円ですが差し上げて、展示会を開催するための資金になったということでございます。

私どもがこの Piece Of Peace を選んだ理由ですが、受賞の大事な要素というのは社会性、独創性があって、課題に取り組むにあたってボランティアの視点で最後までチャレンジする意欲を持っているかどうかを審査の重要な要素にいたしました。先ほどの発表を見ますと、今まで3回やっておられて、いよいよ残り1回を10月にやられるというところまで来ました。きちんとやっておられるのだということを、改めて感じた次第であります。

そのグループの設立趣旨・理念でございますが、先ほど個条書きで3つ書いてございましたけれども、「世界が抱えている諸問題に対して、ユースの視点から問題解決に向けての活動に取り組みます」「私たちはとりわけ未来を担う子どもたちの夢を守らなければならないと考え、明るい平和な社会を築いていくことを目指しています」「世界各地の子どもの現状を考え、地球市民として行動を起こすことで国際平和に寄与することを望みます」という理念を掲げておられました。審査にあたった私たちは、世の中が国際化されてきたとはいえ、現実は受験戦争の真っただ中に置かれていたり、あるいは自分だけが楽しければいいという考えが蔓延している若者の世界に、こんなに真剣に自分以外のことを考える高校生たちがいるのだと感心いたしました。こういう若い人たちを励ますことが「夢すくすく賞」のもともとの私たちの夢であります。

そういう意味で、彼らは2004年の大会の賞をもらわれたわけですが、私どもの「夢すくすく賞」のいわば基になられたのが、「国際村青少年国際セミナー」であったわけで、私はこの「K-PIT」セミナーがどのように行われているかということについて大変関心を持っておりました。そしてセミナーの報告書を読み、セミナーの基礎をおつくりになった研究会の座長である勝俣先生とお話をさせていただいて、非常に感銘を受けたという次第です。

■横浜 YMCA の創設と青年たち

横浜 YMCA のことを少しお話しいたします。1884年、明治17年に横浜に生まれました。ですから、もう122年になります。横浜の山下公園近くにあります瀟洒な建物で横浜海岸教会というのがございまして、日本で最初のプロテスタント教会です。実

は1880年、明治13年に東京でYMCAができ、そしてその2年後、1882年、明治15年に大阪でYMCAができておりました。こうしたことを受けて、その教会の若い5人のクリスチャンの青年たちが、日本で3番目のYMCAを横浜につくったのが、横浜YMCAの大本でございます。

また、明治時代のキリスト教の信者というのは、どちらかといいますと、欧米社会の自由で近代的な在り方の原点にキリスト教があるということを見て、「封建的な日本社会を変えていくのはキリスト教の教えが必要ではないか」と考えていた節があったように思います。したがって、横浜YMCAを始めました5人の青年たちが最初に取り組んだことは、「公娼制度」の廃止でした。当時、日本の社会においては女性の人権が無視され、今でいえば売春のようなことが公然と行われていたのが「公娼制度」でして、この制度をなくすための運動をしようということになりました。公娼制度が存在するような社会は、女性が、そして人間が大切にされる社会ではないと考えて、このような社会の仕組みを変えなくてはならないという使命感を持って「廃娼運動」に取り組んだのであります。

そのため当時、演説会を頻繁に開催しましたし、神奈川県議会に働きかけまして、明治23年、1890年に公娼全廃請願書というものを提出しております。そしてそれはかつて自由民権運動に参加して、クリスチャンとして知られていた宮田寅治議員らによって取り上げられまして、議会49名の議員中、30名の多数で採択を受けて議決されました。そして5年後に廃娼が実施されることになったという歴史がございます。しかしその後、激しい抵抗運動、阻止運動が起こり、実は5年後の廃娼は実現しなかったということがございます。現在でもいろいろなところで構造改革が難しいことは、皆さん方ご承知のとおりでございますが、しかし、青年たちの情熱が県議会まで動かしたということが歴史にございます。

また、東京YMCAの設立初期には、「足尾鉱毒事件」で本当に命をかけて闘った田中正造が、足尾銅山の農民の人たちを助けるための頻繁な講演会を東京YMCAで開催しておりまして、木下尚江などいろいろな人たちが来て、講演をして田中正造をバックアップしたというようなこともございます。明治時代当時、普通の人々が当然のこととして顧みることのなかったことや、政府や権力が行うことに文句は言えないというような社会に向かって、YMCAに集う青年たちが広い視野を持って「ノー」と言い、勇気を持って社会の改革に取り組んだのです。

こういう事実を見ますと、意見を交わし学び合い、そのことを通じて真理に目覚めて行動するという青年たちの学びと成長の場が、明治時代にもYMCAのようなところであったという。このことはとても大切なことではないかと私は思っておりますし、このことが今の私どものYMCAを方向付けているということと申しましても過言ではございません。

■集団と同質性

さて話題を変えますが、YMCAでは夏休みに多くの子どもたちが海や山にキャンプに出掛けます。このキャンプは幼児から高校生までを対象としておりまして、1つのグループを6人から8人で編成いたします。その6人から8人の単位のグループが8つから10ございまして、そこでキャビンやテントを自分たちの住み家として、1週間に

わたって自然の中で活動を続けます。このグループには1人のカウンセラーが付きます。多くは大学や専門学校の学生ですが、ときには高校生がサブカウンセラーとなって付くこともあります。高校生と言っても、グループ活動を行うための理論的・実践的な学習や、キャンプの実技等も勉強した上でカウンセラーの役割を果たしています。

面白いことに、このキャンプ期間中、子どもたちのグループの性格がとてもグループのカウンセラーの性格に似てきます。実は私も、学生時代にカウンセラーをやりました。子どもたちと1週間生活を共にする中、私は元来が寝坊の性格なんですが、私の担当するグループはよく眠るんです。そして朝の起床も大体いつもビリでありました。本当に不思議だと思います。別にメンバーが早く起きるのを「おまえうるさい、眠りなさい」などというようなことを言ったわけではありませんが、不思議に子どもたちは朝もぐっすり眠っているのです。いつの間にか私の生活態度や考え方がある種の規範となっていくのだと私は思いました。

キャンプ全体を見渡しますと、早起きで活発なグループもありますし、なんとなく行動がゆったりとしたグループもあります。子ども一人ひとりの性格は必ずしもそうでなくても、いつの間にかそれぞれのグループは違いが生じてきているということが言えます。これはおそらく学校のクラス単位でもそうでしょう。グループの構成メンバーは、一人ひとりを見ますと持って生まれた性格もありますし、家庭環境や生育史によって違いもあるのですが、グループ単位としては同じに見えてくるのです。このようなことの延長上に学校の特性や地域の特性、そして国の特性が出来上がっていくことは十分に考えられると思います。もちろんその特性には気候や風土、あるいは狩猟民族か農耕民族か、あるいは集団やグループの成り立ちの仕方などによっても、さまざまな要素が絡んできて特性が出来上がっていくわけです。

しかし、このように普段私たちは学校や職場、家庭、地域、国という永続的な集団に影響を受けていて、自由でいるようですが、気が付かないうちに同質的な考え・価値観が形成されます。さらにそれが進むと、他の人とは異なったことを発言したり異なった行動をすることが困難になり、それをすることで排斥されたりもするということも起こってまいります。もちろんYMCAのキャンプではその違いを大切にしながら、みんなが生き生きと生活することを目指しています。一方そのようなさまざまな集団に所属している人たちが、その集団のくびきから離れて新たな集団をつくるとき、これまでの自分が形成してきた価値観が必ずしも普遍的でないこと、さまざまな違いがあることに気が付き、価値観の揺らぎや修正が起こります。その時、やはり適切なカウンセラーのサポートというものが必要になります。そのことによって自分と同じように大切な命を与えられている。自分と異なった生き方・価値観を持つ人がいるということ。また、世界があるということに気が付いて、そのような多様な人々とともに生きることの大切さに気付いていくのだと私は思っています。

■新たな自分の発見

また一方、このような新しい集団では、これまで日常的に所属していた集団で固定化されていた自分に対する先入観によって、普段見られることのない新しい自分を発見するという機会もあるのです。私が子ども

のころキャンプに行きました時に、何でもないことですが大きく自信を持ったことがあるのです。私は絵が下手でありまして、今でも「何か描け」と言われても全然描けません。その時、目の前に広がる山の景色を鉛筆で描いていました。そうしたら後ろにいたカウンセラーが「君は絵がうまいね」と言ってくれたのです。「え？うまいのかな」と思って一生懸命描きました。それがなんと掲示されました。私の絵が小学校時代の6年間を通じて、掲示されたことは1度もなかったのが、キャンプ場で貼られたんです。私はそれ以来、鉛筆画はなんとなく自信があるのです。色を塗ったらまだ駄目なんですけれども。

そういう何でもない自信が、実はキャンプ生活の中で私のありようを変えていって、非常にアクティブにしていったという経験を持っているのです。そういう意味でも、やはりこれまでの帰属していた集団では決して褒められることもなかったり、また、気付くことのなかった私自身に対する気付きを、新しい集団の中で見いだすことができるということ。このことも大変素晴らしいことではないかと思っています。特にあの人は成績が優秀だとか、ああいう失敗をした人だとかというレッテルを貼られると、その人は自由にはなれません。私たちがこのような先入観や偏見をいかに多く持っているかは、学歴や肩書や出身で人を見たり、判断したりすることからも分かります。そしてそのことから自由になった時、その人は新しい自分を生きることができるようになると思います。

■多様性の大切さ

私は今、横浜に住んでおりますが、横浜は3日住めば「浜っ子」と言われています。私は大変この言葉が好きなんです。私は出身が熊本ですが、熊本では「おまえはどこのもんだ？」「どっから来たんだ？」と、よそ者というのは大変で、言葉も熊本弁を使わない人はまず拒否されるというところから始まります。ですから、地の者として認められるのには何年もかかります。ところが横浜は3日いれば「浜っ子」であります。横浜では「どこの人？」ということを言われることはまず考えられません、いまだ経験がありません。横浜開港150年が近づいておりますけれども、開港後、よその土地から移り住んできた多くのよそ者たちで構成される横浜市は、それだけ人々によそ者、地の者の区分けをしない、自由な空気を感じさせてきたのではないでしょうか。それが横浜の活性化につながっていると思います。

YMCAでも所属の学校や出身地あるいは国籍等、さまざまな異なりのある子どもたちや人々が集って、自由な交流と学びや体験をしますが、それは自分の日常の所属から離れた自由を感じることになりますし、多様な人々との出会いがおのずと広い考えや、物の見方・考え方に気付いていくことになります。そういう雰囲気がありますから、YMCAでは以前から、例えば在日の外国籍の人たちが本名で伸び伸びと多くの人と交流し、働くことができています。

今、私どもの大事な意志決定機関にも、台湾籍やアメリカ籍の人、あるいは在日コリアンなどいろいろな人たちが関わっておられます。国際社会というのは多数の国や地域で構成されて、それぞれの持つ言語、文化、生活、思考様式など多種多彩です。もし私たちがそういう世界を意識して見ていないと、私たちは日ごろの生活の中で関心のあることにしか思いは至らず、また大

きな視野を持つ必要もないと思います。

■アメリカでの体験から

私は数年前、アメリカのニューオーリンズに滞在しておりました。例の大変なハリケーンの被害を受けたところです。ホテルの部屋にサービスでアメリカの大衆紙といわれる『USA TODAY』が置いてありました。まさにアメリカ庶民の人たちの娯楽紙みたいなものかもしれません。ちょうど小泉さんがアメリカに来ておりましたので、何か記事があるかなと思って、その『USA TODAY』を見始めたのです。ところが1枚目、2枚目、3枚目をめくっても全然出てきません。やっと8枚目か9枚目だったと思いますが小さな記事がありました。「日本の小泉首相が来てブッシュの政策を支持すると言った」というような文章が数行書いてあっただけでありました。おそらくその時は、日本では新聞一面に大きく小泉さんはブッシュと対談したと書いてあったと思うのですが、全くそういうことは書いてありませんでした。その時『USA TODAY』の一面は、副大統領のチェイニーさんが、心臓のペースメーカーを入れる手術をしたことであります。そしていついつどこで手術が行われた。そのペースメーカーの機械はどういう器具でどういう性能で、例えば電波に対してはこうだとか、あるいは泳いだりすることには何ら障害がないなど、そういうことを事細かに丁寧に1面から2面の真ん中まで書いてありました。私はこれにはびっくりいたしました。アメリカの大衆にとっては日本の総理大臣の訪米はほとんど関心がなく、副大統領のペースメーカーのほうがはるかに重要な関心事だったということは、そのときに看て取れました。

以前から、米国の一般の人たちの中には、自分の町から1歩も出たことのない人も多くいると聞いていました。かつて数年前、アメリカのコロラド州から私のうちにホームステイに来た少年に家から手紙が来て、「うちの町にやっと信号が付いた」というようなことを言っておりました。生活の中には日本製品が氾濫していると思いますが、日本を意識しなくても何の不自由も感じないので、日本に関する事柄に関心を持つ必要がなかったんだろうということを、その時の『USA TODAY』の記事を見て感じました。日本がアメリカを思うほど、アメリカ国民は日本のことを思ってはいないのです。ちょうど私たちの日常が特別の事件でもない限り、アジアやアフリカ地域の政治や生活に関心を持っていないために、ニュースで取り上げられる比率が少ないことと同じではないかと私は思います。もちろん最近、日本ではアジアの記事は多くなってまいりましたが。

■国際的な視点とは

YMCAでは、国際的な視野というのはそういう意味で多面的な視野を持ち、その中からよく考えて自分の考え方を形成していくことだと考えて、国の内外を問わず若者の具体的・国際的な体験を重視しています。今年の3月、私たちYMCAでは横浜に留学している外国籍の大学生と高校生の交流会を行いました。話し合いをやったわけです。たまたまその時に中国からの留学生がいまして、その留学生を囲んだ分団が全く偶然でありますが、首相の靖国参拝の問題と日中関係の話になったということだったそうです。どうしてそうなったかは聞いておりません。その時に日本の高校生が分団の発表をしたときに、このようなことを言ったのが大変面白かったです。「私たちは中国の

人々がなぜ日本の首相が靖国神社を参拝することに異議を唱えるか。その訳を初めて直に聞くことができたと。じっくり話すことで私たちが知らなかったこと、気付かなかったことが見えてくるものもあるのだと知った。留学生の言い分が私たちはよく分かった。意見や考えの違う人たちが一緒に意見を交換することというのは本当に大切だと思った。また、私たち高校生が日本の近・現代史の勉強が足りないのではないかということも感じた」ということを報告してくれました。マスコミや人づてで聞く話と、直接中国の人から話を聞くのでは、生身の人間が介在しますから随分受け止め方が違ってきます。

つい先日の8月15日、靖国神社参拝は特に多くて25万人だったそうですが、そのうち実は30代以下の若者が3人に1人だったと聞いております。小泉首相の参拝が明らかに影響しているそうでありますが、果たして若者が自分で考え判断した結果なのかということは、改めて考えなくてはいけないと思っています。

■ワークキャンプにて

さて、今年もタイ北部のパヤオ県にありますバンコクYMCAと横浜YMCAが協力して運営している、エイズの予防対策事業であります教育施設「パヤオセンター」で、神奈川の高校生、大学生さらに韓国・中国の高校大学生が一緒にワークキャンプをしております。

このパヤオセンターでは、タイの少数山岳民族の子どもたちを受け入れて、共同生活をしながら学校に通ったり、職業技術を身に付けて、自立できるように支援する施設です。タイ北部は貧しい地域が多くて、特に少数山岳民族は豊かな耕地を持つことができません。貧しさ故に、子どもに教育を受けさせることはできませんし、結果としては子どもを都会の性産業に従事させて、一家の経済を支えていくという実態もございます。このパヤオセンターに小学生から高校生まで50人が生活していまして、子どもたちはちょうど家族のようにグループを編成しまして、炊事、掃除、洗濯、家畜の飼育それから植物栽培、畑の当番などいろいろな当番を分担し、極めて自立的に生活しております。おそらく日本の中高生がここまで自立的にやるということはないだろうと思うぐらいです。

しかし、この子どもたちは厳しい生活を強いられる少数山岳民族の村の中でも、またさらに問題がある家庭から送られてくる子どもたちであります。私も村を訪ねてみましたけれども、同じ村の中でも雨が漏ってこないような家もあるけれども、雨が降ったら雨が漏ってきてぬれながら布団の上で寝ているというような状況もあるぐらいのそういう村から、子どもたちが出てくるということが多いです。私どものこのワークキャンプも、そういう村に行って泊まったり、あるいは子どもたちと一緒にセンターで大工仕事やペンキ塗りをしたり、農作業をしたりするということで、子どもたちと交わりをしていくことになるわけです。そこで世界的な課題でありますエイズ問題ということに対して、その背景をしっかりと学ぶということになります。もっと言えば具体的には、やがて彼らがワークキャンプからバンコクに戻ってきて、例えば歓楽街として有名なパッポン通りの周辺を見ながらどういう状況が起こっているかということ、そして日本人の観光客はどういう生態なのかということまで見るというようなこともやります。

■ある高校生の感想

そこで、今年3月のワークキャンプに参加したある高校生の感想をお伝えします。もちろんその高校生はエイズの課題についても大きな学びをしましたが、以下のような感想が私の目に留まりました。「パヤオセンターの子どもたちから学んだことがある。『感謝』である。僕がパヤオセンターに行って思ったのが、もし僕が子どもたちと同じような状況になったらどうするかということである。社会への不満を口にしながらひねくれて、チンピラになっていたかもしれない。あるいは人生をあきらめて路傍で薬にむしばまれているかもしれない。少なくとも感謝の気持ちは抱けないと思う。もちろん子どもたちは運良くスタッフの人たちに助けられて、バンコクへ売られることなく生活できているので、感謝の気持ちを抱くのは理屈の上では当然のことなのだが、僕なら社会全体への恨みを抱いて感謝の気持ちを忘れてしまうことだろう。子どもたちは食事の時もワークの時も常に感謝の言葉を忘れなかった。僕は日ごろついつい面倒で感謝の言葉、つまり『ありがとう』を言い忘れてしまいがちだ。物質的にぜいたくな暮らしをしていると感謝を忘れてしまうということである。僕は感謝に関して大いに反省させられた。また、3分歩けばパンが手に入る日常の生活から離れ、料理1つを取っても皆で分け合って食べているのだという感覚を得られるパヤオでの生活は、僕の日常生活への考え方を変えた」。

10日間のタイでの体験でこの高校生は、日本でのこれまでの普通の生活が大切な心を忘れさせてしまっていたことに気付いたのです。

実際、私たちは米国の『USA TODAY』のニュースと同じように、今の暮らしの中で十分に満足していて、他の世界の人々はどう考えているかなど考える必要はありません。自分の日常的な生活や考えが当然だと思って過ごしているのが多いと思います。最近の日本社会は少し経済が回復してきたとはいいますが、まだまだ閉塞感をぬぐえず、従ってこういうときにはこれまでの歴史が示すように、自国中心的なベクトルが働いて、それに異を唱える人に対して、どちらかといえば非寛容な社会の動きも起こってきているように思います。

■『百見は一体験にしかず』

国際人というのは広い視野を持ち、異なる意見、考え方あるいはさまざまな異なった文化に対する感受性が優れ、集団の中にいながら個として確立している人だと私は思っています。そういう意味で私はいつも多様な価値観や意見に触れて、多くの人との切磋琢磨の中から自分を確立していけるよう、特に若い人たちにそのような場をつくっていくことの大切さを感じています。またできれば、特に今だからこそもっと積極的に、日本以外の他の国や地域の人たちとの触れ合いが必要ではないかと思っています。『百聞は一見にしかず』から、さらに『百見は一体験にしかず』と。100回見るよりも1つの体験のほうがはるかに優れている。『百見は一体験にしかず』を合言葉に、見ることから体験することに進化する交流を推進しています。特に先ほども少し申しましたが、日本・韓国・中国の政治的関係が良くない中だからこそ、横浜YMCAは韓国・中国のYMCAに提案して、世界的課題であろうエイズの問題に3カ国の青年たちが向き合い、そこから相互理解と協力が生まれて、平和な世界をつくる歩みをしたい

と、ワークキャンプを行っていますから、この結果の報告も大変私は楽しみにしているところでございます。

5月25日の日本経済新聞の夕刊に、総合地球環境学研究所所長の日高敏隆さんが寄稿しておられました。その文章を紹介します。「もともと人間は大きな集団をつくることによって生き残ってきた動物です。子どもは集団の中でいろいろな人から学び、幅広い知恵を蓄えてきたのだと思います。そんな中からとんでもなく卓越した発想をする人も出てきたのでしょう。親と子だけの閉鎖的な家族や似たような子どもばかりを集めた学校で、子どもが育つのは好ましいことではありません。人間の文化がゆがんでいく恐れがあります。子どもが育つときには本来いろいろな大人や子どもとの多様な関係が不可欠です」と書いてありました。

いろいろな大人や子どもとの多様な関係とは、年齢や性別を超え家族を越え、学校を超え、地域を越え、国を越えた人たちとの関係です。そういう人たちと味わっていくことがもっと、そしてそういうことがもっと日常、非日常の世界の中でつくられていくことが、国際人を育てる第1歩だと思っています。

■コンピテンシー

最後に、最近よく使われるコンピテンシーという言葉を紹介いたします。この言葉は能力や的確性などという意味ですが、情報マネージメントの世界では、高い業績を上げる人の行動、特性というのをコンピテンシーといっています。もともとはハーバード大学の心理学者であるマクレラン教授を中心にしたグループが、アメリカ国務省から「学歴や知識レベルが同等の外交官が発展途上国滞在期間に業務格差がつくのはなぜか」ということを依頼したそうであります。その結果、調査・研究を行って学歴や知能は業績の高さとさほど相関関係がなかった。高い業績を上げる人には幾つかの共通の行動特性、コンピテンシーがあると判明したということを言っています。それは以下のものでした。3つあります。「異文化に対する感受性が優れ、環境対応力が高い」、2つ目「どんな相手にも人間性を尊重する人」、3つ目「自らヒューマンネットワークを構築するのがうまい」。

もちろんコンピテンシーは職種や業務などによって異なりますが、外交官のコンピテンシーに関していえば、ちょうど皆さん方がここで考えておられる国際人材の育成ということにかなり近いのではないかと思って紹介いたしました。このかながわ学術研究交流財団の主催されている「湘南国際村青少年国際セミナー」の内容を拝見いたしましても、まさに今挙げた3点にかなっていると思っています。これからのセミナーには、さらに多くの外国の人たちとの交流や学びの体験を含めることで、なお一層セミナーが進化することになるのではないかと思います。皆さま方のこれからの国際人材の働きが、ますます実りあるものとなりますようにお祈りいたします。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

（以上）

【パネルディスカッション】

「湘南国際村青少年国際セミナーと『国際人』の養成」

〔パネリスト〕

勝俣　誠　　（明治学院大学国際学部 教授）
佐久間　健一（横浜国際女学院翠陵中学・高等学校 副校長）
江藤　裕之　（長野県看護大学外国語講座 助教授）

〔司　会〕

富岡　隆夫　（財団法人かながわ学術研究交流財団 専務理事）

富岡

本日は非常に暑い中、遠路おいでいただきありがとうございます。私はK-FACEの専務理事をしております富岡と申します。

さて、今日までの3日間、平成18年度の第1回K-PITを開催いたしまして、ここにおられる勝俣先生、江藤先生、それからもうお帰りになった先生もいらっしゃいますが、そういう方々にお世話になって、12人の参加者を迎え入れました。本研究会には、お二人のほか、こちらの佐久間先生、県立向の岡工業高等学校の教諭であられる遠藤晋先生、関東学院大の細谷早里先生、それから東海大の旦祐介先生。こういう方々も最初は研究会に加わってくださいまして、このうち細谷先生と旦先生は今は海の向こうへ行ってしまっておられます。かなりの方々の手数のかかった、しかも大体が手弁当でございますので、そういう方々の暖かい奉仕の心といいますか、教育者としての心構えに基づいた事業が本研究会およびK-PITでございます。

私も最初から研究会をずっと聞かせていただいております。研究会発足のいきさつなどについては、勝俣先生のほうからお話をいただくことにいたします。そういうわけで、神奈川県内の高校生および高校生相当の年齢の方々の国際化といいますか、一種の頭を耕す営みをわれわれはやってきたのかな、カルティベーションをしたのかなという気がいたします。それにおいて一定の成果を上げてきているのではないかと思います。

さて、明治学院大学の校舎は白金と戸塚にございまして、白金は都心のど真ん中にある良い所です。この研究会メンバーがしばしば白金にお邪魔をして、教室を使わせていただいております。勝俣先生にはそれほどまで、手弁当以上の犠牲を払ってくださっております。では、勝俣先生よろしくお願いいたします。

勝俣

どうもありがとうございます。明治学院大学の勝俣です。僕はなるべく質問を多くお受けしたいので、短くお話しします。

今からちょうど18年前に神奈川県に来た時も、やはり神奈川で働けるというのはすごいうれしかったのです。なぜなら、勝俣という姓は結構神奈川にゆかりが深く、御殿場、箱根あたりに多いのです。うちの祖父も箱根に住んでおりまして、今もパスポートを申請する時は箱根町に申請するのです。私は以前、ずっと外国の大学におり

まして、今の職場に移る際、いよいよ神奈川の大学、特に横浜の近くだというので、すごくうれしかったのを覚えているのです。

先ほども山根先生の基調講演で国際化の話があったんですけれども、私の祖父の姉さんというのはアメリカ人と結婚したのです。ですから、彼らが死んだ後は横浜の外人墓地に埋葬されました。明治の頃の話ですが、うちの祖父のひいおじいさんとどういうコミュニケーションをしたのかというと、英語でやっているのです。祖父にとっては、義理の兄がアメリカ人になるんですが、僕も手紙を見せてもらったことがあるんですけれども、外国から横浜のほうに手紙を出すときに英語で書いているんです。お父さんというのを「おとっさん」とローマ字で書いているのです。ですから、あのころ「おとっつぁん」と呼んでいたのかなと思いました。残念なことは、今では外人墓地は記念物になっているみたいで、管理は遺族ではないのです。祖父の姉は勝俣ウメという名前だったんですけれども、結婚したらキャサリンになってしまったのです。僕はやはりお墓にはウメと入れてあげたいと思っているんですけれども、お墓に勝手に名前を刻み込んでいいか、いつも誰に聞こうかと思っているところです。ちょっとあまり関係のない話なんですけれども、たまたま横浜に縁があるというので話してみました。

さて、研究会の座長なんていう大役を承った時、私は好奇心があってこれをお受けしました。最初は、大学の教員が果たしてこれに口を出すべきかどうか迷ったのです。K-FACE、神奈川県からお願いがあったのは、要するに青少年国際人材育成だけれども、それを一般の県民に対してやりたいと。それは、必ずしも大学進学などそういうのではなくて、「国際人」の育成という、非常に抽象的な言葉なのです。これは一体どういうことなのかというので、どういうプログラムまたはカリキュラムでやるのかなというのに自分も少し興味があったのです。

私は自分のスタンスとして、あまりに行政に近づいてもいけないし、また、行政を頭から否定してもいけないと思っています。要するに、使うことはあっても使われてはいけないと、いつも自分に言い聞かせているわけなんですけれども、僕は結局、K-PITというセミナープログラムを今までに4回実施することになりました。

このプログラムを成功させるには、3つの力が必要かなと思っています。1つはやはり、もともと言いだした神奈川県が、どれほど本当に真剣にやる気があるのか。ただの思いつきで出したプロジェクトだと、県が途中で方針を転換して投げ出すかもしれない。こうしたことは継続的にやるべきで、本当に腰が据わっているかどうかというのが気になりました。幸いにして、K-FACEがロジスティックといいますか、準備の面で非常に助けてくれています。

2つ目はやはりワークショップです。ワークショップというのは、これはプロの世界なのです。一般的に、われわれ大学の教員の中には、「授業はできればやりたくない」と考えている方もまだいます。そういう大学の教員たちが、青少年に向かって何ができるのだろうかと、とても疑問に思っています。その意味で、ファシリテーターとしてご参加いただいている木下さんなどはワークショップのプロで、やはり15～18歳ぐらいの人たちにずっと密着して、次から次へといろいろなテーマをまとめていくんですね。その力というのは、2番目に必要だと思うのです。

そうすると、ここにいらっしゃる江藤先生もそうだけれども、何でこの研究会に大学の教員が入ったのかといえば、どんなアジェンダ、どんな問題というのが国際社会で起きていて、それを地域からどういうふうに受け止めていくか、どんな切り口があるかというときに、幾つかこういうことはどうだろうかというアジェンダ、いわゆる話題を提供することが、われわれ大学の教員に要求されている仕事だと思うのです。ですから、逆に言えば、大学の教員だけいてもこんな研究会、こんなセミナーはできなかったと思います。やはり事務局の実行する意志、それからワークショップを実際にやられた現場の開発教育のプロの方々がいて、初めてこれが今のところ順調に進んできたと思っております。

研究会の中でいろいろな話し合いをした時に、これは県が一般の人を対象にしているもので、あえてなぜこうした湘南国際村センターに２泊３日する必要があるかというのも考えたものです。今までの４回ぐらいではまだまだ十分ではないと思うんですけれども、その経験というか、体験を踏まえてちょっと３つほど話します。

１つはやはり、大学進学を前提として話さないということです。現に、高校に言っていない方も応募をなさっていました。大学進学のために云々と言うよりむしろ、「みんなと一緒に考えたい」というような人が結構いたのではないかと思うのです。ですから、私はこのK-PITセミナーを、大学ということの階段と考えるのではなくて、題名も「世界の入り口に立とう」というかなり大きなテーマで、大きな、なかなか答えが出ない問題についてワークショップを通じたり、短いレクチャーを通じて考えさせるきっかけを作ること。それを２泊３日でどのくらいできるかが重要かなと思いました。

つまり、大学進学を前提とするというので、傾向と対策のような話になってしまったら、僕らは本当に県の予算を使った仕事としてふさわしいだろうかと考えました。当然、自分は大学に進みたくないという人もいるし、現に高校にも行っていないという方もいる。そういういろんな方々が来て和気あいあい、ワイワイ騒ぎながら参加して、３日後に帰っていくこと。私はそのことがやはり大事なポイントだと思いました。

２番目は、国際人育成という時にいろいろな入り方があるということです。よくあるのは、やはり「国際社会で活躍する」といった類のことで、国連や多国籍企業で働いて、いろいろな所へ飛び回りたいといったことなどがあるんですけれども、はたして実務先行型を高校生に教えるということはどうなのだろうかと疑問を持ちました。というのは、そういった職業に就くためには傾向と対策というのがあって、民間にたくさん専門学校があると思うのです。それと同じことを県の予算を使ってやるということは、やはりまずいのではないかと思いました。それが特に英語力の向上となりますと、僕は英語を知って当たり前だという世界だと思うことは否定しませんけれども、ある意味では「語学研修のためにここに行くといい」というわさが飛んでしまう。世の中には英語を教える民間の企業がたくさんあるわけで、そういうところと競合するようなものというのは、公の仕事として良いのだろうかと疑問に思いました。ですから、必ずしもこのセミナーは実務的なオリエンテーションというのにはなっていないのです。もちろん、２泊３日の中で人と人とがどう付き合うかという最低の事は、

やはり当然僕は知るべきだと思うのです。特に異文化に接したときにわれわれはどうそれを受け止めるか。そういうようなかなり具体的な問題がありますが、それは参加者の間ではある程度体験したかと思います。

３番目は、今国際社会で起きていることを、どういうかたちで大きなテーマとして持っていくかということです。これは非常に苦労しました。国際社会で起こっていることはたくさんあるわけで、たくさんの参加者があればたくさんテーマができてくるし、もちろんまとまりにくいわけです。研究会で話し合った結果、研究委員の先生方にはおのおのの専門がありますから、その専門に近いものを参加者にぶつけてみようということになった。

例えば私の場合、もともと経済学が出発点なんですけれども、やはり取り組みたいのは貧困の格差の問題です。これはもちろん国内格差の問題もあるし、地球規模の格差、南北問題と言っていいと思います。その格差問題というのは、私たち北の富裕国、平和な国が、どういうふうにそれを受け止めたらいいかという大きな問題をぶつけてみました。もちろん、江藤先生や佐久間先生などもおのおののところから大きな問題、初めから答えが出ない問題をぶつけました。それを僕らは、参加者に対してどんどんぶつけてみるのが目的の一つかなと思いました。

特に私は、自分自身の視点から、国際社会で何が起きていくかというときの視点を２つぐらい強調したいと思います。

１つは、先ほどの基調講演にもあったんですけれども、日本のアジアにおける位置付けです。それがいまひとつ弱いのが現状です。これは自分自身の反省も含めて、地理的に近くのアジアが日本とどんな関係にあったかというのを、もう少し考えるきっかけがあっていいのではないかと。神奈川県というのは結構外国籍の方が多いので、神奈川県内にいる外国人の地位を考える研究会にも参加させていただいているんですけれども、それをやはりしっかりと押さえないと、アジアを越えてよその地域に行っても同じような問題にぶつかるかもしれないと思います。

私自身、最近はアフリカのほうの研究が中心なんですけれども、アフリカに私が行くと「お金のある白人」として扱われます。または、ヨーロッパ人以外の白人の言葉の中に「お金持ち」という意味があるんですけれども、それだけです。しかし、アジア、特に日本が侵略した国に行くと、初めて自分が日本人だと認識します。それで僕は、ヨーロッパの友人にも言ったのです。「日本人が日本人になるのはアジアに行ったときである」と。そうしたらヨーロッパ人は「そうだ」と。「私たちヨーロッパ人はアフリカに行ったときに、『ああ、おれはヨーロッパ人だ』と気が付く」と言うのです。ですから、それはその地域の歴史を担っているという意味で、やはり日本の近・現代史の視点は重要です。普段、もちろん学校で先生方がお教えになっているけれども、２～3日の中でそういうきっかけがつくれればよいと思います。現に、そういうキーワードを自主的に選ぶ学生のグループもありました。

もう１つは、南の世界の問題です。よく地球の人口の８割ぐらいは南の国といわれます。おそらく、今日の最初に発表があったPiece Of Peaceも、やはり南の国の子どもたちへの支援が中心です。これが日本の社会で非常に分かりにくい、見えにくい世界になっていると思うのです。口では確か

に「世界の半分は飢えている」とか、「いや3分の2」などというんですけれども、それをもう少し実感を込めて、講師の方も含めて考えてみようと。おそらく国際社会でこれから起こる問題というのは、北の社会が南の社会にいろいろな理由をつくって介入していくときに暴力が起きるというふうに時々感じるのです。ですから、先進国の中では大きな問題は起こらないけれども、先進国の中に南の社会がどんどん入り込んでしまっているのが、今の世界です。そういう意味で非常に国際化している「北」が出来上がっているわけです。その根っこというのはやはり北と南の間に歴史的なものすごい憎悪、それから貧富の格差、そういうものが世界の紛争の、または非安全というか、よく「人間の安全保障」といいますけれども、安心して生きられないという状況をつくっているのではないかと思います。ですから、このブラックボックスである「南」をいろいろな角度から考えてみようというかたちで、講師の選考も含めてやってきたつもりです。 もちろん、2泊3日ぐらいでは大してできませんけれども、やはり 10 代の若者が持っているであろう欧米中心の国際人イメージというのとは、少し違ったものを目指せればというのは、私は今も思っております。

さらにもう１つ。レクチャー以外に、小さなグループに分けて、いろいろな大きなテーマをぶつけてやる「ゼミナール」というセッションがあるのですが、そこで参加者と話していて一番面白いなというテーマの１つは、「一体皆さんはどんな世界に住みたいんですか」ということです。「平和な社会」とか「好きな人と一緒に暮らせる」とか、「物不足のない世界」などが答えとして返ってきます。私自身の答えというのは、世界中どこに行っても夜になればきちんと星が見られるというのが世界の理想像だろうと勝手に言っているんです。そうすると、結構いろいろなことを言う参加者がいるのです。

私はおそらく統計的には彼女・彼らよりも早く死ぬ確率が高いわけですけれども、彼女・彼らの世界をもっとまともにする準備の道具を与えたいというのが、やはりすごく大切だと思っています。彼らが夢を実現させるためには、いろいろな道具があると思うのです。それは学問の道具で、僕はツールといっていますけれども、そのツールボックスを参加者に授けたい。参加者の皆さんには、「もっとやりたかったら２回、3 回このセミナーに来てもいいですよ」と言って、今回の参加者の中には３回目の人もいるんですが、そのぐらいの気持ちで答えの出ない問題に取り組んだり、夢を育てる。そういうセミナーであったらいいかなと私は思っています。

富岡

ありがとうございました。では佐久間先生、最初のご発言をお願いします。

佐久間

こんにちは。横浜市緑区にあります私立の学校、横浜国際女学院翠陵中学・高等学校の副校長をしております。K-FACE が青少年の育成を図る、高校生を対象にした国際セミナーを実施するということで、実際に高校生を預かっている教員も参加してほしいということになり、私立の学校を代表するかたちで私が、そして公立高校を代表するかたちで、向の岡工業高校の遠藤先生という国際理解教育の非常に経験豊富な先生がそれぞれ加わるということで研究委員

の一員となりました。

学校名の中に「国際」という言葉が入っていますが、将来国際社会で活躍できる人を育てることを目標につくられた学校で、今年で21年目を迎えます。神奈川県の私立の学校の中では比較的歴史の浅い学校です。国際的な視野、豊かな国際感覚を身に付けさせる一番手っ取り早い確実な方法は何かと考え、それにはさまざまな国の人たちと直接触れ合い、そういう中から子どもたちが自然に学び取るのが一番ではないかということで、いろいろな国の人たちと直接触れ合うことのできる交流プログラムをこれまで実施してまいりました。そのようなことで、この研究会に私立の教員で1名参加してほしいということで、お引き受けした次第です。

私の研究発表のテーマですが、最近の高校生の様子、特にこのK-PITに参加した高校生について、そして各学校で行っている国際交流プログラムとこのK-PITのセミナーとの関係。そういったところを中心にお話ししたいと思います。

最近の高校生はよく「無気力」「無関心」「無責任」と評されてしまうんですけれども、このK-PITのセミナーに参加する生徒は全くそういう評価があたらない、別な高校生だったように思います。このK-PITのセミナーの特徴として1つは有料のセミナーであるということ。高校生を対象にした有料セミナーというのは、そんなに多くはないのではないかと思います。それともう1つ、2泊3日の宿泊型のセミナーであるということです。この2つが大きな特徴だと思います。これはある面ではこのセミナーの良い点でもあり、ある意味では、今回参加者が夏休みにもかかわらず期待した数を下回る参加人数だった原因であるかもしれません。高校生にとっての1万円という参加費の問題や、通いではなく宿泊のセミナーであること。そうでなければもっと参加しやすかったのではないかという指摘も一方ではありますが、これは「両刃の剣」といいますか、このセミナーの良さでもあり、また1つのデメリットという部分でもあるかなと思います。

一応、当初は有料のセミナーということでスタートするということでした。ですから、有料のセミナーであるからにはそれだけのお金を払っても参加して良かったという内容のあるセミナーにしなければいけないということで、高校生にとって有料で実施する国際セミナーとしてはどういうものが適切なのか。いろいろプログラムづくりを委員の先生方と会を重ねてやってまいりました。その参加申込書の中に志望理由を書いてもらい、人数が多かったときには志望理由などを採点しながら選抜しようということで、志望理由を書く欄も設けました。欄を設けると、このセミナーに参加する動機として、「もっと自分を高めたい」。あるいは「日ごろ学校ではなかなかこういう事についてまじめに語り合える機会が少ない。ぜひ同じ問題意識を持つ他の生徒と一緒にさまざまな事について語り合いたい」といった志望理由を述べる生徒が非常に多かったです。このように非常に向上心に富んだ生徒が参加する。そういう意味で、ある程度クリアするには少しレベルが高い、高校生にとってはやや負担が多いかもしれないけれども、思い切ったプログラムを組んで、2泊3日の期間の中でやってみようということでスタートしました。

この2泊3日の宿泊型の研修ですけれども、やはり通いのセミナーでは得られない良さがあるのではないかと思います。2泊3

日の間、普段の日常生活を離れた非日常的な環境の中でじっくり時間をかけていろいろな人たちと意見を取り交わす。そういう中から今まで自分が気付いていない事を発見したり、あるいは新しい仲間に巡り合ったりさまざまな体験をするのではないのかなと。通いのセミナーでは得られない、そういう環境の中で得られる良さがあったのではないかと思います。参加した生徒のアンケート調査をスタッフのほうでまとめていただいていますけれども、募集要項の1ページ目に今まで参加した生徒の感想が載せられています。これは特に良かった生徒の感想を取り出したものではなくて、ほとんどの生徒がこのセミナーに参加して良かったという評価をし、実施した側としては非常にうれしく思っています。「自分より問題意識の高い同じ高校生がこんなにたくさんいるのに驚いた」とか、あるいは「今の国際社会が抱えているさまざまな問題。そういったものを認識することができた」とか、「これからも付き合っていけるような仲の良い友達に巡り合えてよかった」とか、いろいろそれぞれ感想は違いますが、ほとんどの生徒がこのセミナーに参加して、ある程度満足して帰ってもらって、非常にうれしく思っています。

このセミナーの良さはそれだけにとどまらず、先ほどPiece Of Peaceとして活動しているセミナー卒業生の発表もありましたけれども、セミナーが終わった後も参加した人たちが連絡を取り合いながら自発的に集まりを開いて、何か引き続いて語り合おう、あるいは自分たちで何かできる事にチャレンジしてみよう、そんなことを進めており、本校の生徒もその中に入れさせてもらっています。学校によってはこういったボランティア同好会など、すでに学内で組織的に活動している学校もありますが、本校ではそのような活動団体がなかったので、学校を卒業してこれから大学に入って国際関係の事を学んでいきたいんだけれども、大学で学んだ事を高校に戻って後輩たちに何か伝えられる。そんな場がほしいということで、本校では有志による同好会組織などもセミナーに参加した者たちを中心に、今立ち上げを進めているところです。

このようにセミナーに参加した高校生たちが、セミナーが終わった後も引き続き問題意識を持ちながら活動を続けていることを非常にうれしく思っています。このような意味でこのセミナー自体はかなりの成果があるかたちでもって、これまで進められてきているのではないかと勝手ですけれども評価しております。

それと2点目の各学校が行っている国際交流プログラムとの関係ですけれども、本校では高校2年生の夏休みを利用して、カナダとイギリスで3つの海外研修プログラムを行っています。3週間のホームステイによる異文化体験。それと3週間のホームステイを通しての体験学習プログラムというふうに呼んでいるんですけれども、いわゆる職場体験を組み合わせたものを実施しています。これはカナダでやっているのですが、カナダの人たちが実際どういう考えを持って仕事をしているのか、実際に働いている人たちの場に参加させてもらい、そういったことを少しでも肌で感じてもらおうと思っています。大学ではそういったプログラムをやっているところはあると思うんですが、高校ではちょっと珍しいプログラムかなと思います。3つ目はイギリスの学校の寮に滞在しながら、ヨーロッパの各国から英語を学びに来ている生徒と一緒に授業を受け、そして一緒の部屋に泊まると

いった英語のレベルアップを図る研修です。こういったものを高校2年生の夏休みに行っています。それともう1つ大きなものとしましては、同年代の海外の生徒との交流ということで、現在、中国とメキシコとアメリカの3カ国の学校と姉妹校提携を行って、定期的に2週間の交換留学プログラムを進めています。

こういった海外研修や姉妹校交流とこのK-PITのセミナーとの関係ですが、分かりやすく例えると、運動の世界でいう「個人競技」と「団体競技」というような違いなのかなと思います。本校が行っている国際交流プログラムは、あくまでも実際に自分でいろいろな国の人たちと直接触れ合って、その触れ合いの中からさまざまなものを自分で感じ取って、これからの行動に生かすという、いわゆる運動の世界でいう「個人競技」に該当するものなのかと。それに対してK-PITというのはなかなか答えが出ない問題、それをグループに分かれて「ああでもない」「こうでもない」といろいろお互い意見をぶつけ合いながら、そしてグループとしてのまとめを仕上げていくという、いわゆる共同作業的な要素が非常に強いのかなと。同じような国際ということをテーマにしながらも、アプローチの仕方に違いがあると思っています。ですから、各学校で独自の交流プログラムを実施しているので、K-PITに参加してもあまり意味がないのではないかというお考えがもしあれば、それは少し違うのかなというところがあります。

先ほどP.O.P.の方が発表してくれましたけれども、本校の生徒でもP.O.P.と一緒に活動をさせてもらっている生徒がいまして、メキシコの姉妹校に2週間交換留学で行って、メキシコにすっかり魅了されてしまった。そして将来はできたらスペイン語を身に付けて、いろいろな活動をしてみたいという将来の目標も、交換留学で決まったみたいです。その生徒がこのP.O.P.に参加して、そして今度子どもの絵画展を立ち上げるということで、姉妹校でお世話になったメキシコの先生に手紙を書いて、子どもたちに描いてもらった絵を6月に本校に交換留学に来る際に持ってきてもらおうというような協力をしてもらって、絵を絵画展に出品することができました。こういうふうに各学校が行っている国際交流プログラムと、K-PITのそれぞれの異質な部分が補完し合うようなかたちで、さらにより良い国際交流活動といったものに結び付けていくことができるのではないかということで、ぜひそれぞれの学校の先生方、機会があればこのK-PITのセミナーに参加を呼び掛けていただければと思っています。

富岡

では、江藤先生お願いします。

江藤

皆さんこんにちは。江藤と申します。私は長野県看護大学という所で英語を教えております。こちらのK-PITセミナーにかかわったきっかけ、あとプログラムをつくっていくその説明を皆さんにすることを通じて、先ほどの勝俣先生と佐久間先生とのお話に、少し補足的なことができればと考えております。

このセミナーは基本的に、2泊3日の1日目の午後に集まって、3日目のお昼で終わるというプログラム構成です。その中にいろいろなことを学んだり、場合によっては体を動かしたり、いろいろなプログラムが入っていますが、今回（平成18年度第1

回セミナー）は僕のプログラムが2日目の月曜日の朝一のゼミナールAというところで入っております。それが「『目に見えないもの』の表現 ―ことばによるコミュニケーションとは」という題名です。みなさんはこのタイトルをご覧になって、こういう「世界の入り口に立とう」、あるいはいわゆる国際人と称する者を養成しよう、いろいろな意味での国際情勢を伝えようというセミナーないし集まりに、目に見えないものを考えてどうするんだろうと少しいぶかしく思われている方もいらっしゃるかもしれません。

今回で4回目になりますが、4回のセミナー全てに、「目に見えないもの」を考えていくというセッションを設けたのには訳がございます。私はK-FACEと一緒に8年くらい前から、「グレート・ブックス・セミナー」というプロジェクトの研究を行ってまいりました。これは簡単に言うと、古典、名著と呼ばれる、普段われわれは名前を知っていて前を通り過ぎるんだけれども手に取らないであろう所の岩波文庫あたりの本をじっくり読んでみて、内容をしっかり理解した上でモデレーターと称する司会者の進行に従って、正しくテキストを読み、そのテキストの著者にモデレーターの質問に答えることで学ぶという。そういうアメリカで開発された一般教養、リベラルアーツと申しましょうか、そういうプログラムがございます。モデレーターは「これはこういうことですよ」と受講生に内容を教えるのではなくて、つまりレクチャーをするのではなくて、あくまで参加者の意見を引き出す役割です。こういうセミナーのモデルを、K-FACEとの協力のもと、別のグループの人たちとつくりました。

アメリカから輸入されたと言っても、自己主張の強いアメリカ人と、「質問ありませんか？」といっても下を向いてしまうわれわれ日本人との間では、なかなか運営方法というのは異なってきます。そういうことで日本的にアレンジしたものを、湘南国際村センターで5回か6回セミナーを開催しました。パイロットプログラムというかたちで、われわれの「グレート・ブックス・セミナー」の研究員はモデルのプログラムをつくる。最初はアメリカで開発されたいわゆる西洋の古典というもの、アリストテレス、プラトンあるいはマキャベリなどそういったものを読むプログラムから、段々例えば日本の古典、源氏物語やあるいは東洋の古典といったようなものを少しずつテキストに加えていって、いろいろ試行錯誤を加えながら1つのモデルというのをつくってまいりました。

それが一区切りつきまして、現在では一つの成果として横浜市立図書館のほうで「名著セミナー」というかたちで、また、紅葉坂にある県立図書館のほうでも、同じように「グレート・ブックス・セミナー」というかたちでこれが広がってまいりました。それ以外にもいわゆる有志の読書会といったようなものがあります。

われわれ人間というものがただ生きていくということではなく、少しでもよりよく生きていく。そして普段私たちが考えないような、しかし、私たちにとって大切な例えば「幸せ」とは何か、あるいは「平和」とは何かといったような問題をわれわれだけで考えていくのではなく、そういう先人たちの知恵に学ぼうというプログラムはいいものであるという結論には達していて、そして多くの方々は総論ではそれはいいことだと。しかし、具体的にどういうふうにやっていけばいいのか。具体的にそれをど

ういうふうなかたちでもって進めていくのかといったところに、われわれがそういうノウハウをここで研究してきたわけです。ただ、そのときに対象としていたのが大学生で、どうして大学生なのかというと幾つか理由があるのです。最初は高校生を対象にしようとしていたのが、やはり大学受験あるいは高校の勉強で自由も利かないだろうと。そして一般の方というと、例えば一般の方を3日ないし4日間こちらのほうに来ていただくというのは事実上難しいだろうと。ということなので、若い人たちに本を読んでもらうという動機付け、そういったようなきっかけをつくろうと。それには大学生あたりがよろしいのではないかということで、大学生を対象にやりました。しかし、その時も傍聴者ということでこの地域の方、あるいはこの地域を越えていろいろな教育関係の方やあるいは一般の方がお越しくださっていろいろなアイデアやそういうサポートをいただきました。

そのノウハウを何かこの「世界の入り口に立とう」というK-PITで、高校生たちの教育に生かせないだろうかというのが、K-FACEの皆さんから私にいただいた最初の問題だったのです。その時、K-FACEの職員には「はい、はい。分かりました」と言いましたけれども、実は非常に不安でした。というより、戸惑いを感じておりました。というのは、こういうたぐいのプログラムではここに書いてあるようないろいろな世界の秩序、アジアやアフリカなどわれわれが普段目を向けないようなことを、例えば情報として知らせる。あるいはそういったような世界で起こっている問題というものを子どもたちに知らせて、何かものを考えていく。あるいはその結果として今回のP.O.Pみたいな場ができていくきっかけないしは種を与えるというイメージがあるわけで、そういうところにいきなり「プラトンが…」とか、「アリストテレスが…」などという話を持ってくると場違いではないかというような気がしていたのです。しかし、試みということですから駄目もとでやってみようということで入れてみました。

こうして第1回目、第2回、第3回目、第4回目とやってきましたけれども、そういったようなことを考えていく、もしくはそういったことを話し、自分の意見あるいは他人の意見を共有し合い、そして自分たちが考えたことを相手にうまく伝えていくという、いわゆるコミュニケーションの技というのは、こういうセミナーには無駄ではないどころか、非常に必要なことなんだなと実感しています。このセミナー自体、先ほど勝俣先生がおっしゃったように、例えば英語の知識やそういう実務的なものを与えるものでもなく、かと言ってわれわれの知らない悲惨な世界の状況といったようなものだけを見せるものでもなく、やはり夢を与えるような、これから子どもたちが何か外に出て行こう、あるいは何かをもっと広く学ぼうというきっかけの場になるようにという思いでつくられています。

例えば今回のプログラムの最後、みんなで語り合うというセッションの中では、キーワードを使って、その中でみんなで考えていこうというということをやっています。それは、例えば初日の勝俣先生の「南北問題として世界を読む」、木下さんが進行するワークショップ、あるいは私のゼミナールなどを通じて、参加者がピンと来たキーワードをホワイトボードにたくさん書いていくのです。例えば「国際化」というキーワードがあったり、「平和」、「戦争」、「貧困」、「真の幸せ」あるいは「真の豊かさ」とい

ったキーワードをたくさん並べてくるわけです。それに対して自分が最も興味のあるキーワードごとに3、4人ぐらいの小グループをつくって、そしてそこでみんなで意見を交換し、例えば「真の豊かさ」というキーワードで選んだ子どもたちは「真の豊かさというのは何だろうか。そして真の豊かさというのを追求するにはどうしたらいいのだろうか」といったようなことを深く語り合うわけです。

先ほど、山根先生の基調講演にもありましたように「百聞は一見にしかず」、そして「百見は一体験にしかず」と。今度は、その体験したものをわれわれが心の中で反省をし、そしていろいろ体験したものを考え、それを経験にしていくという課程において、ものを考える技術というのは非常に大切な、意味のあることではないかと思います。従って、こういった「グレート・ブックス・セミナー」という全く異なるプログラムを、K-PIT のようなプログラムと結び付いていくということが、非常に有意義だということが分かった次第なのです。

普段われわれは、あまり難しい岩波文庫などは読まないのです。私も学生にレポートで岩波文庫を読んでこいと言うと、「先生、この文庫本、黒いですね」と言うのです。黒いというのはどういうことかと思ったら、小説などは、例えば「彼こう言いました。『はい』」と下が余白なのです。ですから、本を開くと余白が多く、活字のないところが多い。ところが岩波文庫というのは全部活字が埋まっていて、おまけに漢字が多いわけですから、「黒い」などと妙なことを言う学生がいます。

しかし、K-PIT のプログラムとして、例えば『博士の愛した数式』、『星の王子さま』、プラトンの『メノン』といったところから大事なところだけを取って、「グレート・ブックス」ならぬ「グレート・パラグラフ」なんですけれども、話し合う題材として取り上げると、うれしいことにそれを読んで「先生、これ残りを全部読んでみたい。読んでもう少し今回の話を続けてみたい」と言ってくる生徒が少なからずいる。ですから、最初に発表を行った P.O.P みたいなかたちで「グレート・ブックス・セミナー」バージョンのグループができまして、何度か横浜の県民サポートセンターに集まって3、4時間読書会をしたことがあります。

そういったような発展というか、この K-PIT の非常に重要な点というのは、例えば県の1つの施策としてはこの集まりに何人の人がやってきて、どういう効果があって、そしてどういうリアクションがあってという。それは非常に大事なことでしょうけれども、その評価にはならないかもしれませんが、それが1年後、2年後に何かのかたちでつながっていくといったような、かたちになるような1つの動機付けなり、あるいはきっかけといったものをわれわれが与えることになる気がします。

そして、それがこの「国際人」といったときの、最後の「人」、この人というものを良くしていく。つまり良い人、より良い生き方をするということでこういうものを考えるということが、非常に重要だと思います。そして自分の考えたことを相手に伝える、また、相手を理解するということが重要である。それがこのセミナーにとってやはり意味のあることなのだということを自覚した次第です。

参加者は、この3日間でそれまで会ったこともなかったような、基本的にはそれまで見たこともない子どもたちが来て、そして会って、いきなり「国際問題は何だろう」

というようなことを語るわけです。これはなかなか厳しいことだと思います。普通の学校で言えば15回くらい、半年の授業があるわけなので、最初の1、2回はゆっくりやって段々慣らしていくということができるのですが、これは3日間が勝負で、それが終わった後は何もないわけです。ですから、会った瞬間から、つまりアクセルを踏んで急に100キロか120キロぐらいまで加速しなければいけない。その加速をしてくれる方が、例えば事務局の方であったり、木下さんを始めとするファシリテーターの方であったり、そしてまた学生のアドバイザーの方々。こういった方が参加者をアイスブレイクし、きちんとみんなを「話をするモード」に持っていってくれる。こういう技術は僕ら大学の教員にはありません。また僕らも、「その中で一緒になって学生と…」というのは少し恥ずかしいので、なかなかできないんです。しかし、そういったような人たちと連携しながら、そしてこの短い期間の中で効果的に与えてくれるというこのK-PITのやり方というのは1つのモデルだと感じている次第です。

富岡

どうもありがとうございました。もう一度先生方にまとめというか、発言をお願いしたいと思います。まず、勝俣先生には、先ほどK-PITセミナーの今後の進め方について少しお触れになりましたが、神奈川県への要望を始めとして、関係各機関への要望などを中心に、今後のビジョンをお示しいただけたらと思います。

勝俣

これまで4回しか実施しておりませんので、僕は今の時点であまりはっきりと「成功」、「失敗」と言えないと思うのです。また、参加者のアンケートというのは終わった時点での感情を書いたものであって、「教育」として見たときに本当に良かったかどうかというのは5年、10年、あるいはもっと後になって分かるものです。例えば、紛争が起きて日本も巻き込まれているような事態になって、その時に「あのセミナーは一体何なんだろう」ということもあり得るし、効果を検証するというのは非常に難しいと思うのです。

今後の方針ということでしたが、例えば現状では参加している方が日本人だけなのです。できたら3分の1ぐらい、それはやはり県の補助が必要だと思いますけれども、外国の方がいて、ある程度当然日本語かと思うんですけれども、そういう参加があってもいいかなという気がします。それから2泊3日ということですけれども、私はよく学生をアフリカに連れていくんですが、高校生にとってこの湘南国際村センターは立派過ぎるという感じがして仕方がないのです。結構、食事もすごくいいのです。もちろんたくさん食べたい年ごろかもしれませんけれども、やはりもっと簡素でもいいのではないかというような気がして、2泊3日でずっと座っているというのも、やはりここに来たらもう少しほかの所に出ていく。体を動かせるような所があっていいかなという気がします。

あと、大学の教員をもっと利用していいのではないかと思います。このことは事務局にも申し上げたんですけれども、私は好奇心があって、どうやって現場でみんなファシリテーターの方やそれをサポートする学生のボランティアの方がやっているのかというのは、本当に大変だと。これは技術の取得が必要だと思っているのです。一方

で、大学の教員は何のためにいるかというと、アジェンダにおいては勝手なことを、つまりこういうことが今問題だろうということはどんどん言いたいと思うんですけれども、具体的に流すときもう少し教員を利用するようなのがあってもいいのではないかと。

例えば、ある時間帯に講師の方は終わってすぐ帰るのではなくて、またここに参加しているメンバーの方が何時から何時まではいますと。そのときにコーナーを設けてそこで自分はこういう問題をやっているけれども、どういう考え方が必要か。どんな本を将来読んだらいいかと。ある程度フォローアップできるような使い方を、大学のオフィスアワーみたいなのを設けて、そのときに必ず先生はその一画にいてくださいという使い方があってもいいかなというのが感じたことです。

富岡

ありがとうございました。先ほど佐久間先生が学校の海外交流のお話を随分されましたけれども、引率なさって行かれることも多いと思いますが、そういうときの生徒の反応といいますか、日本人の今の高校生世代が「国際人」となりうる可能性、そういう気質みたいなものも含めて少しお話しいただきたいと思います。

佐久間

先ほど江藤先生は「国際人」という言葉は好きではないとおっしゃいましたけれども、私も「国際人」というのは得体のしれない言葉かなと思います。あえて言うのであれば、「日本人的国際人」とか「日本的国際人」で良いのではないのかと、無理に「国際人」になろうというふうに片意地張らなくても、むしろ日本人としてどういう生き方ができるのか、日本人としてどんな活動ができるのか、日本人としてどういったことを考えなければいけないのか、そういったことでいいのかなという気がします。

うちの生徒を引率してイギリスやカナダ、中学ではオーストラリアに行くんですけれども、もちろん現地の事を学ぼうということで勇んで出かけていくわけです。当然、2週間や3週間の間にはいやが応でもいろいろな事を見たり、聞いたり、何らかの収穫を持って帰ってくるわけです。

しかしながら、不思議なことに2週間、3週間日本を離れていると、知らず知らずのうちに外から日本を見る。今まで日本でずっと長い間生活をしていながら見えてこなかったものが、外国から日本という所をみると、今日本という国が世界でどんな位置にあるのか、外国の人は日本をどんなふうに見ているのか、そんなことが段々見えてくるのです。先ほど、基調講演の山根先生のお話にもありましたけれども、離れて日本を見て、改めて日本の良さや、日本あるいは日本人として改めなければいけないようなこと、そういったものに気がついて帰ってくる。これは外国の事をもっとよく知ろうということと同じかあるいはそれ以上に大事なことなのかなと思っています。そういう意味で「国際人」になりうるかというよりも、「日本的国際人」を目指していくことで子どもたちにはいろいろな面でアドバイスをしているところです。

富岡

江藤先生に伺っておきたいと思いますが、今、英語というややこしい問題が日本にありまして、「小さいころから英語をやったほうがいい」、「それより国語のほうが先だ」

と、日本中を巻き込んでいる大論戦のひとつです。これを絡めまして、子どもたちの思考力を育てるなどということについて、もう少しご説明いただきたいと思います。

江藤

これは自分の体験で言うしかないと思いますが、われわれは「最近の若者は」とか「最近の高校生は」といったようなことをついつい言ってしまったり思ったりしますが、「後生畏るべし」というような言葉もございます。高校生とある本を読みながら議論をしていた時に思ったのですが、そういう場で対話、話し合いをする際に、僕は教員なので知識は高校生よりはあるのが当たり前ですが、例えばものの見方やあるものに対する解釈、考え方というのは、生徒も私も同等のレベルなのです。そうした時に、同じ目線で話をしていると「これはすごいな」と感じます。別にほめ殺しをしているわけではないんですけれども、本当にすごいなと思うことがよくあります。

そうしますと、やはり「思考力」、最近は「100 マス計算をやると頭が良くなる」みたいなことが流行っているようですけれども、そういったような単純なことではなくて、われわれ教員は「今の若い人たちは」とあきらめないで、徹底的に語るといったようなことを時間の許す限り、こういう場、あるいは何か小さな場を設けて地道にやっていくといったようなことが重要かなと思います。そしてやはり、最終的には勉強なり、ものを考えるというのは 1 人でやることだろうと思います。ですから、そのためのきっかけづくり、動機づくりというのを何かする。そしてそれをフィードバックというか、考えていることを話すような、ないしは言うような場が必要です。

今日もセミナーで言ったんですけれども、「幸せ」とは何かという話題をみんなで話している時に、「でも教室でワイワイ楽しくお弁当を食べている時に、隣の友達に『幸せって何だろう』と聞いたり、あるいは『生きるってどういうことかな』と聞くと、あなたはきっと嫌われて話しをしてもらえなくなるよ」なんていう冗談話をしました。もちろん時と場があるでしょうけれども、何か場を設けて、地道な活動ではありますが語り合うということをやっていく。その場としてこのK-PITがあるのではないかと思っています。そしてK-PIT後にも、何かしらそれを継続していけるような、フォローアップといったようなものができればいいし、またそれに関わりと思っています。

富岡

ありがとうございました。

質疑応答

望月（高校教諭）

神奈川県立有馬高等学校で社会科の教員をしています望月と申します。実は私もこれと同じようなプログラムで、ユネスコというところが全国から高校生を毎年集めて、3泊4日でセミナー、研修大会を行っています。今年が52回目です。こういうふうなセミナーで過去10年ぐらい代表をやってきているんですけれども、やはり非常に難しい問題が、参加してくる生徒が事前にそれについての勉強を深めるための時間・手段がなかなかないということです。

なんらかの形でレポートなり課題図書などを出しておいて、それについて学びを深めて、こういうふうなセミナーに出てくれば、先ほども本当に始まってから120%の力を出してやらなければならないという話がありましたけれども、だいぶ役に立つのではないかと思うのです。その辺はこのセミナーはどういうふうなことができているのかお聞きしたいというのが1点です。

それからもう1点が、今度このセミナーが終わった後、ここで培われたいろいろな人脈などをどう生かしていくのかということです。幸い、神奈川県内には先ほど発表があったP.O.P.、下の会場で今もやっていますユース国際ボランティアフォーラム、あるいはユニセフ、WFP、ユネスコなど、ユースのチームも多数あるのです。ですから、ぜひ1度そういうふうなチーム、高校生たちをなんらかのかたちで集めて、組織づくりはどうしているのかとか、どんな活動をしているかなど、大学生は結構あると思うんですけれども、高校生レベルの情報交換的な会、またはミーティングなどが行われるといいなと。これはちょっと感想と要望なんですけれども、質問のほうは前半のほうで事前にどういうかたちで何か行っていることがあるかどうかということです。

佐久間

このセミナーのプログラムづくりの段階で、研究会のメンバーとしていろいろ協議してきました。その中で、特に前もって予備的な知識など、そういったものをなしにして、参加した高校生が同じスタート地点に立った上で一斉にスタートしていくような内容でやっていこうと。今までこういったセミナーにすでに参加している生徒、あるいは学内で活動している生徒、全く初めての生徒などいろいろな生徒がここに参加してくる。そういう生徒が同じ地点でスタートできるようにということで、前もって「これを読んできてください」とか、「こういうレポートをまとめて参加してください」というような事前の予備的な事、そういったものがなくてもできるようなセミナーにしていこうということで、最初から立ち上げました。「どういったことを事前にやっているか」というご質問のお答えにはならないかと思いますが、逆に何もなくてもすべての参加した生徒が共有できるような、そういう活動ができるようなそんなセミナーにしていこうということで進めてまいりました。

勝俣

僕は今、高校で先生方がどういう授業というか、宿題やテストなど、どのぐらいの負担を生徒に強いているか分かりませんが、参加者の話だと高校の勉強は結構忙しくて、それプラスこのセミナーに参加するために

課題を与えてしまうとすごい負担になるという気がしなくもないのです。ですから今、佐久間先生がおっしゃったようにちょっと学校の授業とは離れたところで、しかもよその学校、または学校へ行っていない人もいるかもしれないところで、どうやって意思疎通を計っていくかという、一種の実験みたいな部分があるのかなと思います。

私の大学では校外実習として、大学2年に公募して、学生を10人から15人アフリカに連れていくんですけれども、それは別に成田空港から始まるのではありませんよと。半年ぐらいかけて準備して各自が課題をつくって、そして帰ってきて半年ぐらいかけてレポートを書くという。それはかなり課題中心主義なのです。ただ、これを2泊3日でやってしまうというのはきついかなという気がして、むしろ「僕は勉強が嫌で仕方がないけど、親が行ってこいと言ったから来た」ということでも参加してもらえば良いと思うのです。帰るころに友達ができたし、勉強は楽しいんだと思えばいいかなと、僕自身はそう考えています。

富岡

ご質問の後段で、P.O.P.のような、あるいは先ほど江藤先生のおっしゃった読書会を生み、これから県内に広がっていくということになると、OB・OG会を考えたほうがいいというアイデアとして検討させていただくことにいたします。

林（神奈川県青少年課）

神奈川県の青少年課の林と申します。今日のお話の中で、特にプログラムの中にいろいろな話があるようですけれども、1回目は「調べて話し合おう」ということなども入っていると。また、最新のものではグループディスカッションが入っているということでした。グループディスカッションというのはかなり大きなウエイトがあるのかなと思うんですけれども、グループディスカッションはどのようなかたちで運営されたのかちょっと興味があるのでお聞かせいただきたいのが1つ目の質問です。

もう1つは、勝俣先生のほうから全体の3分の1ぐらいは外国の方に参加してもらうといいのではないかという話がありましたが、これは今の時代ですと非常に重要なポイントだと思うんです。ただ、それは県内在住の方、あるいは例えば東南アジアや東アジアなどどういった地域の方を呼ぼうという具体的な構想的があれば、お聞かせいただきたいと思います。

勝俣

僕は特定の人たちというのは全然頭に置いておりません。できたら欧米の人だけではなくて、途上国、いろいろな南の国の県内在住の青少年がいれば一番いいです。ある程度日本語ができる方というのは絞られると思いますが。

それから、具体的にグループディスカッションをどうしているかというのは、おそらく学生アドバイザーの杉山君、彼が現場で高校生と一番密着してやっていたので、少し具体的に説明していただけると助かります。

杉山（学生アドバイザー）

今までに過去3回、学生アドバイザーとして参加させていただいた杉山と申します。グループディスカッションはこれまでいろいろなかたちで実施されていますが、今回と前回、同じようなかたちで実施したのは、「言葉と文化」といったものや、「戦争と平

和」「国際人とは何か」あと「宗教について」などの様々なキーワードが挙げられて、そのキーワードごとに興味を持った人たちが集まって、その言葉についてみんなで話し合った結果を最終日に全体の前で発表してもらうというかたちで、グループディスカッションをやってもらいました。

ほかに具体的にというとなかなか難しいんですけれども、その中で例えば「国際人」だったらどういった要件を満たせば「国際人」であるか。どういう条件がなかったら逆に「国際人」でないと言えるかというような視点からなど、いろいろな見方をしながら参加者同士が話し合っていました。

勝俣

少し補足させてください。平成16年度に初めてK-PITを行った時は少し様子が違っていまして、最初は「調べ学習」だったのです。例えば南北問題あるいは戦争と平和ということに関して、講師の講義を受けた後、大会議室の中で小さいグループに分けて、その中で具体的な国や地域など、そういったようなところを取り上げて、それをインターネットや事務局で準備した図書館の様々な参考資料を引っ張り出してきて、それでいろいろなことを調べて、最終日にそれをみんなに提示するというかたちを取ったのです。

ところがやはりそれには反省材料がありまして、「調べ学習」だと、そこで何を考えたかとか、そこからどう見るかということよりも、簡単に言えば情報をたくさん集めてきて、それをまとめるというかたちだったのです。ですから、セミナーを見学されていた高校の先生方から、「もっと学生同士で議論をさせて、例えばディベートのようなものをさせたらどうでしょう」といったようなご提案も少しいただきました。去年、そういったようなことも加味した上で、「調べ学習」ということではなくて、短い間ではあるんだけれども、何か1つの事について議論をさせて、それを少なくとも3、4人の中で意見を交換し、まとめたものを今度は全体にこれを分かるように提示していくといった方向に変えたのが、ちょうど去年の2回目、3回目。そして今回も同じようなかたちを踏襲しました。

江藤

僕は先ほど山根先生に質問し損ねたんですけれども、このアジェンダを組むときにいろいろな意見があるわけです。どういうふうに大きなテーマを見つけていくかというのも、すべてのテーマをあれだこれだとあまり散らばってもいけないし、やはり眼鏡（フィルター）を付けないといけない部分があるのです。

先ほど山根先生のお話の中に「個の確立」とあったんですけれども、僕が思い付いたのが教育基本法です。これは短い法律で僕はあまり気にしなかったんですけれども、改定の動きがあるというようなことを聞いて、最近ちょっと読み直したのです。読んでみると非常に立派な内容で、やはり国際的に活躍するような人がどんどんその下で生まれているのかなと思うことがわかるわけです。冒頭のP.O.P.の活動も、日本人が自分たちできちんと途上国の子どもの言葉で考えられるという、国際的な個というか、パブリックの心を持っていると。

やはり、僕ら教員はこれからどうやって教育していくか、こういったセミナーなどを通じて、または皆さんの教育の現場を通じて、強制ではなく自主的に学ぶというような…。私は「個の確立」なくして「国際

人」はあり得ないと思うのです。そういう意味で、先ほどおっしゃった個の確立というものをもう少し説明していただけるといいかなと。少し気になった言葉だったので。

山根

難しい質問ありがとうございました。よく言いますけれども「赤信号、みんなで渡れば怖くない」ではありませんけれども、今おっしゃいましたように、私たちは誰かがそう言うと流れていくという傾向というのは、私たちの中に大変あると思います。きのうもテレビを見ていましたら、例の早稲田の斎藤投手の持っているあの汗ふきのタオルは、どこに売っていますかというような問い合わせが殺到していると。汗をふけばいいのに何でそれをわざわざ…やはり青いのが必要なのかというような思いがあります。自分にとってそれはどんな意味があるのかを考える前に、何か流されていっているという感じがして怖いと思うのです。

そういう意味で私は何を考えるのかということを前提にしながら、しかしその集団の中で共に私が何を考えているかということを認め合っていく中で、やはりある意味ではコンセンサスの意見というのは生まれてくると思うのです。個が何も考えない中で全体が生まれていくことの怖さというものは、私はやはり私自身のまた世代的な体験もありますので、といっても安保体験などそういうことでございますけれども、やはり流されない個をつくっていきたいということを育てたいと思っているのです。

ちょっと長くなりますが、先ほどのタイのワークキャンプの話です。ある工業高校の学生が本当に勉強が嫌いだったのです。学校の先生が「どうや、ワークキャンプでも行ってこいよ」とうまくその先生が言ってタイのワークキャンプに行くことになったのです。それで帰ってきて彼が言った言葉はこういうことだったのです。「先生、僕は学校に全然行きたくないと思って、工業高校も嫌でたまらなかった。ところがタイの子どもたちは行きたいのに行けない子どもたちがいる。これには自分はびっくりした。もう僕は今日から変わる」と言って、そればかりではなくてそのタイの子どもたちのために自分1人で保育園、幼稚園を回ってギターが好きで上手に弾けましたので、コンサートといいますかみんなで歌いながら衣類を集めたりして、やがて自分でタイ語を勉強してコミュニケーションができるようにまでなっていくのです。その人はずっと英語はできないのです。しかし、タイ語はできる。そういう意味では自らがある価値観を形成していって、個として生きていきながらそれがやはり全体というか、社会というか、多くの人のためにつながっていくというような、そんな生き方をうまくできたらいいというような感じで、個ということだと。

村越（大学生）

Piece Of Peace のスタッフをしています村越と申します。質問というよりかは、提案、コメントなんですけれども、僕は第1回の K-PIT に参加したんですけれども、参加してそのあとに気付いたことは、セミナーの中でボランティアというキーワードを挙げて、それでディスカッションなり、何か体験を取り入れてはどうかと思っているのです。

まず、僕たちは第1回のセミナーに参加して P.O.P という団体をつくったんですけれども、やはりその中でも実際、最初は60人とかすごい人数が集まったんですけれど

も、実際はやはり組織の運営というのもすごく難しくて、やはりボランティア団体ということなので個々の意志によってそういった活動なり、団体というものは築かれてくるものなので、そこら辺のマネージメントというか、管理というのもボランティア団体はすごく難しいのです。

そういったボランティアの在り方は人それぞれあると思うんですが、せっかくこういった国際的なテーマのセミナーなので、何か自分の気持ちや思いを反映させられるようなボランティアについて語り合う場をつくって、その上でまた何か発展的な活動が生まれるかもしれないので、そういったものを取り入れていただいたらいかがでしょうか。

あとはP.O.Pという団体はまだ今のところは1つですが、今後また新たな違う分野でもどんどんこういう団体が生まれてきたら、それはそれですごくうれしいと思うので、そういった団体同士の交流の場ができれば、ということです。

富岡

NPO、NGOといろいろなボランティア活動を行政のほうも取り入れていかなければならない。それがなければ行政や企業、あるいはそういう既存の団体では物事が動かないというのは段々と認識が広まっておりますので、われわれも含む各既存の団体はそういうところをファシリテートする活動を容易にするような、なんらかの方向を生み出していかなければならないと常に感じております。

杉山（学生アドバイザー）

学生アドバイザーとして参加させていただいた経験からですが、参加者の出身校を見てみますと、やはり片寄りがあるというか、例えば県立神奈川総合高校や県立外語短大付属高校、それこそ佐久間先生がいらっしゃる横浜国際女学院翠陵高校などの生徒さんが結構いらっしゃるとは思うんですけれども、それ以外の高校となると過去の経験者の数でいうと少ないと思うのです。県で実施しているということから考えても、もっと神奈川の甲子園の予選を見ても200何校はあると思うので、そこに平等に情報が伝わっているかどうかとか、チャンスの面でももう少し機会を広げられればと思うんですけれども、その辺はいかがでしょうか。

安藤（K-FACE職員）

このセミナーの募集要項は、県内ほとんど全ての県立高校、私立高校、それから市立高校に送っております。校長や社会科主任の先生あてにお送りするのと、協力的な先生のお名前が分かっている学校の場合は先生の個人名で送っております。

ただ、高校側の事情として、多種多様なお誘いのお手紙が非常に多いことがあり、その中に紛れてしまうという問題があることが、最近の電話調査で分かりました。今回のセミナー実施前に、K-FACEのスタッフが4人がかりで手分けして200校ぐらい電話をしたのです。送ったところのほとんど全部に電話をしまして、「募集要項は届いていますか」「ご覧いただけましたか」「掲示していただけましたか」というところまで確認したのですが、そのうち半分ぐらいが「まだ見ていません」という回答でした。

本事業を担当する職員としましては、そういったところでもう少し高校の先生方とK-FACEとのネットワークが必要だと感じております。この事業を始めてまだ3年目

ですので、今後もどんどん拡大していければと考えております。学校の先生方、どうぞよろしくお願いいたします。

佐久間

ちょっと今の質問に関連して、今までの過去の参加人数をひとつの表にまとめてみたのですが、かなり片寄りがあるという杉山さんの指摘がありましたけれども、確かに参加している学校は公立、私立を問わず横浜地域と横須賀三浦地域の学校にほとんど集中しています。神奈川はもっと広いんですけれども、それ以外の学校からの参加がないというのが現状なのです。確かに参加経費の点や２泊３日の宿泊型研修というなかなか参加しづらいセミナーですけれども、もっと幅広く各学校から１人でも２人でも参加してもらえれば、かなりの参加人数になるということで、横浜、横須賀三浦地域以外の他の地域の学校の取り込みが、今後の課題ではないかということです。

そういうことで、例えばこの湘南国際村センターというのは非常にいい施設なので、この施設を使ってセミナーをやるのは非常にいいんですけれども、「遠い」というイメージがそれ以外の地域の人から持たれてしまうのかと。そういうことからすると、湘南国際村以外の所でセミナーを開催して、神奈川の西のほうの地域の学校の生徒にも参加してもらえるような、そういったことも今後考えていったらどうかと思っています。

横田（高校教諭）

神奈川県立横須賀高校の横田と申します。私は以前、江藤先生がおやりになった「グレート・ブックス・セミナー」を傍聴させていただいて、今日も午前中にK-PIT見せていただいて、本当に素晴らしいセミナーだと思っているのです。なんとかして生徒を連れてきたいとずっと思っていまして、やはり２、３日受験勉強するよりも、こういうのに出たほうが自分の学ぶ意味や自分の生き方などを考えてかえって良いのではないかと思っているのです。

ただ、春休みにクラスの生徒に言ったときに、全体に言ってもやはり来ないのです。高校生だとどうしても部活がすごく忙しい。それから塾に行っているということで、なかなか来ないので、１本釣りで保護者会の時に親に「どうですか」みたいな感じで言った中で来た子が２人ほどいて、その子たちはこの夏に市の交換留学生で２週間ほど外国に行っている子がいるんです。どうしたら生徒が参加できるかとずっと思っていまして、例えば今学校のほうで高大連携といって大学の授業を傍聴させて、それを単位の中に入れられないかというような話を少し検討したりもしているのです。

ただ、そういうかたちで少しでも来やすいようなかたちをつくるにしても、日程が前年度には分かっていないと、その計画も立てられないのです。ですから、例えばこれに関しても今度は春休みにやると思っていたので、夏に急にあったのでできれば早めに日程が分かれば少しは対応がしやすいと思うので、その辺をお考え願いたいと思います。

速水（神奈川県国際交流協会職員）

神奈川県国際交流協会の速水と申します。最初に感想なんですけれども、私は高校時代を過ごしたのが東京だったのです。神奈川に仕事で初めて住むようになってこういった活動がすごく活発に、このK-PITのセミナーや、この下の会場で今やっていらっ

しゃるユース国際ボランティアフォーラム関連の、いろいろな高校生を対象とした国際人材の育成という活動は非常に大事だし、長く続けていくことで勝俣先生がおっしゃっていたように5年、10年やってやっと成果が見えてくるのではないかというご意見に、私も本当にそうだと思いますので、続けていっていただきたいと思います。こういった活動ができるのも、多分資金面でのサポートが県からあるからでしょう。県の方もいらっしゃるということなので、今後ずっと続けていく姿勢でいらっしゃるのかどうかをぜひお伺いしたいのが1点です。

また、もし可能でしたら、高校生の時からこういった国際感覚というか、自分たちのことだけではなくて世界に目を向けるきっかけが与えられて、P.O.P さんのように実際にアクションを起こしたとして、大学でそういったことも勉強して、さらにもっと仕事にとか、仕事としてではなくてもずっとボランティアとして続けていくといったときに、NGO や NPO というのがその受け皿になると思います。ですので、NGO、NPO というのもまた資金面で非常に苦労している面もありますし、私も仕事柄、そういった NGO の支援をしている立場にありますので、そういった点、そこに関しても県の姿勢をお聞きしたいと。可能でしたらよろしくお願いします。

山崎（K-FACE 常務理事）

私はK-FACEの常務理事をやっていまして事務局長の山崎です。来年度、速水さんのいらっしゃる神奈川県国際交流協会と統合する予定ですので、ぜひ良い仕事をやっていきたいと思っています。最初にこの事業の経過をご説明しますと、県の総合計画の重点プロジェクトというのがありまして、私どもはそれに同調したという部分があります。現在、神奈川県は新たな総合計画をつくっておりますので、その中で今までと同じようなかたちで位置付けてもらいたいと、そういう要望は県に出しております。

それから NGO の関係というのは私どもよりむしろ国際交流協会のほうが先輩でして、逆に私どもが教わらなければならないところが多いと思います。ただ、私どもは地域の NGO あるいは法人の資格を持っているかどうかは別としまして、一緒に仕事をやっておりますので、そういう中で勉強しながら国際交流協会と一緒になる中で新しい仕事をやれたらと思っています。

富岡

最後に研究会座長の勝俣先生に最後の締めをお願いしたいと思います。

勝俣

締めの言葉ということですが、まだまだ研究会を重ねる必要はありますけれども、やはり僕は神奈川県というのは日本の県の中でも、県という枠にとどまらないいろいろな大きな問題に取り組むという意志がかなりあると思うのです。地球市民プラザができたというのも…なかなかああいうものは造りにくいご時勢だと思うのです。そういう厳しい状況の中でやはりそれを運営しているというのは、勇気のある施設だと思っています。今回のプログラムも、神奈川県のみの問題に留まらず、やはり県の問題というのは世界の問題だし、日本の問題だし、そういうものを若い人と一緒に考える、そういう具体的なことができました。そういう意味では、他の先生方と一緒にこうしたプログラムをサポートして、県のほうもやはり腰を据えて、本当にやる気があるの

でしたら、これからもある意味での資金的、人的サポートをしていただければと思います。そうすれば、他県でももっとこのカリキュラム内容を共有したいと言ってくるかもしれないのです。実際に、前回のセミナーと最後の研究会には、福島県でも宿泊型のセミナーを始めたいということで、職員が研修にいらっしゃいました。

ですから、これはまだパイオニアの世界です。フロンティアの世界なのできょう締めるなんていうことは当然できませんが、国際社会の中でもいや応なしに市民が巻き込まれていく時代なので、なるべく先生方も一緒にこうしたプログラムをサポートして、いろんなところでこれを模倣していただきたいし、その経験を共有できればと私は個人的には思っております。

富岡

本日は活発なご質問、ご意見ありがとうございました。そういう志で先生方もご協力くださっておりますし、われわれ事務局もここでやめるという気は全くございません。日本中あるいは世界中がこれをモデルにすることを夢に描きながら、頑張っていきたいと思います。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

（以上）

第４部

（特別寄稿）

「高校生世代を対象とした
　　グレート・ブックス・セミナーの可能性」

江藤 裕之（長野県看護大学 助教授）

平成16年度から始まった湘南国際村青少年国際セミナー（以下、K-PIT）では「世界の入り口に立とう」をテーマに、将来国際社会に羽ばたく高校生世代に幅広い内容の学びの場を提供することができた。プログラムでは専門家による講義に加え、参加型学習の手法が随所に取り入れられ、異文化理解や「豊かさ」について、そして安全保障の問題まで多彩な内容が実施された。これまでに開催してきたK-PITはすばらしい成果を収め、セミナー終了後も参加した高校生たちが自主勉強会のグループやボランティア団体を作るなど、さまざまな分野での国際的な支援活動を開始している。このようなセミナーでは参加者に一時的な刺激を与えることはあっても、それがなかなか「実行」として持続しないものであるが、その意味でK-PITの成果は特筆されるべきものといえよう。

このプログラムのひとつに「リベラル・アーツ教育」という位置づけで、K-FACEが発足以来10年以上にわたり重点的に研究を進めてきた「グレート・ブックスセミナー」の手法を用いたセッションが加えられ、国際的に活躍する人材に相応しい教養とは何かについて考える場を持った。そこでは、目に見えないものを「考える」ことの意味、言葉遣いの大切さ、読書（古典に接すること）による人間的成長などがテーマとなった。「グレート・ブックス」のセッションでは、限られた時間内で書物を1冊読んで討論することは不可能なので、「目に見えないものの価値」や「古典に触れることの意味」を少しだけ体験し、知的な刺激を与えることを目標とした。参加者の中から少しでも古典と呼ばれる書物を紐解いてくれればいいという期待とともにセッションを終えた。しかし、少ない時間で多くのことを盛り込みすぎた内容だったため、参加者から「大切だということは分かったが、今ひとつ十分理解したとはいえなかった」というリアクションが多くあった。担当者としても、2時間程度の時間で、一度に60人の参加者を相手にするのだから十分な対話もできず、一方的な講話のような形になりやはり消化不良だった。

そこで、K-FACE職員と少人数でセミナーをじっくりやりたいですねという話をしていたときに、ちょうど参加者の数名から「もう一度、やってみたい」とのリアクションがあり、その後自主セミナーを開催する運びとなった。青少年国際セミナーのひとつの継続型プログラムがこうして始まることは大変嬉しいことである。

第1回の「K-PITグレート・ブックス・セミナー」は、2005年9月18日（日）、横浜駅前のかながわ県民活動サポートセンター「第1会議室」で行われた。参加者は、K-PITに参加した高校生3名と、K-FACE職員2名の合計5名で、討論をじっくりやるには理想的な人数であった。当初、午後1時から4時までの3時間の予定であったものが、実際には5時近くまで討論は続いた。

テキストにプラトン『メノン』（藤沢令夫訳、岩波文庫版）を選んだ。いくつか理由があるが、第一にそれほど分厚い本でないということと、内容が対話からなり、それほど難し

い用語が使われていないという点だ。最初から大著に挑戦するのも意味のあることだが、まずは全体を読んでみて、ひとつの達成感を味わうということも入門段階では大切ではないかと思う。そして、『メノン』はソクラテスの対話編の手法、つまり、様々な質問を通して相手の論理的な矛盾を突いたり、自分の無知を悟らせるというソクラテスの手法――産婆術――が見事に展開されており、「ダイアローグとは何か」を知る意味でも最適の入門書といえる。さらに、目に見えないものの価値を問う意味、自分の知らないものを探求することの意味、ものの本質を問う意味、といったことがテーマとして取り上げられていることからも、哲学の精神にじかに触れる思いがするのではないだろうか。

セミナーは、簡単な自己紹介の後、できるだけ対話ができるようにという配慮から、いきなりテキストの内容には入らず、参加者それぞれの読書体験や本を読むことの思いなどを語ることから始めた。そして、「考える」ということはどういうことか、「考える」ためには何を道具として使っているのかなどを自由に討論したのち、テキストの内容へとシフトしていった。

『メノン』は、「徳」という問題について、それが「人に教えることのできるもの」か、あるいはそうではなく「訓練によって身につけられるもの」かというメノンの問いたてで始まる。それを問われたソクラテスは、「徳とはそもそも何であるか」という問題に置き換え、「徳」の概念規定が始まる。そして、メノンは次々とソクラテスの質問にやり込められ、ついには行き詰ってしまう。第１回目のセミナーでは、テキストのすべての内容を吟味し、そこから討論へと導くことは時間的に無理であったので、まずはこの第一の問題設定について考えてみた。つまり、「人に教えることのできるもの」と「訓練によって身につけられるもの」とはどのように違うのか、また、どうしてソクラテスはそういった問いを徳の本質の問題へと摩り替えていったのか考えてみたのである。

もちろん、「グレート・ブックス・セミナー」はあらかじめ正解を用意して、それに参加者を導こうとするものではない。このセミナーで大切なことは、考えの異なる人との対話を通じて、よりテキストの内容を正確に理解することなのだ。すると、参加者から、「人に教えることのできるもの」とはつまり言語化できるものであり、「訓練によって身につけられるもの」とは言語化できないもの、であるという指摘があった。そこで、言語とはいかなるものかという議論へと進み、それはコミュニケーションの手段であると同時に、外界を認識する手段でもあり、また人間の共通認識を伝え、ひとつの文化として保存する役割を持つものであるという点まで話が広がった。

筆者は、大学で英語を教える傍ら、一般教養科目として言語学を教授しているが、この時の高校生との「グレート・ブックス・セミナー」ほど知的に刺激を受け、また感心した

こともなかった。高校生は、言語学の学説史や理論を詳しく知るものではない。むしろ、何も知らないといってよい。しかし、しかるべき質問を投げかけ、それに対する応答を繰り返していくうちに、そこに現れてきたのは、ソシュールの言語観であり、フンボルトやサピアのそれであった。

これまで、5回以上にわたって、湘南国際村でK-FACE主催の「グレート・ブックス・セミナー」をやってきたが、参加人数が多かったのと、国際会議のような形式で行われたということもあり、テキストの筋を確認するのが精一杯で、その背後に潜む「グレート・アイディアズ」まで到達することはなかった。しかし、高校生3名と社会人2名のセミナーでは、ダイアローグ式の、つまり「魂がかつて見てきたものを想起させる」という手法が本当に可能なのだという意を堅くした。高校生の参加者諸君が、対話の中で、実に見事な言語学の理論を展開させていくさまは感動的であった。

今後もこうした対話型の読書を継続することを通じて、「哲学する」というのはどういうことであるかが参加者により深く認識されることであろう。参加者の一人は「次回は友人を連れてきてもいいですか」と言ってくれた。ささやかではあるが、求める者に対して「グレート・ブックス・セミナー」を地道に実践していくことが、古典に親しみ、古典に学ぶことの意味を伝えていく最良の方法だと感じた次第である。ソクラテスも、いつも数人を相手に対話していたのだから。

（以上）

平成 16 年度～17 年度
「青少年国際人材育成研究」研究報告書
平成 19 年 3 月

財団法人かながわ学術研究交流財団（K·FACE）
〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口 1560-39
電話：046-855-1822　FAX：046-858-1210